

南有馬町文化財調査報告書第2集

# 原城跡

1996

長崎県南有馬町教育委員会

南有馬町文化財調査報告書第2集

# 原城跡

1996

長崎県南有馬町教育委員会

## 発刊にあたって

平成10年（1998）は、「島原の乱」の舞台となった原城跡が幕府軍の総攻撃によって落城して360年目を迎えます。

原城跡は1938年に国指定史跡となり、1977年より国及び県の補助を受けて土地公有化を進めております。一方、保存環境整備については原城跡管理保存計画に基づく第4次までの発掘調査により、原城の城郭構造を検討するうえでの検出並びに「島原の乱」を想い起こすにたるキリストン遺物が多数出土しました。

昨年には、「原城跡調査整備指導委員会」も新たに発足し今後さらに原城跡の実態把握とその歴史的、文化的調査研究、保存活用のあり方などについて指導を受けるなかで、検討考察を深めてゆくことにしております。

21世紀を目前にして、よみがえる原城跡に私どもも大きな期待をよせているところです。

この調査報告書が埋蔵文化財に対する理解と重要性、すばらしさを感じただけましたら幸いです。

終りにこれまでの調査等に御指導、御協力をいただきました国、県の関係各位はじめ地域の方々に対し心より感謝申しあげます。

平成8年3月31日

南有馬町教育委員会教育長 松下久美雄

## 例　　言

1. 本書は、長崎県南高来群南有馬町に所在する、原城跡における発掘調査の報告書である。
2. 調査は国庫補助事業として実施したもので、調査期間はつぎのとおりである。
  - 1次調査 平成4年8月31日～平成4年11月10日
  - 2次調査 平成5年9月6日～平成6年2月10日
  - 3次調査 平成6年9月5日～平成6年11月2日
3. 調査関係者は以下のとおりである。
 

調査指導	田中 哲雄	文化庁記念物課
田川 肇	長崎県教育文化課課長補佐	
南有馬町教育委員会	松本 增二	学芸員（調査担当）
4. 整理において、佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長大橋康二氏、26聖人記念館館長結城了悟氏、九州帝京短期大学櫻木晋一氏をはじめとして多くの方々から指導・教示を受けた。感謝申し上げたい。
5. 地質は日本地質学会田島俊彦氏、原城跡の概要是九州大学教授中村寅氏、貨幣は九州帝京短期大学櫻木晋一氏より玉稿をいただきいた。
6. 実測図作成・製図について宮嶋真由美、森千加子、菅志穂、南有馬町役場菅雄二、田口享史の助力を受けた。
7. 本書関係の出土遺物と図面および写真類は、現在、原城文化センターに保管している。
8. 本書の編集は、松本による。

## 本文目次

1. 原城地域の地質 .....	1
2. 原城跡の概要 .....	18
3. 調査の概要	
(1) 調査経緯 .....	28
(2) 調査の経過 .....	28
(3) 基本層位 .....	30
4. 遺構	
(1) 進柵概要 .....	35
(2) 積穴遺構 .....	35
(3) 土壙 .....	35
(4) 階段遺構 .....	41
5. 遺物	
遺物概要 .....	43
(1) 貿易陶磁器 .....	44
(2) 国産陶磁器 .....	54
(3) 土器・土製品 .....	66
(4) 石製品 .....	66
(5) キリストン関係 .....	69
(6) 貨幣 .....	74
(7) 金属製品 .....	80
(8) 瓦 .....	85
6. 総括	
(1) キリストン関係遺物 .....	100
(2) 積穴遺構 .....	102
(3) 階段遺構 .....	104

## 挿図目次

第1図 南有馬町遺跡地図

第2図 原城地域の地質図	2
第3図 浅間神社～駒崎鼻南部海岸の地質断面図	6
第4図 三の丸北方～駒崎鼻海岸の地質断面図	6
第5図 三崎～田尻門海岸の地質断面図	6
第6図 城山出丸～本丸東海岸の地質断面図	6
第7図 田町御門西方～天草丸海岸の地質断面図	7
第8図 大江貝層～東西方向の地質断面図	7
第9図 肥前鶴原 城郭図	24
第10図 原城跡地形図	27
第11図 調査地点位置図	29
第12図 土層断面図①	31
第13図 土層断面図②	32
第14図 土層断面図③	33
第15図 土層断面図④	34
第16図 穴式造構実測図	36
第17図 土壌実測図①	38
第18図 土壌実測図②	39
第19図 土壌実測図③	40
第20図 階段造構実測図	42
第21図 中国磁器①	46
第22図 中国磁器②	47
第23図 中国磁器③	48
第24図 中国磁器④	49
第25図 中国磁器⑤	50
第26図 中国磁器⑥	52
第27図 中国磁器⑦	53
第28図 日本磁器①	55
第29図 日本磁器②	56
第30図 日本陶器①	58
第31図 日本陶器②	59

第32図 日本陶器③	60
第33図 日本陶器④	61
第34図 日本陶器⑤	62
第35図 日本陶器⑥	63
第36図 日本陶器⑦	64
第37図 日本陶器⑧	65
第38図 土器・土製品	67
第39図 石製品	68
第40図 十字架①	70
第41図 十字架②	71
第42図 メダイ	72
第43図 ロザリオ	73
第44図 豆板銀①	75
第45図 豆板銀②	76
第46図 銭貨	78
第47図 青銅製品①	80
第48図 青銅製品②	81
第49図 青銅製品③	82
第50図 鉛製彈丸	83
第51図 鉄製彈丸	84
第52図 鉛製品	84
第53図 軒丸瓦実測図①	85
第54図 軒丸瓦実測図②	86
第55図 軒平瓦実測図	87
第56図 丸瓦実測図①	88
第57図 丸瓦実測図②	89
第58図 鯰瓦実測図①	90
第59図 鯰瓦実測図②	91
第60図 キリシタン関係遺物出土分布図	101
第61図 島原の乱図屏風に見える竪穴の諸形態	103
第62図 原城絵図	105
第63図 原城要図	105

## 図版目次

図版A 原城跡地質①	14
図版B 原城跡地質②	15
図版C 原城跡地質③	16
図版D 原城跡地質④	17
図版1 原城跡遠景	109
図版2 調査区風景	110
図版3 土層	111
図版4 整地層	112
図版5 竪穴遺構	113
図版6 土壙	114
図版7 土壙／階段遺構検出状況	115
図版8 階段遺構	116
図版9 階段遺構	117
図版10 調査風景／遺物出土状況	118
図版11 キリシタン関係遺物	119
図版12 キリシタン関係遺物	120
図版13 中国磁器	121
図版14 中国磁器	122
図版15 中国磁器／日本磁器	123
図版16 日本陶器	124
図版17 日本陶器	125
図版18 土・石製品	126
図版19 豆板銀	127
図版20 金属製品	128
図版21 瓦	129

## 表目次

第1表 原城付近の火山層序	2
第2表 原城地域の地質図 凡例	3
第3表 原城付近の大屋層下部層と大屋層上部層	4
第4表 原城地域の第四系層序区分 対比表	5
第5表 遺物観察表①	92
第6表 遺物観察表②	93
第7表 遺物観察表③	94
第8表 遺物観察表④	95
第9表 遺物観察表⑤	96
第10表 遺物観察表⑥	97
第11表 遺物観察表⑦	98
第12表 遺物観察表⑧	99

# 1. 原城地域の地質

田島 俊彦

## I はじめに

原城の浦田・浅間神社・駒崎・北三の丸・三崎・三の丸・出丸・二の丸・西二の丸・鳩山出丸・本丸・天草丸等全城の東西800m×南北1,200mには、口之津層群大屋層・北有馬層を被って、標高30m～5m±の低い海岸段丘を形成して阿蘇火砕流堆積物が分布している。これら口之津層群大屋層・北有馬層や阿蘇火砕流堆積物の累重関係・層厚・地質時代・層序区分等は、第1図・第1表・第2表・第4表の通りである。

南島原地方の口之津層群については、これまでに井上、1953、大塚、1966a、鎌田、1977、渡辺、1982、渡辺・益田、1983、大塚・古川、1988等多数の研究があるが、ここでは主に井上、1953、大塚、1966a、大塚・古川、1988の見解を再検討した。また、原城地域の口之津層群や阿蘇火砕流堆積物については、渡辺、1982、渡辺・益田、1983を参考にした。地質調査にあたっては海綿類骨針・地層を構成する火山ガラス・重鉱物の観察も実施した。

## II 口之津層群について

口之津層群 Kuchinotsu Group：口之津層群については口之津層群として大塚、1966aが命名し、大屋層（下部大屋層・上部大屋層）・加津佐層（下部層・中部層・上部層）北有馬層・南串山層の4層に区分した（口之津層群の全層厚=1,000m）。その後、大塚・古川、1988は、層名を口之津層群から口之津層群に変更し、地層・部層名を大屋層下部層・大屋層上部層・加津佐層・南串山層・西正寺層・北有馬層に区分した（口之津層群の全層厚=965m）、大塚・古川、1988の地質図を検討した結果、大屋層上部層・加津佐層・南串山層・西正寺層・北有馬層の一部は、各フィールドにおいて連続的な地層であり、地層や部層の間に境界が認められず、それぞれに同時異相の関係にあることが判明したので、大塚・古川、1988から西正寺層を削除して大屋層下部層・大屋層上部層=加津佐層=南串山層=北有馬層として調査及び考察を進めている。

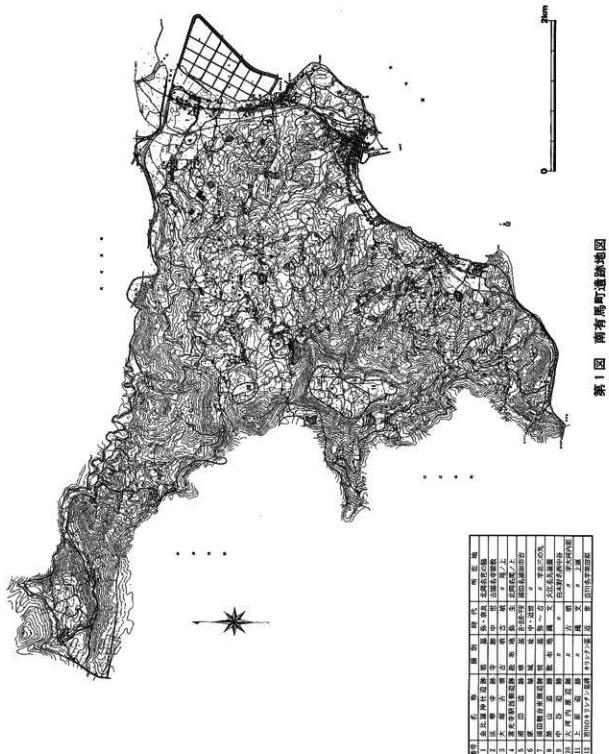
## III 原城付近の地質

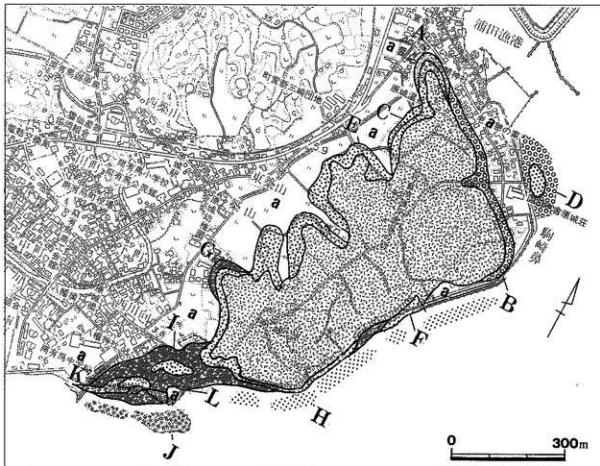
### [1] 大屋層 Oya Formation

大塚・古川、1988は大屋層を大屋層下部層（200m）と大屋層上部層（260m）に区分した、原城地域には、東海岸に大屋層上部層がわずかに分布し、その上位を阿蘇火砕流と大江貝層が被覆するとした。また、渡辺、1982は、本地域の最下部に口之津層群が分布し、その上位を御領凝灰岩・大江層・阿蘇一火砕流および低位段丘疊層などが被覆するとしている。

原城付近においては、最下部の大屋層下部層・大屋層上部層を被って、北有馬層が分布し、さらに、最上部を阿蘇火砕流が被覆している。また、本地域の大屋層は、大屋層下部と大屋層上部層の境界付近が、次の第3表の通りおもに海岸付近に露出している（第3図～第8図）。

大屋層下部層と大屋層上部層の境界付近が、つぎの通り露出している。





第2図 原城地域の地質図

第1表 原城付近の火山層序

地質系	統層厚	地質と地質時代	記号
沖積層	0.3m~3m	沖積地 田・畑の表層土	a
阿蘇火砕流堆積物	0.7m~20m	阿蘇一4火砕流=07~09万年前 阿蘇-3火砕流=11~12万年前	Apf
北有馬層			
更新世 中期	12m±	大江貝層	☆ Osh
～前期	1m~5m±	中標岩層	Kpc
		粗粒凝灰岩層	Kct
		凝灰質泥岩層	
大屋層上部層	5m±	1.43±0.27FT Ma(南串山層)	
更新世 中期		基底標岩層	Khc
		含貝化石中標岩層	
		～シルト岩層	Oum
		二枚貝化石を含む	
		中標岩層～シルト岩層	
大屋層下部層	3m±	有馬火砕流堆積物	Awt
更新世 前期	5m±	1.76±0.22FT Ma(大屋火砕流)	
		ラビリストーン層	Olt
		～粗粒凝灰岩層	
		12m±	黃白色一角閃石安山岩質 凝灰角礁岩層～
		水中共火砕流堆積物	
ラビリストーン層	10m+	灰緑色一角閃石安山岩質	Ols
更新世 前期		細粒凝灰岩層～	
		火山性シルト岩層	
		～火山性シルト岩層	

(注) FT: 放射年代測定法=フィッシュン・トラック法 Ma: 百万年の単位=Millions of years before the present. \*表中の放射年代測定値は大塚・古川、1988による。

第2表 原城地域の地質図 凡例

完新世 Holocene	沖積層 Alluvium	<b>a</b> 原城の橋・水田・市街地等 市街地等の表層部を構成
更新世 後期 Late Pleistocene	阿蘇火砕流堆積物 Aso pyroclastic flow deposit 灰黒・淡灰色～火山灰質～鈍石質火砕流 Afp	高純度マグマによって形成された阿蘇火山のマグマ爆発による火山灰質～鈍石質の非溶離の大火砕流
?	大江貝層 Oe shell bed 海棲貝化石層～砂岩～小標岩互層 Osh	全層厚=約12m 上部層=海成砂岩～小標岩互層=4.7m 中部層=海成貝化石層=3.3m 下部層=淡水～汽水成層=3.5m
更新世 中期 Middle Pleistocene	中標岩層 Pebble conglomerate 火成岩～堆積岩・変成岩の円標岩層 Kpc	層厚=1m～5m±の海成層で、斜層理が発達
北有馬層 Kita-Ima Formation	粗粒凝灰岩層 ～凝灰質泥岩層 Coarse tuff-Tuffaceous mudstone Kct	灰褐色粗粒凝灰岩～凝灰質泥岩・中標岩混じりの砂岩～泥岩層からなる海成層
更新世 中期 Middle Pleistocene	基底標岩層 Basal conglomerate 火山円標岩の巨標岩層 Khc	角閃石安山岩・角閃石複輝石安山岩・複輝石安山岩・カルラン石岩武岩等の火山円標岩からなるほぼ水平な巨標岩層
大屋層 Oya Formation	含貝化石中標岩層～シルト岩層 Molluscan fossils bearing Pebble conglomerate-Siltstone 淡黃褐色～含貝化石中標岩～シルト岩層 Oum	含貝化石化石層～黃褐色シルト混じり中標岩層～淡黃色シルト層～粘土層
更新世 前期 Middle Pleistocene	有馬火砕流堆積物 Arima pyroclastic flow deposit 灰黑色～溶離凝灰岩 Awt	鉄輝輝石・角閃石混じり 鈍石質～スコリ質 灰黑色～溶離凝灰岩
大屋層 Oya Formation	ラビリストーン層～粗粒凝灰岩層 Lapilli-stone-Coarse tuff 黃白色～角閃石安山岩質 粗粒凝灰岩層 Olt	水中火砕流～ ラビリストーン層～ ～粗粒凝灰岩層 全層厚=約12m
更新世 前期 Early Pleistocene	細粒凝灰岩層～ 火山性シルト岩層 Fine tuff-Volcanic siltstone 灰褐色～粗粒凝灰岩～火山性シルト岩層 Ols	灰褐色火山性砂岩～ シルト岩～粘土岩～ 灰褐色火山性シルト岩層 層厚=10m+

第3表 原城付近の大屋層下部層と大屋層上部層

2. 大屋層上部層 Oya Formation Upper Member	全層厚：層厚=18m+
(4)貝貝化石中疊岩～シルト岩 Molluscan fossils bearing	
Pebble conglomerate～Siltstone～海成層（層厚=3m+）	
(3)有馬火砕流堆積物 Arima pyroclastic flow deposit	陸成層（層厚=5m±） 非整合
1. 大屋層下部層 Oya Formation Lower Member	全層厚：層厚=10m+
(2)ラピリストーン～粗粒凝灰岩 Lapillistone～Coarse tuff	湖成層～一部海成層 (層厚=12m±)
(1)細粒凝灰岩～火山性シルト岩 Fine tuff～Volcanic siltstone	海成層～一部湖成層 (層厚=10m+)

## 1. 大屋層下部層 Oya Formation Lower Member

## (1) 細粒凝灰岩～火山性シルト岩 Fine tuff～Volcanic siltstone

細粒凝灰岩～火山性シルト岩は、鳩山出丸西方・田尻門海岸・蓮池門海岸・本丸東海岸・天草丸東海岸・田町御門付近の最下部に露出（第9図）している。海成の灰緑色火山性粗粒砂岩～シルト岩～泥岩層で、大変堅く、塊状部分と層理が発達する部分とが層厚3mずつくらいに交互に堆積している。全層厚は約10m土が露出。これらの地層は、灰緑色シルト岩の層理面と斜交して多くの炭化樹幹・茎・葉片を含んでいる。鳩山出丸西方（第15図）では灰黄緑色火山性シルト岩層があつて南西に22°傾斜（走向・傾斜=N50W・22SW）している。田尻門東海汀の灰緑色細粒凝灰岩層は、南に18°傾斜（走向・傾斜=N83E・18S）。蓮池門東海汀の灰緑色細粒凝灰岩は、南東に21°傾斜（走向・傾斜=N62E・21SE）。本丸東海汀の淡緑色細粒凝灰岩は、南西25°の傾斜（走向・傾斜N55W・25SW）。田町御門付近では灰緑色塊状粗粒砂岩が分布するが層理は不明。天草丸金比羅神社の大江貝層の横付近から、灰緑色細粒凝灰岩が広く海汀まで分布しているが、その付近の地層は、南～南西に06°～08°の傾斜（走向・傾斜=N70E・08SE, N85W・06S）を示している。以上の通り細粒凝灰岩～火山性シルト岩はほとんど南東に、21°～22°もしくは南西に18°～25°傾斜している。また、地層を造る鉱物は斜長石およびバブルウォール（泡）型の火山ガラス・ヒル石がほとんどで、約0.2%の角閃石・酸化角閃石・海緑石・磁鐵鉄・イルメナイト等の重鉱物によって構成されている。さらに、ほとんどの地層には海棲微生物化石が確認できないので、淡水性～湖水成地層の可能性がある（第7図・第10図）。

## (2) ラピリストーン～粗粒凝灰岩 Lapillistone～Coarse tuff

ラピリストーン～粗粒凝灰岩層は、おもに原城東海岸～南東海岸に南東傾斜のケスター状に、層厚約10mが露出（第13図）している。本層は、斜交層理が発達し、良く発泡した白色軽石およびバブルウォー

ル（泡）型の火山ガラス混じり非溶結黃白色～粗粒凝灰岩層で、本丸東海岸のものは、層厚=0.4m土で、南～南東に17°～22°の傾斜（走向・傾斜=N75E・22SE, N85W・17S）をしめし炭化樹幹・枝・茎を多量に含有する。天草丸金比羅神社の30m北方のものは層厚=0.3m±で、南東に15°の傾斜（走向・傾斜=N80E・15SE）をしめし、層理は良く発達している。田尻門東海岸に分布するものは非溶結黃白色ラピリストーン～粗粒凝灰岩層で約0.5m±の層厚を持ち、南東に26°の傾斜（走向・傾斜=N20E・26SE）。蓮池門東海岸のものは、良く発泡した白色軽石およびバブルウォール（泡）型の火山ガラス混じり非溶結黃白色～粗粒凝灰岩層で南東に12°～18°の傾斜（走向・傾斜=E-W・18S, N65E・18SE, N50E・12SE, N75E・18SE）をしめし、下位層との境界付近に最大2m×1m×15cmの炭化樹幹・枝・茎や黒褐色に焼けこげた弱溶結水中火砕流等を挟む（第14図）。

本層の下部半層の層厚約0.5mは、大部分が非溶結水中火砕流であり、バブルウォール（泡）型の火山ガラスおよび良く発泡した白色軽石（蓮池門では白色軽石・黒曜石）を多量に含有する。また、上半部を造る地層は、層厚約0.5mで、非溶結黃白色安山岩質ラピリストーン～粗粒凝灰岩層である。これらの地層を造る鉱物は斜長石およびバブルウォール（泡）型火山ガラス・良く発泡した白色軽石がほとんどで、約1%土の紫蘇輝石・角閃石・酸化角閃石・海緑石・磁鐵鉄・イルメナイト等の重鉱物によって構成（第12図）されている。この地層はほとんど植物化石のみを挟んでいるが、本丸東海岸からは、まれにイシガメの甲羅化石が产出した（第10図・第13図）。

大屋層下部層は、ほぼN50E～N75Eの走向と、12°～26°の傾向をしめす。このことが上位の北有馬層（大江貝層）と異なる特徴である（第5図・第6図）。

第4表 原城地域の第四系層序区分 対比表

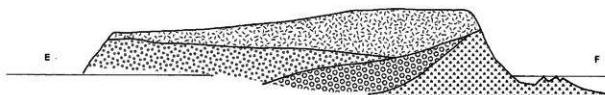
地 域 代 名	井 上 正 規	大 屋 層 之 前	大 屋 層 之 後	底 一 部	二 部	三 部	四 部	五 部	六 部	七 部	八 部	九 部	十 部
先 新 世 沖積層	秋田沖 砂質層	砂質層 ～冲積層		冲積層 ～砂質層 （大江貝層 ～大江層）	Alluvium	Alluvium	Terrace Deposit						冲積層 田・原の赤土層
新 世 更 新 期 河岸洪积层		大江層		冲積層 （大江貝層 ～大江層）		Lower Terrace Grav.	Lower Terrace Grav.	On Formation					冲積層 田原の赤土層
中 古 世 冲 積 層				冲積層 （大江貝層 ～大江層）	Ago Pyroclastic Flow Deposit	Ago Pyroclastic Flow Deposit	Ago Pyroclastic Flow Deposit	Tatsumi Formation					冲積層 田原の赤土層
更 新 世 小冲積層				中古世冲積層 砂質層			On Formation	Tatsumi sandstone					冲積層 田原の赤土層
新 世 大冲積層								Higuchi Formation					大江貝層
新 世 大冲積層 （大江貝層）								Surrounded basin					大江貝層
新 世 大冲積層 （上中下冲積層）								Kuchinotus Group					大江貝層
更 新 世 大冲積層								Mizunuma Kuroyama Formation					大江貝層
古 世 三 紀 古生層								Atogashima basal Kuroyama Formation					大江貝層
								Kuroyama Formation					大江貝層
								Atogashima Formation					大江貝層
								Omura basal Kuroyama Formation					大江貝層
								Omura basal Kuroyama Formation					大江貝層
								Konosaki endocline Molines and breccia Formation					大江貝層
								Molines and breccia Formation					大江貝層
								Omura basal Kuroyama Formation					大江貝層
								Makihara member Kuroyama Formation					大江貝層
								Yasukuni basal Kuroyama Formation					大江貝層
								Odourari Formation					大江貝層
								Palagonite System					大江貝層
								Palagonite System					大江貝層
								Palagonite System					大江貝層



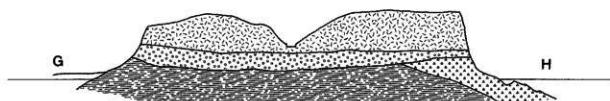
第3図 浅間神社～駒崎鼻南部海岸の地質断面図



第4図 三の丸北方～駒崎鼻海岸の地質断面図



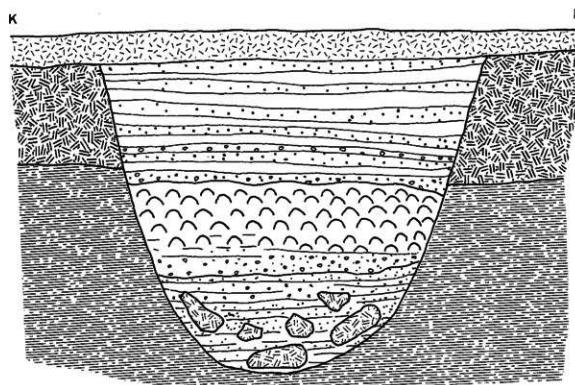
第5図 三崎～田尻門海岸の地質断面図



第6図 烧山出丸～本丸東海岸の地質断面図



第7図 田町御門西方～天草丸海岸の地質断面図



第8図 大江貝層～東西方向の地質断面図

## 2. 大屋層上部層 Oya Formation Upper Member

### (3) 有馬火碎流堆積物 Arima pyroclastic flow deposit (新称)

天草丸海岸に広く露出している。灰黒色軽石質弱溶結凝灰岩層は、比較的硬質で、波浪の侵食に抗してケスター状に取り残され緩やかな南傾斜(第9図)を示している。大塚、1966aは、本層を軽石質灰色凝灰岩岩と呼び、下部大屋層と上部大屋層に分帯する Key bed として使用し、本層の基底部から上位を上部大屋層とした。その後、大塚・古川、1988は同一層準である本層を、小利火碎流と大屋火碎流の2層に分けた。

筆者は、1970年ころより本層に興味を抱き、層序・岩相・構成岩石・火山ガラス・重鉱物等の検討を続けているが、大塚、1966の観察に尽きると結論し、有馬火碎流堆積物 Arima pyroclastic flow deposit と新称した。なお、渡辺、1982は、本層を御領凝灰岩と呼称し、口之津層群を不整合に被い大江層に不整合に被われるとした。

有馬火碎流は南に $0^{\circ}$ 傾斜(走向・傾斜=N70E・08S)し、海汀では、 $09^{\circ} \sim 12^{\circ}$ (走向・傾斜=N85E・12S, N65E, 09SE)を示し、大江貝層沖では南に $12^{\circ}$ 傾斜(走向・傾斜=E-W・12S)している。本層の層厚は約5m±。有馬火碎流は宮野木場・浦田堤に断続的に露出。また、天草丸(第9図)、南有馬中学校・南有馬漁港海汀・崎町・矢竹・大抜・夏吉・小利方面へは連続的に分布している。有馬火碎流は陸成の火碎流で、岩質は未発泡白色軽石・スコリアを多量に含有する灰黒色軽石質弱溶結凝灰岩で、地層を造る歴物は、斜長石およびバブルウォール(泡)型火山ガラス・未発泡白色軽石ラビリがほとんどで、約1%土のブロンサイト・紫蘇輝石・角閃石・酸化角閃石・海緑石・磁鐵鉱・イルメナイト等の重鉱物によって構成されている(第8図・第9図)。

本層は、有馬地方では灰石(Haiishi-Hyaishi)とよばれ、軽くて割れにくい特性を生かして石垣石・石臼・ひき臼・灯籠・墓石等に利用された。これらの製品は、島原半島全域に分布している。

有馬火碎流の時代については、大塚・古川、1988により約176万年前に放出された陸成の火碎流であることが判明しているが、阿蘇火碎流に酷似するために長い間これと混同されてきた。

### (4) 合貝化石中疊岩～シルト岩 Molluscan fossils bearing Pebble conglomerate～Siltstone

駒崎鼻の国民宿舎原城荘の北海岸には、黄褐色合貝化石中疊岩～シルト岩層が $150\text{m} \times 20\text{m}$ ほどに分布していて、北有馬層に不整合(第18図)に被われている。

黄褐色合貝化石中疊岩層は南東に $10^{\circ}$ 傾斜(走向・傾斜=N50E・10SE)していて、層厚=2m±。淡黄褐色シルト岩層は南東に $10^{\circ}$ の傾斜(走向・傾斜=N35E・10SE)、淡黄褐色シルト層は南東に $16^{\circ}$ の傾斜(走向・傾斜=N68E・16SE)。白色シルト層は南東に $05^{\circ}$ 傾斜(走向・傾斜=N58E・05SE)、淡黄色シルト岩層は南東に $16^{\circ}$ の傾斜(走向・傾斜=N68E・12SE)を示す。これらは、いずれも同一層準で、層厚=1m±である。黄褐色合貝化石中疊岩層の部分には、ホタテガイ類・アサリガイ類の化石断片や海綿類の珪質骨針を多産する。さらに、構成歴物は、斜長石およびバブルウォール(泡)型の火山ガラス・ヒル石(黒雲母の変質物)・石英粒のほか角閃石・酸化角閃石・紫蘇輝石・黒雲母・海緑石・磁鐵鉱・イルメナイト等を含有している。

三の丸北方には灰黒色凝灰岩質粗粒砂岩層が露出し、南西に $24^{\circ}$ 傾斜(走向・傾斜=N12W・24SW)している。三の丸北方の灰黒色凝灰岩質粗粒砂岩層には、海綿類珪質骨針(第19図)のほか海棲ケイソウ類のトリセラチュウム類(△形ケイソウ類)・コスキノディスカス類(○形ケイソウ類)・放散虫類化石を含有している。本層の構成歴物は斜長石およびバブルウォール(泡)型の火山ガラス・ヒル石(黒雲母の変質物)・石英粒のほか角閃石・酸化角閃石・黒雲母・海緑石・磁鐵鉱・イルメナイト等(第17図)を含有している(第3図・第4図)。

## [2] 北有馬層 Kitaarima Formation

大塚・古川1988によれば、北有馬層は南串山層・西正寺層を不整合に被う層厚=250m±の海成層であると定義している。原城地域には、北有馬層の下部にあたる地層が分布している。全体的に斜交層理のよく発達した地層で、下位より基底疊岩層・粗粒凝灰岩層・凝灰質泥岩層・中疊岩層・大江貝層がほぼ水平に堆積している(第2図・第2表・第16図)。

本地域の北有馬層は角閃石安山岩・紫蘇輝石閃石安山岩・輝石安山岩・玄武岩等の火山円疊岩・チャート中円疊・巨疊岩混じり火山円疊岩・チャート中円疊混じり中疊岩・チャート中円疊混じり粗粒凝灰岩・凝灰質泥岩などから構成され、大屋層が堅いとのことは対照的に、ハンマーを当てるときザクザクと崩れる。全層厚は約15m±の海成層である。また、北有馬層は約143万年前の火山活動によって堆積した海成層と考えられている(第18図)。

### 北有馬層 Kitaarima Formation

	原城地域の全層厚=15m+
4. 大江貝層 Oe shell-bed	海成層(層厚=12m±)
3. 中疊岩層 Pebble conglomerate	海成層(層厚=5m±)
2. 粗粒凝灰岩層・凝灰質泥岩 Coarse tuff～Tuffaceous mudstone	海成層(層厚=5m±)
1. 基底疊岩層 Basal conglomerate	海成層(層厚=5m±)

### 1. 基底疊岩層 Basal conglomerate

駒崎～駒崎鼻海岸から浅間神社～北三の丸～大手門～南三の丸北東の崖から海汀にかけて層厚=5mの基底疊岩層が分布している。駒崎鼻原城荘の北海岸には、150m×20mほどの範囲に大屋層の黄褐色合貝化石中疊岩層～シルト岩層を破って角閃石安山岩・紫蘇輝石角閃石安山岩・複輝石安山岩・玄武岩などから構成された基底疊岩層(第18図)が露出している。ここでの層厚は約2mで下部層のマトリックスには、黄褐色合貝化石中疊岩層～シルト岩層の岩片と貝化石片を挟んでいる。おそらくは、下位にある大屋層中の物であろう。本層は北へ $01^{\circ} \sim 02^{\circ}$ 傾斜(走向・傾斜=N80W・01~02N)していて、浅間神社付近で、粗粒凝灰岩・凝灰質泥岩に被われている。恐らくこの基底疊岩層と粗粒凝灰岩～凝灰質泥岩は指交関係にあるものと思われる(第3図・第4図)。

本層の構成歴物は斜長石およびバブルウォール(泡)型の火山ガラス・ヒル石(黒雲母の変質物)・石英粒のほか角閃石・酸化角閃石・紫蘇輝石・黒雲母・海緑石・磁鐵鉱・イルメナイト等を含有している。

### 2. 粒状凝灰岩層～凝灰質泥岩層 Coarse tuff～Tuffaceous mudstone

北三の丸北方の浅間神社北崖付近には、層厚約5m±の全体的に斜交層理のよく発達した灰緑色粗粒凝灰岩層～凝灰質泥岩層が分布している。本層は、浅間神社北側付近(第20図)で南に12°傾斜(走向・傾斜=N65E・12S)している。これより2m南方では南東に10°傾斜(走向・傾斜=N44E・10SE)し、さらに2m南方では南東に08°傾斜(走向・傾斜=N24E・08SE)と傾斜が緩やかになり、約20m南部では中疊混じりの灰緑色凝灰質粗粒砂岩層～凝灰質泥岩層に移化して、ほとんど水平層～ゆるやかな北傾斜層に移化する。

さらに、浅間神社神殿石付近でチャート混じり中疊岩層に被われる(第3図・第4図)。

本層は、北有馬層に特徴的な灰緑色の凝灰質粗粒砂岩層～凝灰質泥岩層で、地層を造る鉱物は斜長石およびパブルウォール(泡)型の火山ガラスやヒル石がほとんどで、約1%の紫蘇輝石・角閃石・酸化角閃石・磁鉄鉱・イルメナイト等の重鉱物によって構成されている。また、海綿類の骨針～骨針片を多量に含有している。本層については、北有馬層の模式地である北有馬田平および西有家西浜海岸に分布する特徴的な灰緑色凝灰質粗粒砂岩層～凝灰質泥岩層の造岩鉱物・海綿類の骨針・骨針片・地層の硬さ・走向・傾斜・層序等を検討して、すべてが一致したので北有馬層と判定した。

### 3. 中疊岩層 Pebble conglomerate

浅間神社付近・大手門付近・蓮池門付近・本丸東海岸・天草丸北西部の丘付近には良く円磨されたチャート・砂岩・疊岩・ホルンフェルス・花崗岩・閃綠岩・斑れい岩・流紋岩・安山岩・玄武岩・蛇紋岩・千枚岩・黒色片岩・綠色片岩・片麻岩等の円疊～偏平疊からなる小疊混じりの中疊岩層が露出している。本中疊岩層については、渡辺、1982が大江層と呼称して大江貝層もこれに含めた(第16図)。

本層は、海綿類の骨針(第16図)～骨針片を多量に含有する層厚1m～5m±の地層で、蓮池門付近では、斜交層理が頗著で、各地で下位の地層をほぼ水平に被っているが、大屋層を被覆している地城では、非整合面=地層面に層厚1cm～1.5cmの褐鉄鉱層を挟んでいる(第4図・第5図・第6図)。

### 4. 大江貝層 Oe shell-bed

天草丸南部標高16.1mの金比羅神社の崩壊崖には、層厚約12mの大江貝層が分布している。大江貝層は、最上部を層厚約0.7mの阿蘇火碎流堆積物(第32図)によって被われている(第7図・第8図)。

大江貝層は、第22図のように、下位より葉・枝・花粉化石を含む層厚=3.5m±の下部層、大量の巻貝類・二枚貝類・サンゴ類・石灰藻類・有孔虫類の密集する貝化石層=中部層=3.3m±、海成砂岩～小疊岩～中疊岩混じりの上部層=4.7m±から構成されている。ことに下部層と上部層(中部層)は、良く円磨されたチャート・砂岩・疊岩・ホルンフェルス・花崗岩・閃綠岩・斑れい岩・流紋岩・安山岩・玄武岩・蛇紋岩・千枚岩・黒色片岩・綠色片岩・片麻岩等の円疊～偏平疊からなる小疊混じりの中疊から構成されている。また、下部層には有馬火碎流の溶結凝灰岩疊岩を多量に含有する。さらに、有馬火碎流に特有なパブルウォール(泡)型の火山ガラスは、大江貝層の全層のマトリックスに多量

に含有されている。本層は、大屋層の灰緑色凝灰岩層・有馬溶結凝灰岩層などの古地表面をを削って生じた浸食谷中に堆積した局地的な浅海成層である(第22図～第31図)。

### (1) 大江貝層下部屋 全層厚=3.5m±

L7石英・チャート等中疊混じり火山性暗黃褐色 泥岩～極粗粒砂岩～中疊岩……層厚40cm± 花粉・珪藻  
L6石英・チャート等中疊混じり火山性暗黃褐色 泥岩～小疊岩……層厚30cm± 花粉・珪藻  
L5石英・チャート等中疊混じり火山性暗黃褐色 泥岩～小疊岩……層厚20cm± 茎・葉・珪藻  
L4石英・チャート等中疊混じり火山性暗黃褐色 中疊岩……層厚15cm± 茎・葉・珪藻  
L3石英・チャート等中疊混じり火山性暗黃褐色 泥岩～小疊岩……層厚30cm± 茎・葉・珪藻  
L2石英・チャート等中疊混じり火山性暗黃褐色 泥岩～極粗粒砂岩……層厚35cm± 茎・葉・珪藻  
L1有馬火碎流巨疊・石英チャート等中疊混じり火山性暗黃褐色泥岩  
～極粗粒砂岩……層厚180cm± 茎・葉

### (2) 大江貝層中部層 全層厚=3.3m±

M3アカマタガイ貝殻混じりコキーナ層……層厚180cm± サンゴ・有孔虫  
M2石英チャート等中疊混じりコキーナ層……層厚 90cm± サンゴ・有孔虫  
M1石英・チャート等中疊混じり灰色 小疊岩～火山性暗黃褐色 小疊岩……層厚 60cm±

### (3) 大江貝層中部層 全層厚=4.7m±

U9石英・小疊角貝混じり赤褐色火山性 泥岩～極粗粒砂岩……層厚12cm± 骨針・珪藻  
U8石英・チャート等中疊混じり灰褐色 火山性小疊岩～極粗粒砂岩……層厚30cm± 骨針・珪藻  
U7石英・チャート等中疊混じり黄褐色 火山性極粗粒砂岩～黃褐色火山性泥岩……層厚 120cm±骨針・珪藻  
U6石英・チャート等中疊混じり褐色 火山性極粗粒砂岩～褐色 火山性泥岩……層厚15cm± 骨針・珪藻  
U5石英・チャート等中疊混じり褐色 火山性中疊岩～極粗粒砂岩～褐色 火山性泥岩……層厚60cm± 骨針・珪藻  
U4石英・チャート等中疊混じり黄褐色 火山性中疊岩～極粗粒砂岩……層厚25cm± 骨針・珪藻  
U3石英・チャート等中疊混じり黄褐色 火山性泥岩～極粗粒砂岩～小疊岩……層厚55cm± 骨針・珪藻  
U2石英・チャート等中疊混じり黄褐色 火山性泥岩～極粗粒砂岩～小疊岩……層厚80cm± 骨針・珪藻  
U1石英・チャート等中疊混じり黄褐色 火山性泥岩～極粗粒砂岩～小疊岩……層厚70cm± 骨針・珪藻

本層からは、これまでに約70種の貝化石(第25図)のほかサンゴ類・石灰藻(第24図)・有孔虫(第23図)・放散虫・ケイソウ・海綿骨針等の生物群集が発見されており、大江貝層堆積当時の堆積環境を示す重要な資料である(第23図～第31図)。

大江貝層の時代については、これまでにいくつもの放射年代が推定されてきたが、阿蘇火碎流に被われていながら阿蘇火碎流より新しい値が出ていた。今回の調査で、原城周辺をとりまき大屋層を被う地層は、基底疊岩層～粗粒凝灰岩～凝灰質泥岩疊岩層～大江貝層まで、同一層準の北有馬層と考えられるので、同時に堆積したものではないかと推定している。

### [3] 阿蘇火砕流堆積物 Aso pyroclastic flow deposit

阿蘇火砕流堆積物の層厚は三崎=3m+, 浅間神社=10m±, 蓼池門=18m±, 本丸=23m±, 天草丸金比羅神社=0.7m±ほどで最上部は海岸段丘面を形成している(第21図・第32図・第33図)。阿蘇火山は高粘性のマグマ爆発をするタイプの火山で、阿蘇火砕流の中には、バブルウォール(泡)型の火山ガラスや良く発泡した白色軽石・黒曜石が大量に含まれている。また、火砕流を造る礫物は斜長石がほとんどで、約1%のブロンザイト・角閃石・磁鉄鉱等の重鉱物によって構成されている。阿蘇火砕流は、大変軟らかくボクボクしているが、火砕流の崖は、風雨に強く切り立った断崖を造っている。阿蘇火砕流の最下部付近には、炭化樹幹・枝・茎などが挟まれている。原城地域の阿蘇火砕流堆積物の噴出年代は、これまでに測定されていないが、他地域の阿蘇火砕流の研究から阿蘇ー4火砕流(活動年代07~09万年前)とする研究者と阿蘇ー3火砕流(活動年代11~12万年前)ではないかとする研究者に分かれている(第3図~第8図)。

### [4] 沖積層 Alluvial deposit

浦田~大江の住宅地には、過去には一面に蓮畑が広がっていた。地名が示す通りこのあたりには、大きな入り江がある、原城という島の回りにラグーン(潟湖)が発達し、浅海底は泥土や潟に被われていた。そのために原城は要害の名城とされていたわけである。原城本丸には、層厚約1.5mの粘質土壤があり、陶磁器や人骨等の遺物を包含している。また、天草丸東海岸にも植物の材・幹・枝・茎などを挟む沖積層がある(第33図)。

## IV おわりに

島原半島南部の新第三系=いわゆる口之津層群については、井上、1953によって精査され、大屋層・角閃安山岩・大屋層火山礫岩部・玄武岩・複輝石安山岩などが識別されて、全層厚約400mとされた。その後、大塚、1966a, 大塚・古川、1988, 大塚ほか、1995等の研究があるが、大塚ほか、1995によれば、口之津層群は、下位から大屋層下部層・菖蒲田安山岩・早崎玄武岩・大屋層上部層・加津佐層・南串山層・上原玄武岩・愛岩山玄武岩・鳳上岳・女島凝灰岩礫岩・西正寺層・大峰玄武岩・八良尾玄武岩、北有馬層などから構成され、8回の整合面と5回の不整合面を狭在し、全層厚は、約1,500mにものぼるといふ。

最近、加津佐~南有馬~北有馬の口之津層群の模式地内に農地整備が行なわれて、大屋層上部層・加津佐層・南串山層・西正寺層・北有馬層などの新露頭が水平方向に同時に異相の地層として連続して現れていることから、大塚ほか、1995の口之津層群は再検討の余地があると思われる。ちなみに鎌田1977によれば、口之津層群の基盤岩である古第三系坂瀬川層は加津佐~南有馬付近ではほとんど海面近くに分布していることが判明している。

大江貝層については、井上、1953が阿蘇火山灰岩の下位に南有馬層(介化石砂質礫岩)が発達することを記載しているが、その後多くの研究者が阿蘇火砕流堆積物の下位に大江貝層が位置することを

誤認したために渡辺、1982の再発見につながった。

原城付近の大屋層や北有馬層については、まだ数多くの問題点が残されている。今後、大江貝層の再研究と共にさらに精査の必要があるものと思われる。

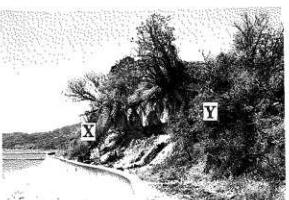
## 謝辞

本小論を記載するにあたって南有馬町教育委員会の松下久美雄教育長並びに松本慎二主事には本報告書への投稿の機会を与えられた。長崎大の高橋 清名哲教授には、層位・古生物学的な面からご指導ご助言を賜わり、また、重要文献を頂いた。九州女子短大の竹下 壽教授および山口大の松本征夫名哲教授には重要文献を貸与くださるとともに、火山岩類についてご指導いただいた。また、長崎大の鎌田泰彦名哲教授には重要文献を頂くと共に貝化石を御同定くださった。熊本大の渡辺一徳教授には、阿蘇火砕流に関する重要文献を頂くと共に阿蘇火砕流について御指導くださった。口之津層群の創設者であられる鹿児島大の大塚裕之教授には、口之津層群の層序について直接ご指導ご討論いただいた。また、南串山の永野清経先生には、野外でご指導くださったほか、調査の便宜をはかっていたいた。ここに銘記して、上記の先生方に感謝いたします。

## おもな参考文献

1. Amano, Shokyu, 1953, The shell-bed near Hara-jo, Nagasaki-Ken. Jour. Sci Kumamoto University, Ser. B. No.2, 27-33.
2. 有明海研究グループ, 1965 有明・不知火地域の第四系, 地学团体研究会, 1-86.
3. 井上正昭, 1953, 長崎県島原半島南部の古第三紀層について, 福岡学芸大学紀要, No.3, 21-30
4. 鎌田泰彦, 1964, 島原半島地質見学資料, 長崎県理科教育資料, 第7集, 長崎県理科教育協会5~7
5. 鎌田泰彦, 1977, 5万分の1, 土地分類基本調査図, 「口之津・三角」表層地質図及び同説明書, 長崎県, 18-23.
6. 大塚裕之, 1966a, 口之津層群の層序及び堆積物, 一口之津層群の地史学的研究 その1-, 地質学雑誌, Vol.72, 371-384
7. 大塚裕之, 1966b, 口之津層群の地質構成・化石および对比一口之津層群の地史学的研究その2-地質学雑誌, Vol. 72, 491-501
8. 大塚裕之, 1970, 北西部九州有明海南部地域の更新一最新統の層序学的, 堆積学的研究, 鹿児島大学理学部紀要, No.3, 35-65.
9. 大塚裕之・古川博恭, 1988, 九州・琉球地方の下部及び中部更新統の層序, 地質学論集, 第30号 日本地質学会, 155-168
10. 大塚裕之・外間喜春・田中利明・後村信幸・竹之内貴裕・上野宏共, 1995, 島原半島南部の地質の再検討. 鹿児島大学理学部紀要(地学・生物学), No.28, 181-241.
11. 渡辺一徳, 1982, 阿蘇火砕流堆積物と大江層との層序関係, 熊本大学教育学部紀要, 自然科学, No.31, 25-32,
12. 渡辺一徳・益田悦郎, 1983, いわゆる中位段丘堆積物としての小串層及び大江層について, 熊本大学教育学部紀要, 自然科学, No.32, 29-37

図版-A 原城跡地質①



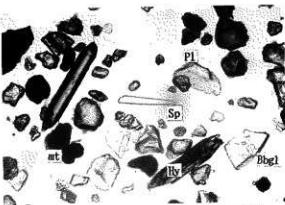
第9図 火山性シルト層を不整合に被う有馬火砕流  
大星層灰色火山性シルト層 Ols(海成層)を不整合に被う有馬火砕流  
堆積物 Awf(海成層)。X-Yは不整合面…天草丸東海岸



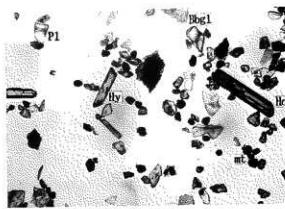
第11図 大星層の火山性シルト岩を  
非整合に被う水中秋流  
大星層灰色火山性シルト層 Ols(海成層)を非整合に被う粗粒灰岩層  
Olt(海成水中秋流)。X-Yは不整合面…本丸南海岸



第13図 黒灰岩～火山性シルト岩を非整合に被  
うラブリーストーン～粗粒灰岩層  
大星層灰色粗粒灰岩層 Cif(海成層)～火山性シルト層 Olt(海成層)  
を非整合に被うやや色濃い灰岩色ラブリーストーン～粗粒灰岩層  
Cif(海成層水中秋流)。X-Yは不整合面…本丸南海岸



第10図 天草丸西方の水中火砕流を造る鉱物  
Pl:斜長石 Hy:紫蘇輝石 Sp:珪酸質の骨針  
Bgl:バブルウォール(泡)型火山ガラス mt:磁鐵鉱



第12図 本丸南東海岸の水中火砕流を造る鉱物  
Pl:斜長石 Hy:紫蘇輝石 Ho:角閃石 mt:磁鐵鉱  
Bgl:バブルウォール(泡)型火山ガラス…本丸南海岸



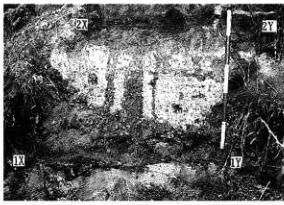
第14図 硬溶結の水中火砕流中に  
埋積した化石樹幹  
大星層灰色粗粒灰岩層 Cif(海成層)中に埋積した樹幹…本丸南東海岸

図版-B 原城跡地質②



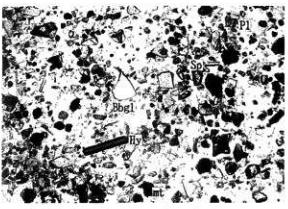
第15図 灰緑色細粒凝灰岩層～火山性シルト層  
を非整合に被う北有馬層の中羅臼層

大星層灰色粗粒凝灰岩層～火山性シルト層 Ols(海成層)を不整合に被う北有馬層中羅臼層 Kpc(海成層)と、さらにこれを不整合に被う阿蘇火砕堆積物 Apl(海成層)。不整合面には、層厚1cm土状鉄鉱層(海成層)が生じている。



第16図 大星層を不整合に被う北有馬層とさらにそ  
れらを不整合に被う阿蘇火砕堆積物

大星層灰色火成性シルト層 Ols(海成層)を不整合に被う北有馬層中羅臼層 Kpc(海成層)と、さらにこれを不整合に被う阿蘇火砕堆積物 Apl(海成層)。不整合面には、層厚1cm土状鉄鉱層(海成層)が生じている。



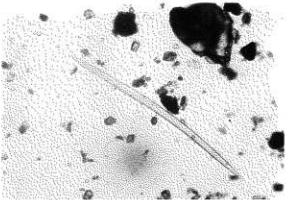
第17図 原城莊海岸大星層中の造岩鉱物

含貝化石帶～シルト岩中の火山性起因の造岩鉱物  
Pl:斜長石 Hy:紫蘇輝石 Sp:珪酸質の骨針 mt:磁鐵鉱  
Bgl:バブルウォール(泡)型火山ガラス…原城莊海岸



第18図 大星層を不整合に被う  
北有馬層の基底羅臼層

大星層灰色火成性シルト層 Oms(南に12'傾斜の海成層)を不整合に被う北有馬層の基底羅臼層 Kbc(ほぼ水平な火山円錐層)。不整合面には、層厚1.5cmの土状鉄鉱層(海成層)が生じている。



第19図 三の丸北方に分布する  
大星層中の珪質の骨針  
海綿類の体内に形成された珪質骨針。たいていの骨針は、波浪によつて叩きつけられ、いくつかの小断片として産出する。Sp:珪  
質の骨針…Spicules



第20図 浅間神社下の北有馬層

北有馬層の灰褐色粗粒凝灰岩層 Kct(海成層)。本層はバブル  
ウォール(泡)型火山ガラスの集合層(粗粒凝灰岩層)であり、  
珪質骨針も多數含まれる。

羽崎…浅間神社東北の崖

図版-C 原城跡地質③



第21図 北有馬層を被う阿蘇火砕流堆積物

北有馬層中間に岩屑 1pc (海成層) を不整合に被う阿蘇火砕流堆積物 Apf (陸成層) 不整合面には厚さ 1 cm ~ 4.0 cm の複数鉄鉱層 (陸成層) が生じている。



第22図 天草丸の大江貝層

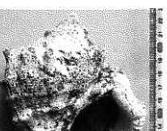
金比羅神社崩壊断面に露出する層厚 = 11.4 m の大江貝層 Osh (海成層)。最上部を層厚約 70 cm の阿蘇火砕流堆積物 Apf (陸成層) が被っている。



第23図 大江貝層に多産する  
有孔虫化石  
体長 = 約 1 mm

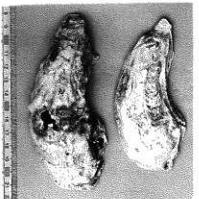


第24図 大江貝層に産出する  
サンゴ類化石  
いさんご目 センスガイ  
体長 = 約 1 mm

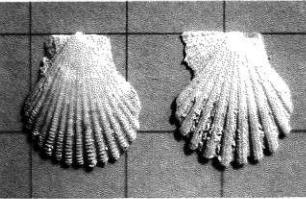


第25図 大江貝層に多産する  
巨大アカニシ化石  
殻の重さ = 720 g

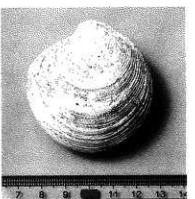
図版-D 原城跡地質④



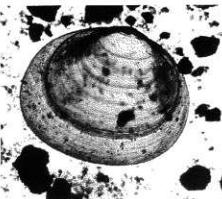
第26図 大江貝層に多産する  
マガキ化石



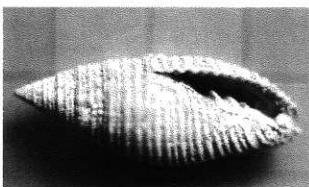
第27図 大江貝層に産出するイタヤガイ類化石  
左: テナシコガイ 右: ナノヒオウギ 体長 = 約 13 cm



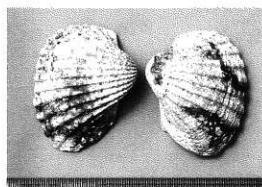
第28図 大江貝層に産出する  
ハマグリ類化石  
クラカガミガイ



第29図 大江貝層に産出する  
二枚貝の幼貝化石  
体長 = 約 1.2 mm



第30図 大江貝層に産出するフデガイ類化石  
体長 = 約 32 mm



第31図 大江貝層に産出する  
ハイガイ類化石



第32図 大江貝層を被う阿蘇火砕流堆積物

大江貝層小裸岩層 Osh (海成層) 不整合に被う阿蘇火砕流堆積物 Apf (陸成層) 不整合面を層厚 1 cm ~ 3.5 cm の複数鉄鉱層 (陸成層) が生じている。X-Y は不整合面 - 天草丸 金比羅神社崖



第33図 本丸の段丘を形成する阿蘇火砕流堆積物  
標高 31.6 m の本丸丘には、下部部の大壁面や右側高岸が残り、その上位を阿蘇火砕流堆積物 Apf (陸成層) が不整合に被覆している。天草丸海岸より本丸の阿蘇火砕層を望む

## 2. 原城跡の概要

九州大学教授 中村 賢

### (1) 有馬の二城—原城と日野江城—

島原・天草の一揆（島原の乱）の最後の砦として、2万数千の老幼男女の農民が、城跡の廃墟に櫓・城門や竪穴を枯草で詰めた陣屋などを急拵えしてたてこもり、数倍する幕府諸藩の軍勢との間に3ヶ月にわたる飢えと寒さと激烈な死闘の末、『転び』から『立ち上ったキリシタン』として悉く殺戮された原城——。その全長約700メートル、最大幅員約200メートルの広大な台地状の城跡は、長崎県南高来郡有馬町の一角に、遙かに雲仙岳の秀麗を望む平地と、対岸の天草との間は碧い湖水のような有明海と共に囲まれて、切立つように横たわっている。

この原城は、もと志自岐原の城とよばれ、はじめ明応5年（1496）に領城有馬貴純の築城との所伝をもつが（林銘吉『島原半鷺史』上）、確かなことは全く不明である。しかし一揆鎮圧の諸藩中、最大の軍勢と最大の死傷者（初期の軍勢32,359人、死傷者3,654人）を出した佐賀藩主鍋島『勝茂公譜考補』第7には、「此原ノ城へ、有馬左衛門直純（転封により当時は日向延岡藩主）先祖代々ノ居城ニテ、…東西ハ海岸ニシテ、數十丈岩崎チ中々上ルヘキ便モナク、北一方ハ山ヲ切テ土手トシテ、西ハ松山ニテ輪郭ナルコ屏風ノ如シ」とあり、有馬氏歴代の居城跡にして難攻不落の天然の要害であった。

これに対し、林氏は前掲書において、隣の北有馬町所在の日野江城こそ有馬氏歴代の居城で、原城はその軍事的拠点にすぎないとされる。他方、両城を同一城の別名とする誤った見解が『寛政重修諸家譜』松倉勝家条以来、今日の島原の乱研究書にも少なくない。そこで両城の関係を領主有馬氏の盛衰を通して簡単にみておこう。

ところで明治12年に、島原半島部を南高来郡、今の諫早市一帯を北高来郡に二分して「タカキ」と訓ませるまでは、『肥前國風土記』、『日本書記』（承和天皇18年条）以来の高来郡は、『和名抄』にみえるように「タカク」と訓んでいた。それは古代においては、遣唐使の南島路のコースに位置し、太宰府の海防出機関の一つ肥最崎（野母崎）警固所は同郡の所管で、945年には來着唐船の処理にもあたり、海外との結接点であった。

しかし高来郡の具体的な歴史像が確かな記録によって裏付けられるのは鎌倉次第である。その領主有馬氏は、藤原純友6代の後裔と称する（実は平直澄の流れらしい）藤原經澄をもって初代とする。『藤原有馬世譜』（以下「世譜」と略称する）によれば、彼は源賴朝より高来郡有間莊の地頭に補せられ、建保の頃、常陸よりロノ津に下向し、有間（のち有馬）村に屋形を構え、これを有間城又は日野江城と号し、姓を有間（のち有馬）に改め、代々「居\_日野江\_復興\_原城」とある。山城である日野江城が果して初代経澄の手にあるのか否か、いま一歩明確を欠くが、経澄がこの地を勢力植絆の起点に定めたことは事実であろう。しかし2代朝澄は隣接串山郷の所領について、高来郡東惣地頭兼預所の越中氏と争い（『吾妻鏡』寛元4年）、瀬野精一郎氏の研究によれば、鎌倉期の高来郡の地頭御家人にはこのほかに深江氏、安富氏、案徳氏、大河氏があり、その他の地主豪としては伊佐早、伊福、

伊古、西郷、神代、多比良の各氏が、今の同名の地に割居していた。つまり鎌倉時代の有馬氏の勢力は、いまだ島原半島南部の一隅に限られていたようである。

こうした諸族の割居状態は、南北朝から室町期にかけてもほぼ同様であったが、戦国期にはいつた15世纪後半の8代貴純（母は島津豊久の女）は、これらの諸氏を麾下におさめ、更に大村純尹を松浦加々良島に追って、高来、彼杵、藤津の肥前3郡を領し「肥前館」と称したという。彼による原城構築の所伝は明応5年（1496）とし、世譜はその死を明応3年とするので、年次の鉛筆があるが今はいずれとも判じ難い。貴純による有馬氏興隆の過程において、この頃城砦としての態を整えたのであろう。

有馬氏の全盛期は10代晴純（仙巖）の時代である。彼は天文14年（1545）に千葉・竜造寺隆信を破って三根・佐嘉・神崎の3郡を併せて肥前6郡を領し、次子純忠を大村家に入れ同家を継がせた。世譜には日野江（城）に住すとあるが、『北肥戦誌』卷16などには「志自岐原城主」ともある。

次の義貞・義純を経て、13代晴信の初期にあたる1587年の豊田秀吉による九州諸大名の旧領安堵までの戦国末期40年間は、有馬氏は竜造寺隆信との確執に敗れて所領を高来1郡以下に押さえられたまま、近世島原藩域として固定化される時期であった。この間竜造寺氏に抗すべく、豊後大友宗麟と結び、ついで摩津島津義久に援を求める（今の島原市郊外で隆信敗死）、内には大友宗麟・大村純忠と同じく、イエズス会に接近して南蛮貿易による軍事的経済的な領主権の強化をはかった。すなわち、義貞の請いによって1562年ルイス・アルメイダが島原半島の伝道を開始し、数年の間に有馬・島原・ロノ津を中心に2万人の信者を得たといわれ、ロノ津は67年から南蛮船の相づぐ入港地となった。晴信は受洗してドン・ブヨタオを名のり、ロノ津で全国宣教師会議を開催、有馬と同領の浦上にゼミナリヨを設立させ、宗麟・純忠と共に伝道の結果を示す少年使節を南欧に派遣した。また純忠が教会に長崎・茂木の地を寄進したことにして、浦上を寄進し、ロノ津は南蛮船のほか唐船の寄港地ともなった。

しかし、秀吉の伴天連追放令によって、全国120名余の宣教師は平戸で会議し、大部分は潜伏して事態の改善を待つことになった。日本管区長以下70人が有馬領内に隠され、日本最初の活版印刷（キリシタン版）を出した加津佐の機関のうち、コレジオは天草本渡に移されたが、ゼミナリヨは有馬村の奥地の八良尾に移り、領内キリシタンの数はむしろ増加した。信仰の擁護者としての晴信であった。居城は日野江で、文禄慶長の役出陣中は、ここに弟を残して留守居している。徳川期の晴信は、長崎や領内ロノ津を拠点として、対外貿易をさらに積極的に進めた。彼の朱印船派遣数は、九州諸大名・中島津氏の8隻について平戸松浦氏とともに7隻、インドシナ地方や呂宋へ向けてもので、このほか家康の内命をうけて高山国（台湾）へ貿易促進の働きかけをしている。しかし派遣の朱印船がマカオ寄港中にトラブルを起して乗組員が殺害されると、彼はその報復として、慶長14年（1609）家康の許可のもとに渡来のマカオ船を長崎港口で撃沈させた（マードレ・デ・デウス号事件）。

ついで同17年、家康の重臣である本多正純の臣庭でキリシタンの岡本大八に贈賄し、かつて竜造寺氏に奪われた有馬氏旧領3郡を擊沈の恩賞として返還されるよう画策した。しかし贈賄の事実と貿易権をめぐる長崎奉行長谷川左兵衛殺害の企てが露顕したため、所領「四十万石」、肥前日野江城、有馬修

理大夫暗信」(『庶絶錄』)は、甲斐配流のち賜死。長く波瀬に富む戦国大名暗信の時代は終った。そしてこの事件を機に徳川幕府によるキリスト教禁制と殉教の幕が切って落とされたのである。

暗信の旧領は、家康の養女を室とする嫡子14代直純に再給付されたが、それだけに直純は率先基督教して領民の転宗を厳しく強制した。翌々慶長19年(1614)、彼は1万3千石の加増で日向県(延岡)に転封され、鎌倉以来4世紀にわたる有馬氏の島原半島支配は終った。しかし、家臣団の中には有馬に留まつて帰農する者も多く、「当代記」には、「伴天連之宗派たるに依るなり」と見られていた。近世大名の家臣団とはいえ、鎌倉以来の故地から離れられない兵農未分離な古い体質を残していたのである。

ところで日野江城は林氏の指揮のごとく、諸文献のほかに有馬氏ゆかりの寺社・墓地・城下町・教会関係遺跡が城の周辺に備わり、有馬氏歴代の居城であったことは疑いをいれないが、一方、原城はこれららの遺跡を欠くとされる。しかし原城破却から20年後の島原一揆の時点においても、「沙浜を隔てて路がカギ型に曲った大江の「町屋」(港)が存在し、(中世城砦の兵站基地・家臣居住地としての城下は、城砦から隔離しているのがむしろ常態であった)、一揆後間もない正保2年の「高力攝津守領分圖」からも推測されるように、原城下の有馬村「南ノ庄」(小村数17、石高2,762石)が、日野江城下の同村「北ノ庄」(小村数10、石高2,438石)より生産力は高かったようである。直純の転封後、新領主松倉氏入部までの2年間は、公領として佐賀・平戸・大村の3藩によって分割管理された。有馬村<sup>(現)</sup>地方を担当した佐賀藩主の書状によれば、「一、有佐事、日向様ニ七月十四日被罷渡、彼居城原<sup>(ひ)</sup>の江兩城並金山之城、同日其方龍越請取、御番被申由重珍」といい、ついで茂辰に代った多久茂辰は、騎馬三十騎で「原ノ城」を番し、「火江城」はその子に20騎を付して守らしめた(共に「勝茂公譜考補」3坤)。世繪や「庶絶錄」が公式の、後世の編纂物であるのに対し、これら当事者の書状にみるこれら指置からすれば、両城ともに居城と做すべきであり、世繪の晴純譜補考によれば両城の間20丁余の海浜には長い橋がかけ渡されて両城連結し、今に横堤など存すとある。有馬氏末期の戦国末近世初頭には、古い由緒と格式の日野江城よりも、より広大かつ天陥の原城の方が現実的には重視されていたと解すべきであろう。

## (2) 松倉時代の有馬地方

鎌倉以来の居着き大名有馬氏のあとをうけたのは、畿内先進地域大和五条の領主で「武辺功者」といわれた松倉重政である。以下桑波田興氏の研究(『長崎県史』藩政編、島原藩)に若干の補説を試みるものとする。重政は大坂の役の軍功によって3万石を加増されて元和2年(1616)6月に有馬村田平に上陸入部した。しかし同年来には島原の浜の城に移り、同4年から7年の歳月を費して、石高に対する不相応といわれる程の雄大な島原城(森岳城)を構築し、これと併行して城下町の建設整備にあった。

それは、日野江城・原城のいずれも領内南端に偏し、近世大名の居城としては形式規模ともに不適であり、とりわけ中世以來の有馬氏の故地との袂別——真に近世的な領国經營の必要からであった。

彼の入部の翌年のいわゆる一国一城は、居城以外の城砦の破却を命じたものであったから、日野江・原の両城は地上建造物はもとより、特に原城は大手(日ノ江口)・搦手(大江口・田町門)・田尻門・蓮池門・天草丸などはまさに海に面していたので、石垣等にいたるまで破壊し、新たな島原城構築用に活用されたものとみられる。また城下町の整備では、例えば日野江城下の隈部査左衛門には町民を率いて島原に移住させて町「別当」に任じ、元和期の三会町は町人の移植によって寛永期には三会<sup>(現)</sup>に格付けされている。

こうした長年にわたる大事業は、領民の賦役・重税によって賄われたが、その他重政は幕府に対しては江戸城の石垣普請では特に額出で表高10万石の課役を果たし、武士の嗜み=忠勤のほどを示した。また家臣団構成では12万並みの兵員を養い、原城攻撃時の保有銃砲は743挺で自藩だけでは使いきれず、上使を通じて諸藩に貸与された程である。これら過分の財政支出のためには、苛酷な収奪を必要とし、重政晩年(寛永7)の領内検地では、有馬氏の内検が表高(4万石)の7割増であったのに加え、さらに6割4分の打出しをはかり、現実の課税対象の石高(内検高)は表高の2.34倍となった(一揆の初期に藩より府内目付に提出した村高を与した「松平氏覚書」)。この石高に課せられる正租、小物成のほかに、具体的にはドアルテ・コレアの手記や諸藩の記録にみられるような、例えば「畠廻錢・火縫錢・急錢・櫛錢・戸口錢・死人二穴錢・生子二穴錢」(『勝茂公譜考補』五)といった銭納の附加税を強制した。しかるに当時の島原藩の社会は、これら過重な課税に耐えうる生産力をもち、とりわけ銭納が可能な商品作物生産が広汎に展開していた言わば畿内先進地帯のみの社会の発達段階にあつたのであろうか。

島原藩の地形は、一揆直後の「高力攝津守領分圖」にみられるように、半島中央部の霊仙山塊は海岸まで迫っていて、まとまった耕地は有馬・有家・三会・深江・串山の各村程度で(この一帯を「南目」とい)、上の各村は中世土豪の割持地であったし、また島原一揆の中核となつた)、他は一村千石以下の扇状台地・木場集落が「北目」と野母崎半島部の「西目」に切れ切れに連っている。一般に耕地は扇状地潤水田の溝田や小規模な段々畑が多く、元和期の三会地方では正租の4割近くが溝田の赤米(市場価値は低い)で占められ、また茶・繩・樹木・木炭・紙・油などの山物成の比重が高く、生産力は近隣九州諸藩に比してむしろ低かったことは否定できない。つまり米年貢主体の近世の藩財政の確立はより困難な条件があったわけで、必然的に旧領主有馬氏同様、長崎交易や海外派船に積極的たらざるを得なかつたのであろう。

重政は日本に対する宣教師潜入の策源地マニラを叩く口実のもとに偵察船派遣の朱印状を得、元和7年長崎奉行と共同して各1隻宛を派遣した。マニラ遠征は重政の急死、ついで竹中の解職切腹によって沙汰止みになった。重政の重臣たちは彼の急死は竹中の毒殺であるとして幕府に訴えんとし(史料には次の勝家がその襲封御礼が済む迄保留したとあるが、その後提訴したか否かは不明)、当時のオランダ人の記録では、竹中はその地位を利用して松浦氏ほか九州大名や一部閑老の朱印状を持たない海外派船に深くかかわり、「似せの皇帝のバス」を発給した疑いがもたれている。彼の松倉殺害の容疑は、さきの有馬晴信の長崎奉行殺害の企てとともに、島原藩の伝統的な貿易依存度の高さを物語るもの

のである。さきにふれた松倉氏保有鉄砲743挺のうち154挺は「異風」の大小長筒で外国製と考えられる。対外貿易依存は財政的所要からだけではなく、「武辺功者」重政の軍事的関心によるものでもあった。しかし幕府は、松倉入部の元和2年にボルトガル・オランダ貿易を長崎と平戸に限定し、勝家の代には寛永8年奉書船制度によって「似せの皇帝のバス」による諸大名の派船を絞り出し、さらに同10年(1633)第1次の鎮国令を発し、翌々12年には西国大名領内における唐船貿易も禁絶し、直轄領長崎に限定した。伝統的な対外貿易港としての口ノ津・加津佐の命脈は断たれ、藩財政面での農村重視——収奪の強化は、とりわけ藩内での穀倉地帯というべき「南目」諸村に及んだものと考えられる。

しかし有馬氏の故地「南目」地帯は近世村落化が最もおくれ、中世以来の自然村落である「小村」の体制が強く温存されていたようである。寛永~正保期の島原藩の村数は30、それぞれいくつかの「小村」から成っていた。「小村」数は有馬村の27、有家村の16から。伊古・梶島両村のゼロまで、1村平均4.7ヵ村であるが、「南目」14村だけの平均では6ヵ村となり、「南目」には「小村」数・村高とともに大規模な大村が目立っている。有馬村「南の庄」「北の庄」という中世的区分のものが南・北有馬村に分れ、これや三会・有家・口ノ津・加津佐・串山の5村が、全藩中最もおくれて近世行政村として村域・村高が再編確定されるのは、一揆後文宣期までの間である。つまり全村亡地という空前の事態なくしては真の近世村落への移行は不可能であった。

かかる有馬地方の前近代的社會に重り合うものとして、キリストianの組(講)があげられよう。組(講)は、宣教師の司牧活動を援ける平信徒の組織で、1559年豊後府内の「ミゼル・コルジアの組」以来、全国各地で組織された。殊に慶長19年(1614)以降日本の教会組織が破壊され(宣教師の探索・国外追放、教会破却等)迫害が激化されると、見えざる教会としての組(講)の役割は大きかった。島原地方では慶長18年イエズス会の「殉教の組」をはじめ、元和期には有馬の「ゼヌスの御組」、高来の「サンタマリヤの組」、ドミニコ会系の「ロザリヨンの組」等があった(天草では古く1566年志賀に「サンタマリヤの組」、1626年大矢野に「イグナシオの組」などがある)。元和期有馬のイエズス会派の組の掟では、男子約50人とその妻子で小組・小組衆5・6百人位を大組とした。各小組には組頭のもと、慈悲のぶんごく・惣代・慈悲役・看坊等の役職があつて、禁教下において牧師に代って組衆の信仰を励まし、病人や貧者の救済等にあたつた。組の長から除名に値する罪惡として、墮胎・間引き・夫婦離別・本人の同意なき婚姻・人身売買・畜産・高利貸付等をあげており、當時としては画期的社会規範であった。しかし慶長末年有馬の「殉教の組」の掟や、長崎ドミニコ会系の「教えの組」にみられるような、必ずしも殉教を前提とするものではなく、「うすをそむき奉る儀にあらざる程の事には、(異教徒の)主人の仰に任じて形の上では転んでも、心に信仰を保持し又は僭伏して「ぜんちょきりし端になるやうに才覚せらるべし、同クころびたるさりし端も、たちあがるやうすゝめらるべし」(「さんたまりやの御組の掟」)とあり、組頭や看坊は宣教師に代って洗礼や葬儀を執行し、秘かに信仰の維持擴大をはかった。

1617(元和3)年にイエズス会士コロスが、20~22年にはドミニコ会士コリヤードが、全国各地を巡回して信者の代表から徵収した宣誓書によれば(松田毅一「近世初期日本關係南蛮史料の研究」)

所収)、「有馬組」は署名者18名全員が武士的姓名をもち、帰農武士の組であろうか。有家深江地方の組では各村「庄屋」「乙名」を筆頭に署名し、島原・三会町では「別当・乙名・組親」、天草では各「小村」の「庄屋・肝入」が組(講)の代表者であった。世俗的な郷村共同体の支配層は、信仰組織の長でもあったのである。彼等からすれば、一般農民=平信徒の組衆は、「さりしたんと申たる名ばかりにて、ひいですの条目をもしかじか不存」「何も知らぬ百姓共」であったのである。また両者の徵収文書によれば、島原地方の住民は慶長19年の迫害以前は(即ちキリストian大名有馬直信治下では)、全住民がイエズス会に属していたが、迫害により「ころび申もの無數限」であった。その後ドミニコ会のフライ寿庵によって「大かた不残」立上り「ろざりよの組」が一帯に組織された。さらにイエズス会士ゾーラ(休庵)が巡回して「ゼヌスの御組」「さんたまりやの御組」に再編し、掟を設けて他の会派に属さぬよう誓約させた。さらにコリヤードの巡回によりドミニコ会に転じている。この間僅か10年である。たしかにバジエス「日本切支丹宗門史」ほかが指摘する有馬直純・松倉重政・勝家3代にわたる禁教・宗門改・踏絆・斬首・火縄り・穴づり・山上り・養蹄り等による棄教強制にもかかわらず、確固たる信仰を貫いた多くの殉教者があった。しかし大多数は上のように行長層=組(講)の指導層の動きのままに転々とした一般農民=平信徒であることを否定できない。

島原・天草の一揆は、周知のごとく庄屋や村役人層によって口火が切られ、彼等と帰農武士(牢人)の指導のもとに展開するが、例えは千々石村では、「相庄屋」(前近代の複数庄屋制)の大藏(一揆方)と治右衛門(藩側)の去就が、そのまま同村の2分につながり(「松倉記」)、茂木村は初め一村あげて蜂起したが、庄屋の伴が人質として奪われると全員藩側に寝返った(「佐野弥七左衛門覺書」)のごときで、村役人層による世俗・信仰両面での家父長制の農民支配、いわゆる近世の農民自立の未成熟が指摘されるであろう。

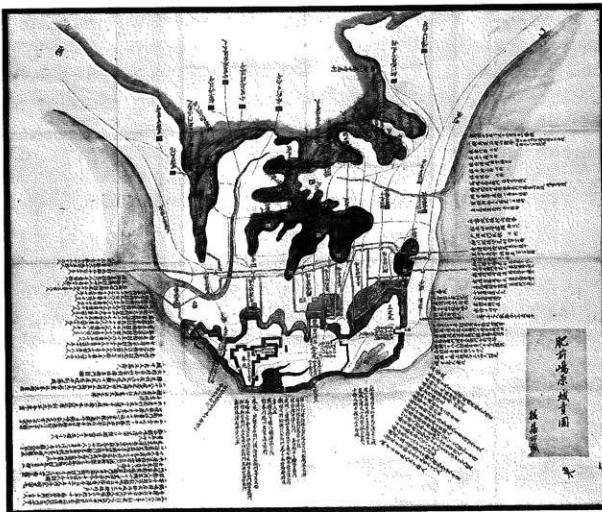
### (3) 島原・天草一揆と原城

島原一揆の幕は、寛永14年(1637)10月25日、有馬村交代官殺害によって切って落とされた。「南目」南部庄屋層に指導された一揆勢は北上して島原の城下を焼き、勝家参勤中の島原城を攻めて落城す前にまで追込み、一揆は領内全域を拡大した。留守居の家老は「百姓共幾利志丹立上、俄ニ一揆之仕合」として援を近隣諸藩に求めた。「細川家譜」や「勝茂公諱考補」所収文書によれば、これを実見して肥後藩に注進した浦人の孫助は、「嶋原御領分は、七年此方古之末進御才足、…(庄屋の)女子を水ぜめニ被成ニ付、一揆を起し申候共、又、きりしたん事申候」といい、肥後藩士の報告では「四郎殿と申て一七、八の人、天より御ぶり候か、…其内ニ海二火が見へがくるす有之候ニ付、浦リのもの拝候由」とあり、基本的には苛酷な課税と打続く凶作による庄屋層主導の百姓一揆であるが、彼等の巧みな演出もあって、現象的には蜂起の当初から宗門一揆の形態をとった。島原に呼応して同27日奥峰起した天草大矢野・上津浦でも同様で、彼等は「くるすをさきニ立、…(代官三宅)藤兵衛と申ハ昔之事、今ハいうすの御代」と肥後藩の使者に公言している。

島原城攻略の挫折によって膠着状態に入った島原勢は、11月半ば一部は天草に赴援し、本渡代官

を敗死させ、五領村等を焼いて一揆に引入ながら代官陣屋の富岡城を攻めた。天草の過半が一揆の勢力圏となった。しかし4日間の攻撃で三ノ丸、二ノ丸を焼いたが本丸が抜けず、それぞれの本拠に撤退した。これを境に一揆は退潮期に入り、藩側の切崩しによって大方の村は一揆の戦列から離脱していった。この間近隣諸藩は「武家諸法度」の幕府の許可なき越境派兵の禁令を理由に、直接武力介入は差控えたが、領境に大軍を集結して幕府の指示を待ち、一方では自領への一揆の波及を警戒した。

幕府は松倉氏・寺沢氏（唐津藩天草領主）の帰国と、一揆追討の上司として松倉重昌の派遣を命じ、近隣諸藩をその指導下においた。一揆方は彼等の到着直前に急ぎ原城跡を補修してたてこもった。首領益田（天草）時貞は12月3日、天草勢も同9日に入城を終った。日野江城でなく原城を選んだのは、前述のごとく原城の方が広大で人員等の収容力に富み、かつ四方が断崖状で難攻不落の要害であったからであろう。しかし特に反し全国各地のキリシタンの蜂起や救援は望めなかつたこの時点において、在住の唐人は残し、一部では多くの老親や妻子を始末してまで籠城を決意させたのは何であろうか。生産と兵站の場である居村の放棄は、農民一揆としての経済闘争的段階から一歩進んで、いわば踏絵の拒絶であり、局面は個別領主との闘いから幕府権力そのものとの対決、いわゆる宗門一揆の段



第9図 肥前崎原 城貴圖

階へ突入したのである。

籠城者的人数は諸史料によって区々であるが、「山田右衛門佐口上書写」の3万7千（うち天草勢2,700人）は明らかに誇大で「島原記」の一揆前の農民数から一揆中に藩が掌握した数（味方）を差引いた数、天草勢を含めて2万数千人が実態であろう。一揆の高揚期（松平氏覚書）に比すればかなり減少しているが、旧有馬氏の勢力拠点であった「南目」諸村を中心に、全藩百姓の62%、「島原町」を加えた4万5,456人（島原記）のうち53%の若男女が抵抗を貫いたのである。

籠城勢の軍事組織を諸記録にみれば、益田（天草）四郎時貞を頂点に、本人からなる評定人、その下に軍奉行・惣横目・夜廻頭・旗奉行・鉄砲奉行・使者番・普請奉行、さらには16ヶ村の庄屋35人からなる談合人が、一般の百姓を村毎に組織化し指揮にあたった。年貢減免等をうたった投降勧告や離間策をねのけながら、3ヶ月に亘って示された固い團結と強烈な戦闘力は、帰農武士・庄屋層を指導者とする組（謹）の組織とも重り合った小宇宙の村落共同体を、そのまま家族ぐるみの戦闘団として組織されたところに求められるのではあるまい。その軍団、つまり村落配置は次のとくであつた。松山城（天草丸）に天草勢、田町門から本丸にかけて口ノ津村勢、本丸から西二の丸にかけて小浜村勢、殿平に安徳村、二の丸に加津佐村、田尻門の辺は深江村、南三の丸辺に布津・堂崎村勢、地形が比較的大らかで大手門を擁し、最も攻撃されやすい三ノ丸には地元有馬村の大部隊を展開させた。城攻めはまず上使板倉重昌の指揮下に、12月10日・20日・明けて寛永15年元旦にわたって激しく戦われたが、未だこの段階の藩兵は島原・佐賀・久留米・柳川4万に満たず、殊に諸藩は各々藩だけで攻落することを主張し、先手を争って後詰めは動かず、ついに上使自身が突撃して討死した。上使＝幕府の威令は未だ諸藩の末端には及ばなかったのである。上使第二陣の老中松平信綱は、右の失敗から大量動員と仕寄り攻=兵糧攻めに転じた。天草の鎮圧によって熊本・唐津兵は島原に転じ、福岡ほか九州諸藩が回わり、重昌敗死の報は幕府をして九州諸大名自身の帰國出陣（これ迄はその世子・家老）および備後福山の老将水野勝茂の赴援を命ぜられた。かくて2月社初旬以降は寄せ手の総数は12万7千に達したという。しかしこの數は幕府軍役の人数（知行高100石につき4人）であって、諸藩が実際に投入した兵力（諸藩の自分貢いの軍役人数）はこれより遥かに多かった。この中の数割は、最前線での仕寄り、築山・井櫓等の構築にかり出された農民が占め、またこれら普請用の竹木・空俵・繩・板等の賦課によって諸藩農村の荒廃も甚しかった（このため肥後玉名郡では村方騒動が起りかけた程である）。また平戸オランダ商館では長良以下が大砲・弾薬持参で参戦し、長崎在住の唐人（陣九官=領川官兵衛）や朱印船貿易に伴う海外での実戦経験をもつ長崎町人ら（例えば浜田弥兵衛の子新蔵=のち熊本藩に重用される）も原城砲撃に動員され、長崎町民は輸送用の唐船・玉藻・幡板の供給や石火矢・鉄砲の修理等にあつた。つまり幕藩権力が九州地方において動員し得る最大限のものを投入して、城内の鉄砲僅か530挺といわれた農民軍にあたつたのである。

食糧・弾薬・薪にも乏しい一揆勢は、2月21日未明に田町門から福岡・唐津・佐賀の仕寄に夜討をかけ、大江の「町」の辺で切込んでこれら諸藩にかなりの損害を与えたが、信綱は全軍の仕寄の完成を待つて、遂に2月27日佐賀藩の先駆けを機に總攻撃を命じた。時に幕府が新たに中国・四国

諸大名の帰国赴援を命じたことを知り、かたや九州諸藩は長在陣のため藩主層ですら極度の疲労と不満の色を隠さない状況であった。三ヶ月にわたる龍城の2万数千の老幼男女は、大小の石・農具から鍋釜まで投落して戦い、死力を尽した抵抗の末、翌28日までに「返忠」の山田右衛門作唯一人を除いて悉く殺戮された。寄手の方も死者1,127負傷者、7,008人といわれ〔島原天草日記〕、この中にはかなりの水増し報告や味方討ちがあるにしても、凄絶な激戦であった。信綱の子輝綱は、その様を「剩え童・女の輩に至るまで、死を喜び斬罪を蒙る。是れ平生人の心の致すところに非ず、彼の宗門の済々たる所以なり」(同上)と述べ、熊本藩主細川忠利は、「又仕そこないては、日本之外聞、其上九州之はぢニ候。左候で仕りそない候ハバ、中国・四国之人數ニ、両大納言殿ニ御老中をくわえられ、人數を可被入替候、左候へば、きりしたんハねこハリ、日本半分之まけと下々も存候」(『熊本県史料』近世篇三、39頁)と、「キリシタン」農民による幕藩権力の危機を強調しているのである。

#### (4) 結びにかえて

以上のように、島原・天草一揆の発生と展開は、家光政権下の幕藩領主に深甚なる危機感を抱かしめた。松倉氏・寺沢氏(天草領分)の改易、鍋島氏ほか軍法違反者の閉門处罚の反面、前近世の農民の最後にして最大の抵抗を圧殺し、徳川将軍の威令を諸大名に徹底させた松平信綱は、老中筆頭として幕閣制度の確立に当った。幕府は一揆鎮圧後直ちに、「今度島原表のごとく、対上様御法度を背く者に対しては、幕府の下知を待たずに越境出兵して鎮圧すべしと、武家諸法度の解釈を拡大し、翌年にはキリスト教の絶滅の意図から一世紀にわたるボルトガル貿易を禁絶して鎖国の完成をはかった。このようにみてくると島原・天草の一揆、とりわけ原城籠城戦のもう日本史上、ひいては世界のキリスト教伝導史上における意義はまさに大であるといわなければならぬ。

その原城の遺跡は、一揆鎮圧後諸藩兵による「城石垣以下わり候普請」、そしてその後の長い農耕(畑作)の過程において、また風蝕風土によってかなりの変容をとげて今日に至っているが、例えば天草丸の大江側の崖は、「此頂キニ四間ト云、灰岩有リテ少堅キ岩也、村民肥ヘ土ニ取リテ、今ワツカニ残レリ、今ハ取ル事ヲ禁ズ」(内閣文庫所蔵「肥前国原城故城図」)のごとく、すでに幕藩制下の天保7(1836)年の時点においてさえ、重要史跡として保存の施策等住民の支えによって今日の姿が存するのである。

#### 文献

南有馬町教育委員会 「原城跡保存管理計画」長崎県史跡等保存管理計画策定第3号 1978



### 3. 調査の概要

#### (1) 調査経緯

昭和13年5月30日付けで原城跡は国指定史跡となった。当時の指定通知の説明は「島原半島ノ南部ニアリ明応年間有馬氏初メテ城ヲ此地ニ築キタリシガ元と2年松倉重政島原ニ治スルニ及ビ廃城トナリ城壁ノ石材ハ取除カレタリ寛永14年12月島原天草ノ切支丹宗徒益田時貞ヲ主将トシテ此ニ立罷レリ幕府ハ松平信綱ヲ使セガ勢盛ニシテ翌年正月幕府の征討使板倉重昌戦死セリ幕府ハ更に松平信綱ヲ使ハシ諸藩ノ兵ヲ率イテ之ヲ攻ムルニ及ビ二月遂ニ落城セリ城跡ハ既ニ山林田畠ニ化シタリシ猶本丸ニノ丸三ノ丸天草丸出丸等ノ名を存し板倉重昌ノ碑佐分利氏ノ墓骨カミ地蔵及慶安元年供養碑等アリテ旧態ヲ偲ブニ足レリ」とある。

指定後の原城跡の保存経過に関する概要是、戦前、戦後の時期は指定当時の現状を維持されていた。昭和30年代から40年代にかけての時期は、わが国の高度成長期に伴い、農業構造改善事業による開闢・農道の整備と、農施設等の施設、住宅の新規改築、また観光事業と関連し頸彰碑の設置等々現状変更の件数とその内容は多岐にわたっている。

昭和50年以降、前述の現状変更にかかるものの中には、不許可ないしは無断によるものがあり、さらにつくような違反行為の増加傾向も懸念されたため、行政上の指導と管理が強化された。昭和52年度、国及び県の指導と援助のもと「原城跡保存管理計画」策定事業を実施し、保存整備事業を推進していくことになった。それに伴い昭和62年に大学の先生方をはじめた原城跡環境整備計画委員会を委嘱し、委員会の先生方の指導、助言をはじめ、文化庁、県文化課の協力を得、保存環境整備事業を積極的に推進するためその指針となる「『原城跡』環境整備計画」がだされた。それに基づく保存環境整備事業の一環として、国庫、県費の補助を受け「原城跡保存修理事業」として平成4年度から発掘調査を実施することになった。

#### (2) 調査の経過

当初の調査計画では平成4年度から平成13年度までの10カ年の計画で、史跡内を10区画（本丸地区、本丸出丸地区、蓮池・空濠地区、天草丸地区、二ノ丸地区、二ノ丸出丸地区、三ノ丸地区、三ノ丸出丸地区、北三ノ丸地区、仕寄東地区、仕寄西地区）に分け年度ごとに調査する計画で始まった。しかし、平成5年度の本丸跡地区の調査において、当初の予想を越えて数多くのキリシタン関係遺物や遺構の検出があったため、文化庁及び県文化課と協議を行い、平成6年度以降も本丸跡地区を調査するよう計画変更をおこなった。

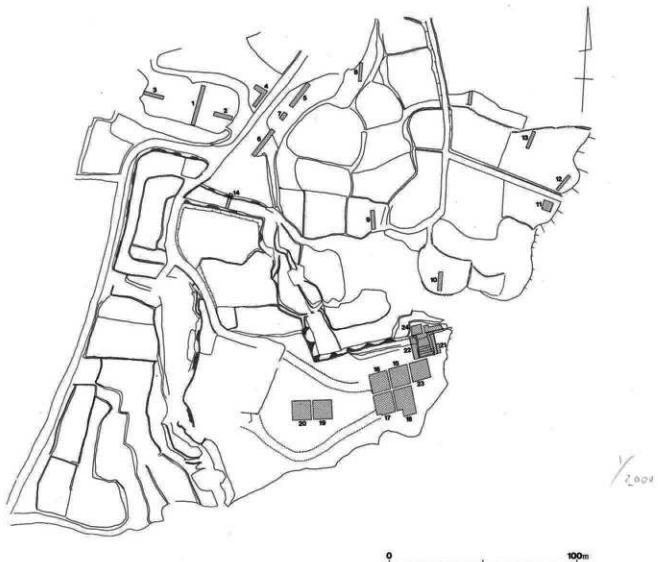
最初の調査は蓮池・空濠地区で、地域内に2m×10mを基準に調査トレンチを14箇所(300m<sup>2</sup>)を設定し平成4年8月31日から11月10日まで実施した。調査トレンチには発掘調査順に算用数字を1番から付けていった。調査の結果、弾丸、瓦、中国の明末～清代の貿易陶磁器などが出土した。

第2次(平成5年度)調査は本丸跡地区で、10m×10mのトレンチを6箇所(650m<sup>2</sup>、一部拡張)設

定し、平成5年9月6日から平成6年2月10日まで実施した。本丸からは原城跡ならではの遺物・遺構が出土するなど大きな成果をあげることができた。なかでも十字架・メダイ・ロザリオなどのキリシタン関係遺物が出土したこと大きな成果である。

出土遺物は他に、貿易陶磁器、島原の乱関係の遺物など築城時から今までの原城を物語る資料が出土した。

第3次(平成6年度)調査は本丸跡地区で、第2次調査の延長部分にあたる場所に10m×10mのトレンチを4箇所(400m<sup>2</sup>)を設定し、平成6年9月5日から11月2日まで実施した。調査の結果、幅約6m、長さ約12mで5段の階段を有する虎口を検出することができた。この虎口は人頭大の蝶で虎口全体を埋められた状況で検出され、いわゆる「破却」の作法が確認できた。

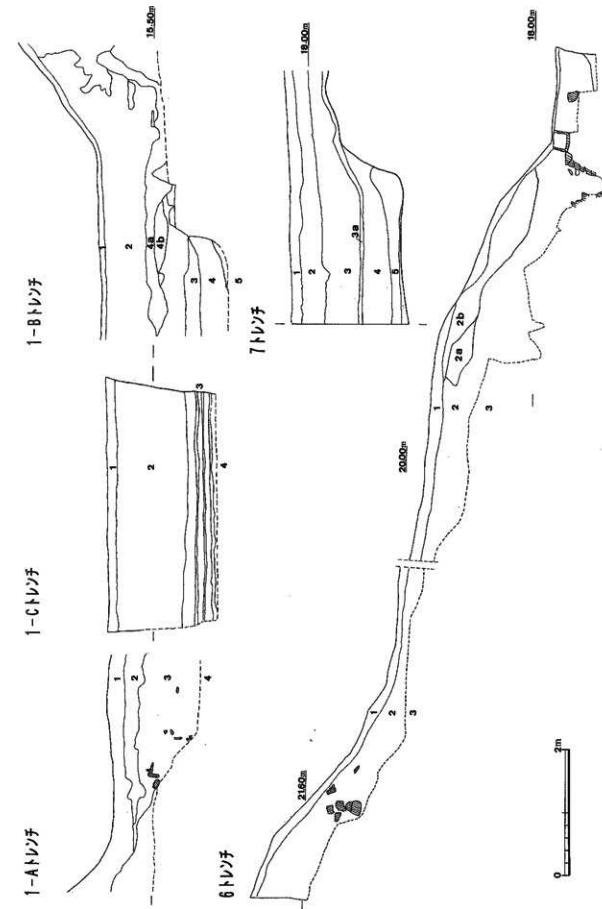


## (3) 基本層位

蓮池・空濠地区に14箇所、本丸跡地区に11箇所の調査トレンチを設定し土層の状況を観察した。蓮池・空濠地区は、ほぼ自然地形を残し、本丸跡地区は築城に伴う起状修正を施している。

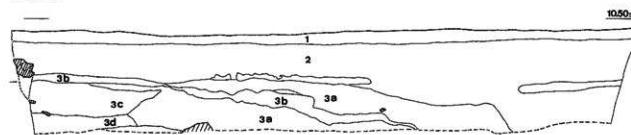
1~3トレンチは空濠内の調査トレンチで、壁面付近はそれぞれ地山を中央部に向かって斜めに掘りこんだ整地層面が現れる。中央部は地表面から底面まで、幾層にも分かれる埋土が約160cm体積している。4・5トレンチは、空濠の北側縁付近と一段下がったトレンチで、表土層約40cm以下は地山の明黄褐色火山灰層である。6トレンチは、ゆるやかに傾斜する土手面に通じたトレンチで、地山まで3層に分かれる埋土層である。7トレンチは、5層に分けられ、3層から5層にかけは他に見られない特徴的な層が見られた。1層は、暗褐色土層で約20cm、2層は、褐色土層で約30cm、硬質である。3層は、0.5cm~5cmまでの球状の土がモザイク状に堆積している。黄褐色をベースに暗赤褐色、暗褐色、褐色、にぶい黄色などの、火山灰土、砂質土、粘性土などで構成されている。4層は、1cm~5cmまでの球状の土がモザイク状に約40cm堆積している。にぶい黄色系をベースに褐色、明黄褐色、灰色で構成し、黄色系が多いため凹層となり全体的に明るめである。5層は、粒が大型化し5cm~15cmを計る。明黄褐色、褐色、にぶい黄色の土で構成されている。8トレンチは、3層に分けられる。1層は褐色土層、2層は暗褐色土層でやや堅い、3層は、明黄褐色火山灰層で地形の傾斜に沿って南側に下っている。9トレンチは、3層に分けられる。1層は暗、2層は褐色土層で1cm~3cmの大の礫を含み堅い。3層は、火山灰土を主体とする泥炭層である。色調が異なるため4つに分けられる。10トレンチは、4層に分けられる。1層は、暗褐色土層で軟らかい。2層は、褐色土層である。3層は、暗褐色土火山灰層で軟らかく、軽石状の石を含む。下部になるとしがい灰色になる。4層は、黒色火山灰層でやや堅く軽石状の石を含む。11・12トレンチは、蓮池地区海側のトレンチである。6層に分けられる。1層は、暗褐色土層で軟らかい。2層は、暗褐色砂質層で小さい礫を多く含み軟らかい。3層は、明黄褐色火山灰層で灰褐色の火山灰をベースに明黄褐色の岩石風化土を含み粘性がある。V層は、灰褐色火山灰層で軟らかく粒子が細かい。4層は、褐灰色火山灰層で堅い。13トレンチは、蓮池北側に設定したトレンチである。1層は、黒褐色土層、2層は、暗褐色土層。3層は、褐色土層で粘性があり堅い。4層は、暗灰黄火山灰層で軟らかい。5層は、褐灰色火山灰層で軽石状の石を多く含み堅い。14トレンチは、ホネカミ地蔵前の石垣部に設定したトレンチである。表土以下は人頭大の裏込石が地山まで含まれる。

15~25トレンチは、本丸跡に設定したトレンチである。基本層位は、1層~5層に分けられるが、築城による大幅な起状修正により3層目が地山と整地層に分けられる。本丸跡は、南側から北側に傾斜していることが分かり、築城時、南側を平坦に削平し、その土砂を利用して北側に埋め込み整地している。その際、斜面には土止めのための段状の溝や石群が施されたらしく、その様子が確認できた。1層は、本丸跡の公園化整備のための客土による層である。2層は、公園化以前の耕作土層である。全体的に地表面から3層までは5cm~30cmと薄い層である。

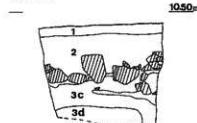


第12図 土層断面図(1) (1/60)

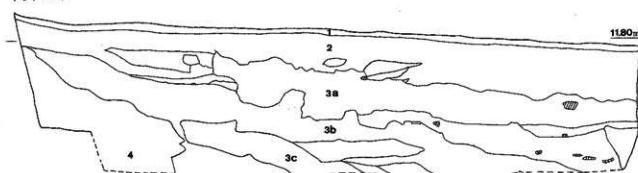
9トレンチ



9トレンチ



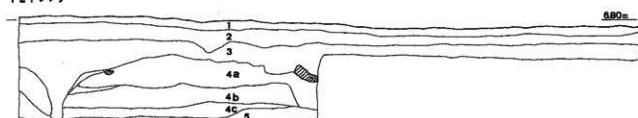
10トレンチ



11トレンチ



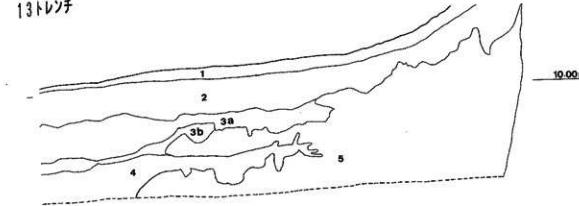
12トレンチ



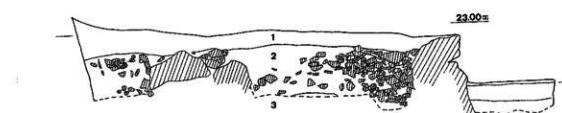
第13図 土層断面図② (1/60)



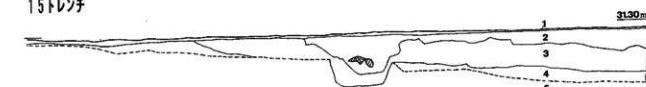
13トレンチ



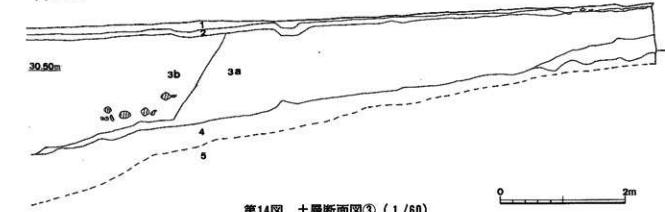
14トレンチ



15トレンチ

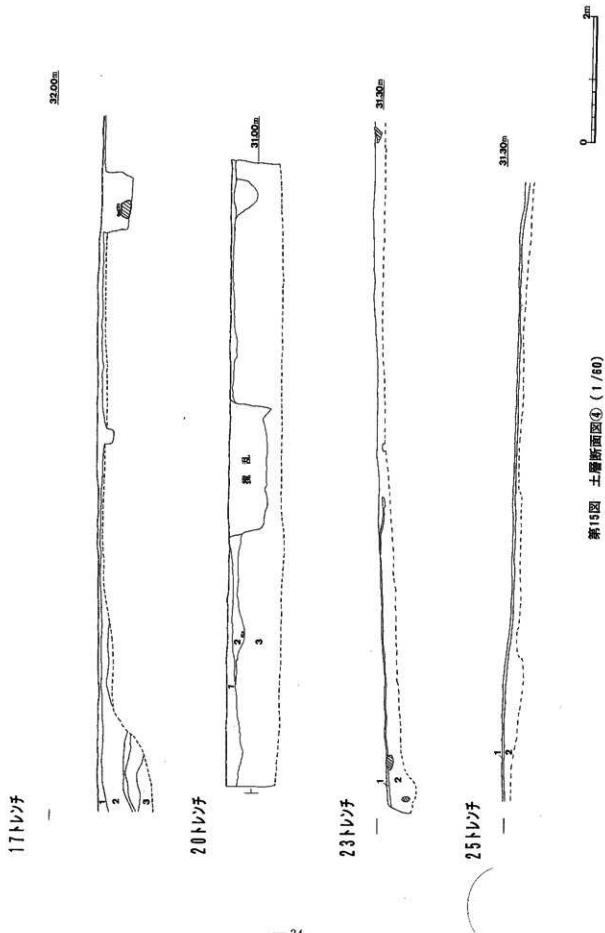


16トレンチ



第14図 土層断面図③ (1/60)





## 4. 遺構

### (1) 遺構概要

調査は平成4年度に空濠・蓮池地区、平成5・6年度は本丸地区を調査した。調査トレンチには、発掘順に算用数字をつけており、空濠に3箇所（1～3）、蓮池地区に11箇所（4～14）、本丸に11箇所（15～25）を発掘した。築城当時及び島原の乱期に至るまでの遺構として確認できたものは本丸地区「池尻口門」跡・豊穴遺構・土壙・整地面などである。空濠・蓮池地区においては、遺物のみで遺構は確認できなかった。

なお、遺構については略記号として、建物跡（S B）、土壙（S K）、石垣・石組（S F）を使用した。

### (2) 豊穴遺構

建物跡については、15トレンチ～23トレンチで柱穴跡が見られ、特に17・18トレンチにおいて多数の柱穴跡があった。その中で建物として抽出できたのは18トレンチでの1箇所で、その他は、建物として識別されてないものがあることが充分に予想されるが、文責者の力量不足に原因することとして了承された。

#### S B 1 (第16図)

豊穴遺構は方形をなし、豊穴底面部北側端に幅約20cm、深さ約7cm、長さ約3mの溝状の堀込みを有する。底面に5箇所の柱穴跡と人頭大の石1個があり、柱穴跡は、基盤面から10～14cmの深さをもっている。東・西側縁線は不鮮明であるが1辺が3m×3mをはかる。また、南側に約1m離れた所に径1m、深さ約1.2mの穴があり、穴内からの遺物ではなく、豊穴遺構に付随する施設の一部と思われるが明確でない。

### (3) 土 壙

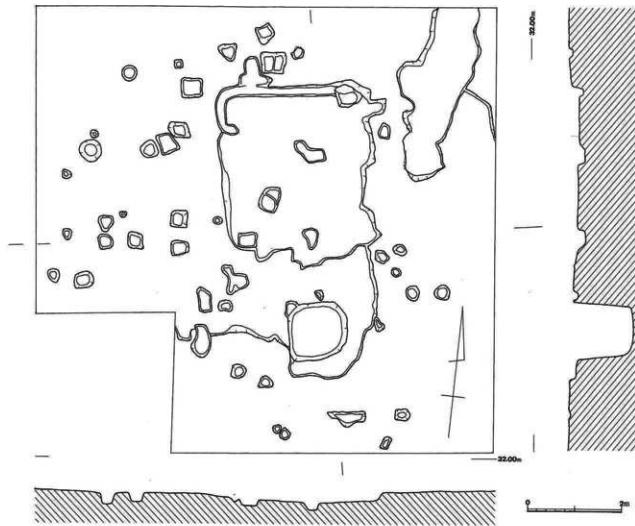
土壙やピットなどの落ち込みは、17・18トレンチに集中し、他のトレンチではまばらになるが15・16・17・19・20トレンチから50cm以上の規模をもつ土壙が検出された。

#### S K 1 (第17図)

16トレンチA 1区に位置する長方形の土壙である。トレンチの壁際に検出したため、全体の大きさはわからないが、長辺は南北に1.3m、最深部で約50cmである。3層の整地面層を切り込んで造られている。底面は、北側に傾斜し、出土遺物はない。

#### S K 2 (第17図)

16トレンチA B 2区に位置する長方形の土壙である。長辺は東西に1.5m、短辺は南北に約90cm、深さ40cmを測る。底面は平らである。また、土壙西側には幅10cm、長さ70cm、深さ3cmの溝状の彫り込みがある。



第16図 穴穴遺構実測図 (1/80)

## SK 3 (第17図)

17トレンチE 5区に位置する土壤である。トレンチ壁際に検出したため、全体の形状は分からない。長辺は南北に1.1m、深さ30cmを測る。内に人頭大の石が1個入り込み、中国製陶器が1点出土している。

## SK 4

17トレンチA 1～2区に位置する土壤基である。南側半分は輪郭が不明であるが円形である。径約2m、深さ約20cmを測る。人骨片と炭が多く出土している。島原の乱期に埋葬されたことが推測される。

## SK 5

18トレンチD 6区に位置する円形の土壤である。竪穴遺構に付随するものと思われ、径1.2m、深さ1.2mを測る。

## SK 6 (第18図)

19トレンチA B 1～2区に位置する方形の土壤基である。長辺は東西に4m、短辺は南北に3m、深さ約10cmを測る。上部に集石を配し、集石下に人骨片と共に十字架2点・メダイ1点・ロザリオ6点などのキリスト教関係遺物や銭貨などが出土している。島原の乱期に埋葬されたことが推測される。

## SK 7

19トレンチD E 1区、トレンチ北側壁沿いに位置するため、全形は確認できない。径1m、深さ約26cmを測る。

## SK 8 (第18図)

19トレンチE 2～3区に位置する円形の土壤である。径約1m、深さ約3mを測る。内には、人頭大の礫がびっしり入り込む。井戸の可能性もあったが、壁面には石積みの後もなく、礫は投げ込まれたと思われたため、あえて土壤にいた。

## SK 9 (第19図)

20トレンチB 1区、トレンチ北側壁沿いに位置するため、全形は確認できない。長辺は東西に約2m、深さ約40cmを測る。人頭大の礫の集石と共に人骨片や十字架2点・ロザリオ2点などのキリスト教関係遺物が出土している。

## SK 10

15トレンチC 5区に位置し、整地面層下の5層を切り込んで造っている。長辺は南北に2m、短辺は東西に70cmを測る。出土遺物は、青銅製のリング状遺物が1点出土している。

## SK 11 (第19図)

23トレンチE 4区に位置する楕円形の釜戸と考えられる土壤である。長辺は南北に1.7m、短辺は東西に約1mを測る。東壁中央に面取りした方形の石を2個並べ、反対側に高さは異なるが方形の石がある。土壤内には土が3層に堆積している。上部は、表土層の一部である。中部は、火熱によって赤く変色しており、下部は、大量の炭を含んでいる。

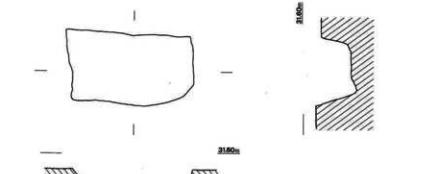
## SK 12

16トレンチA B 4～5区に位置する本丸の抜け穴と思われる穴である。径約4mを測る。この穴は昭和38年(1963)4月の豪雨の時、この穴があいたものである。当時は段状になっており、一番深い所で4.3mの深さがあった。内部には、瓦や陶磁器の破片があり、穴壁には、鉄の跡も見られたようである。今回の調査では、当時の埋め戻された状況のみで、穴壁の鉄の跡は確認できなかった。深さ約3mまで烟下げたが、トレンチ壁の崩壊が心配されたため調査を中止した。

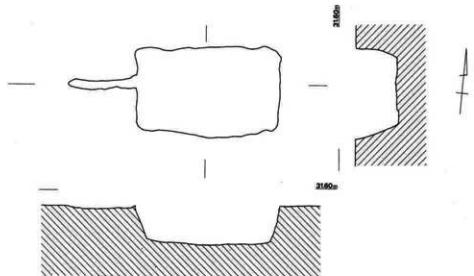
この穴は、現在入ることができないが、海岸の崖下から約6mの高さのところにある、横穴につながっていたと推測されるものである。横穴は、以前入れられた人の証言によると、高さ1.1m、幅0.7～0.8mの穴が、入り口から約27m続き、そこから三叉路になる。その奥は三疊敷きほどの広さで、水が出ているということである。抜け穴としての利用は十分考えられるが詳細は不明である。

かまど

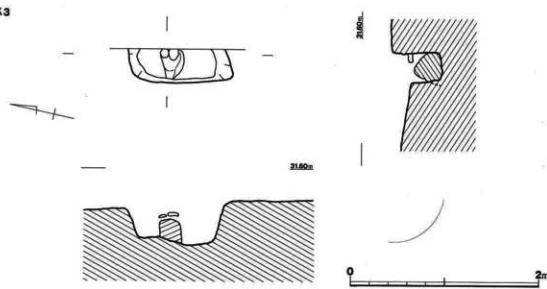
SK1



SK2

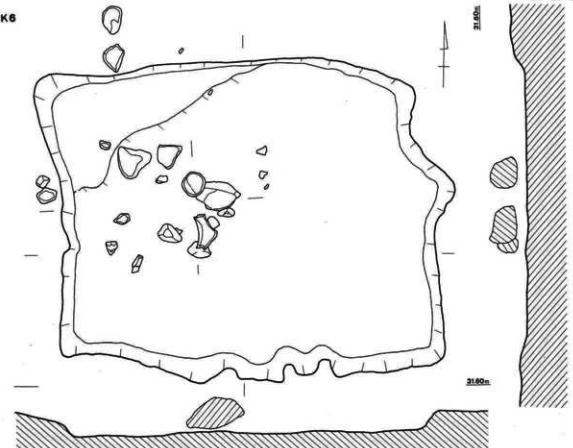


SK3

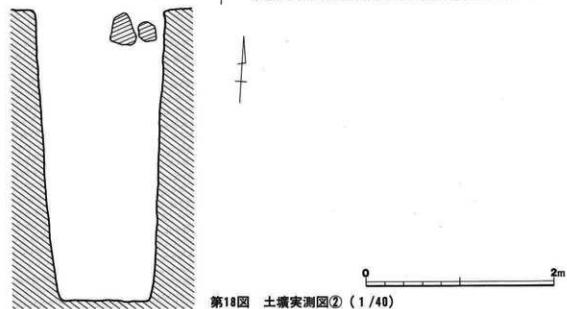
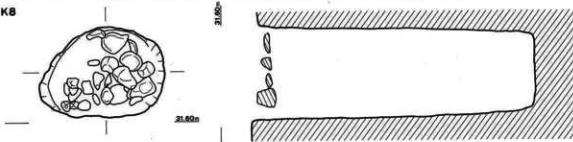


第17図 土壌実測図① (1/40)

SK6

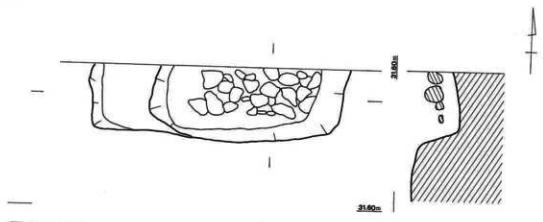


SK8

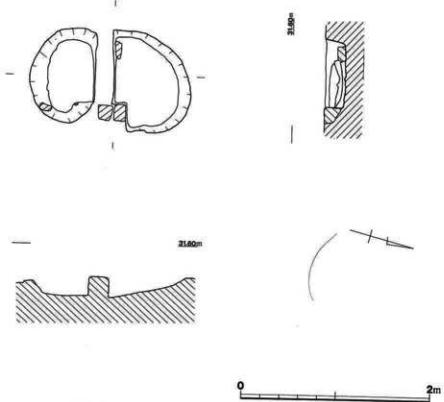


第18図 土壌実測図② (1/40)

SK9



SK11



第19図 土壌実測図③ (1/40)

## (4) 階段造構

## 階段造構 (第20図)

本丸跡東端に設定した22トレンチから検出された。幅は東西に約6m、長さは南北にとり、約12mにおよぶ5段の階段を有する。階段の踏み台部分は上段から4段目までは幅約1.3mを測り、最下段の5段目は幅約4.3mを測り、幅広い平場部分を造る。平場部分両端には門柱礎石と思われる石が見られる。階段下部から上部までの高低差は2mを測る。階段の踏石は取壊され、1段目に3石、2段目は3石、3段目に2石、4段目は全席残る。5段目は1石欠けている。

## 石垣造構

虎口を構成する石垣は4面からなる。築石は野面石あるいは粗削石を使用し、規格はそろっていない、積み方は布目崩し積み技法である。

## S F 1 (第20図)

虎口正面東側の石垣で、東端は崩壊のためか途中まで、残りは崖まで小石が積まれる。長さ約12m、高さ約2mを測る。隅角部は大部分が破壊され、角石は基底石1石のみが残るだけで、上部の算木積み状況は不明である。側面の石垣も上部は破壊されのかぎり状になる。

## S F 2 (第20図)

虎口正面東側の石垣である。長さ8.5m残存し、高さ約1.5mを測る。石垣上面部は破壊されたこぎり状になる。

## S F 3 (第20図)

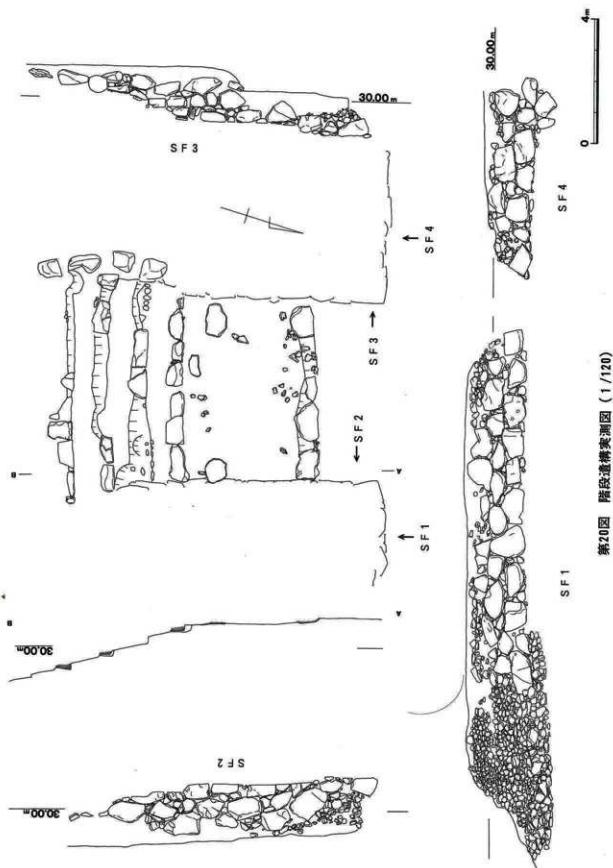
虎口正面西側の石垣で、隅角部は大部分が破壊され、角石は基底石1石のみが残るだけである。この面の石垣は本丸高石垣にそのままつながる。側面の石垣も上部は破壊されたこぎり状になる。

## S F 4 (第20図)

虎口側面西側の石垣である。長さ11m残存し、高さ約1mを測る。石垣上面部は破壊されたこぎり状になる。

## 参考文献

1. 北垣聰一郎 「石垣普請」 法政大学出版局 1987



## 5. 遺 物

### 遺物概要

第1次調査から第3次調査において、原城築城当時から島原の乱期におよぶ遺物約20,000点が出土した。各遺物については種類別にとりあげ説明するので、ここでは主な遺物を箇条書きであげる。

#### ①貿易陶磁器

青磁、白磁や特に染付などの明・清の中国製陶磁器が多く出土している。

#### ②国産陶器

唐津系陶器を主に、瀬戸美濃、信楽、肥前磁器などの製品がある。

#### ③土器・土製品

土罐、土師質土器、火鉢、人形などがある。

#### ④石製品

硯、石塔などがある。

#### ⑤キリストン関係

十字架、メダイ、ロザリオなどがあり、島原の乱を物語る資料として注目される。

#### ⑥貨幣

豆板銀、銭貨

#### ⑦金属製品

弾丸、刀関係、キセル、鎌、引手、分銅、釘、鉛製の製品がある。

#### ⑧瓦

軒丸、軒平、飾瓦などがある。

### 陶器

本丸地区及び空堀・蓮池地区から、戦国時代末期から島原の乱期（寛永期）におよぶ約20,000点の遺物が出土した。そのうち最も多く出土したのは貿易陶磁器で、主に中国陶磁器の青磁・白磁・染付などである。また、中国陶磁器の青磁のなかで、上記した年代よりさかのほると考えられる資料が数点みうけられる。これらは原城築城当時（1496年）より以前の資料と考えられ、本城である日野江城で使用されていたものようである。国産陶器は、唐津系陶器や肥前時期などが主で、一部瀬戸美濃・信楽などみられる。

なお、本遺跡における陶磁器の時期等については、佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長大橋康二氏に実見してもらひ御指導御教示いただいた。

## (1) 貿易陶磁器

### a. 青磁

1～3は原城築城以前の資料と考えられる。1は、皿の口縁部片である。灰緑色のガラス質釉がかかり。胴体中位で屈曲し、口縁部は外反ぎみに開く。2は、口縁に雷文帯を有する碗であるが、口縁部片のため明確でない。3は、ヘラ削り連弁文をもつ高台部分である。明るい緑色のガラス質釉がかかり貫入がはいる。見込みには團線が巡り花文がある。高台内は無釉である。2・3は直接接合はしないが同一固体と考えられる。4は、碗の口縁部片である。ヘラ削りで先端が弧線となる連弁を描く。明るい緑色のガラス質釉がかかる。5は、碗の口縁部片である。線刻で連弁を描くが、幅狭で退化している。明るい緑色のガラス質釉がかかる。6は、碗の口縁部片である。薄い緑色のガラス質釉がかかる。7は、碗の口縁部片である。櫛齒状工具で雷文の崩れ文を描いている。明るい緑色のガラス質釉がかかる。8は、香炉の口縁部片である。明るい緑色のガラス質釉がかかり、貫入がはいる。

### b. 白磁

出土した白磁は景德鎮系のもので、9～15は皿、16・17は碗である。9は、口縁部片である。口縁は「く」字状に外反し器腹は弓なりをなし貫入がはいる。口縁端部は綾花になり、見込みは蛇の目状になる。10～14は同種の皿である。口縁は外反し、器腹は弓なりをなす。高台は低く内湾する。高台疊付きには一部砂が付着している。15は、見込み部分を蛇ノ目状に剥ぎ取っている。口縁部は外反し、器腹中央部で屈曲する。高台は低く内湾する。見込み内と高台疊付部に砂が付着している。16は、やや薄手の作りである。口縁部は外反し、器腹は弓なりになる。17は、碗の高台部片である。厚手の作りであり、高台は低い。

### c. 染付

生産地は景德鎮系と福建・廣東系に大別できる。器形は皿、碗、瓶などがある。

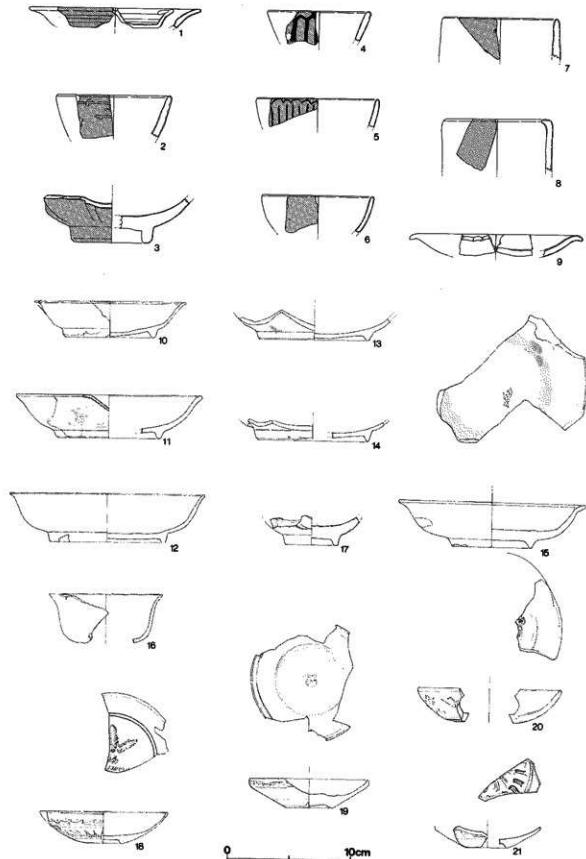
### 皿類

18～21は、口縁部が内湾気味におさまる基筒底の皿である。18は、口縁部に波頭文、外側面腰部に蕉葉文、見込みは團線内に草花文を描く。19は、見込みに團線を描き、蛇ノ目状に剥ぎ取っている。20は、口縁部片である。体部外壁に人物を描き、見込みに團線を描く。21は、外側面腰部に蕉葉文を描く。22～26は薄手の小皿である。22は、口縁部は直立し、器腹は浅く弓なりをしている。高台はひにくやや内湾している。見込みは染付で二重円團内に岩に草文が描かれている。23は、口縁部内外に円團線があり、見込みは二重円團線で草文が描かれている。24は、高台はひにくやや内湾している。高台内は二重円團内に「年」の銘がある。25は、口縁部は外反し、器腹は浅く弓形をしている。高台は低くやや内湾している。見込みは染付で二重円團内に山水が描かれている。26は、高台部片である。高台はひにくやや内湾している。見込みは染付で二重円團内に草文が描かれている。27～32は、同種の皿である。口縁部はわずかに外反し、器腹は浅く弓なりをしている。高台は低くやや内湾している。器腹内壁には龍が描かれ、見込みには圓團内に「天下一」の銘が記される。33～35は、同種の皿である。口縁部は外反し、器腹は弓なりをしている。高台は低くやや内湾ぎみになる。外壁には唐草文を描

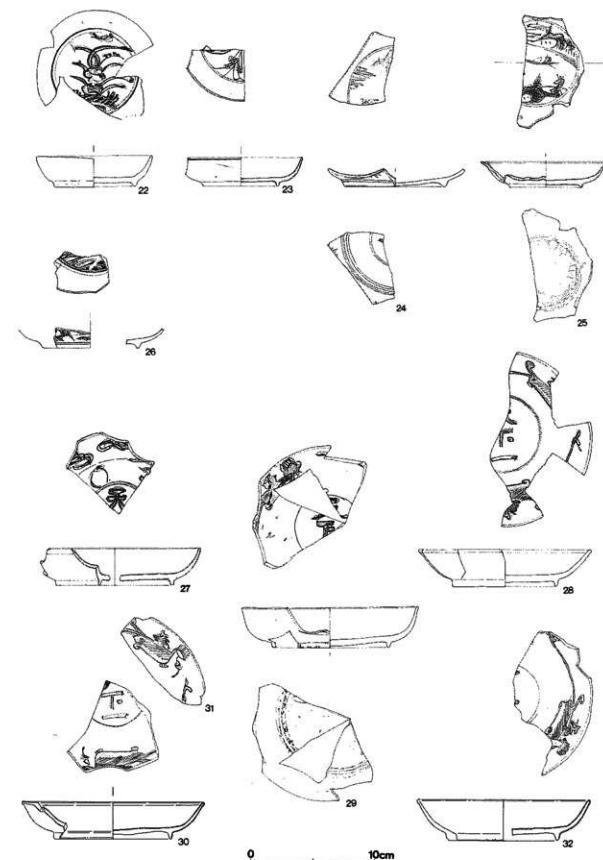
き見込みは円團内に欄干と草花を描く。33は内外に被熱痕がみられる。36は、外壁に唐草文を描き、見込みは円團内に草花を描く。37は、内壁に連弁形の縁どりの中に虫が描かれ、見込みは連弁形の縁どりの中に「鳥」の文字が記される。38は、高台部片である。高台は低く高台内は無釉である。内外面に被熱痕が認められる。見込みは唐草文を描く。39～41は同種の皿である。口縁部は直立し器腹は浅く弓なりをなす。口縁内壁に四方連文を施し、見込みは円團内に雨龍文を描く。高台部に初穀が付着している。42は、口縁部は外側に向かって広がり、器腹は浅く内壁下部でわざかに屈曲する。高台は低くやや内湾する。内壁には三方に鳳凰を配し、見込みは圓團内に「寿」を記す。43は、口縁部は外反し器腹は弓なりをなす。高台は低くやや内湾する。外壁に唐草文を描く。44～46は、口縁が外反する口縁部である。内外壁に草文を描く。47は、高台疊付きと同内部は釉がかからず露胎となり、高台疊付きを幅広く削り出し、蛇ノ目状になる。見込みは花籠が描かれる。48は、高台は低く内湾し、初穀が付着している。見込みはランに「雅」が描かれる。49は、見込みに山水文を描く。高台は低くやや内湾し、高台および同内部に初穀が付着している。50・51は、同種の皿であるが、高台部に違いがみられる。50は、高台疊付きを幅広く削りだし、蛇ノ目状になる。高台疊付きと同内部は釉がかからず露胎となる。見込みはランを描く。51は、高台は低く内湾している。高台疊付きと同内部は釉がかからず露胎となり、初穀が付着している。見込みはランを描く。52は、福建・廣東系の蝶型の吳須手の皿である。内壁には青海波文を、見込みは鳳凰を描く。高台には砂が付着している。53・54は、福建・廣東系の角皿である。53は、直線的に広がる口縁部で、浅く弓なりをする器腹がつく。高台は低く、初穀が付着する。見込みは二重團線内に驚・雲を描く。54は、口縁部は直立し、器腹は浅く弓なりをしている。高台は低く、初穀が付着する。55は、角皿と思われる口縁部片である。口縁は直線的で、外壁に水鳥を描く。56は、皿の口縁部片である。口縁部は外側に向かって広がり直線的である。内壁に青海波文を描く。57は、皿の高台部片である。見込み内には花鳥文を描き、高台内は砂が付着する。56・57は、直接接合しないが同一固体と考えられる。58は、芙蓉手の皿である。腰に段をつけ蝶状の縁をもつ、見込み中央に岩に草花を描き、周縁部は区切窓を設け花文を描き込んでいく。59は、口縁は外反し、器腹は弓なりをしている。内外壁に唐草と宝文を描く。60は、吳須手の高台部片で、見込みはダミによって文様を塗りつぶしている。胎土は橙色を呈し、高台には砂が付着している。61は、口縁部は外反し、器腹は弓なりになる大皿の口縁部片である。口縁内壁に唐草文を描く。62は、大皿の高台部片である。高台は低く、高台疊付きに砂が付着する。見込みには文字の一部が見られる。61・62は、直接接合しないが同一固体と考えられる。63は、芙蓉手大皿の口縁部片である。高台は低く内湾し、高台疊付きに砂が付着する。64・65は、吳須赤絵の皿である。直線的に広がる口縁部で、器腹は弓なりになる。高台は低く、高台疊付きに砂が多く付着する。文様の赤絵はほとんどが剥げ落ちている。64・65は、直接接合しないが同一固体と考えられる。

### 碗類

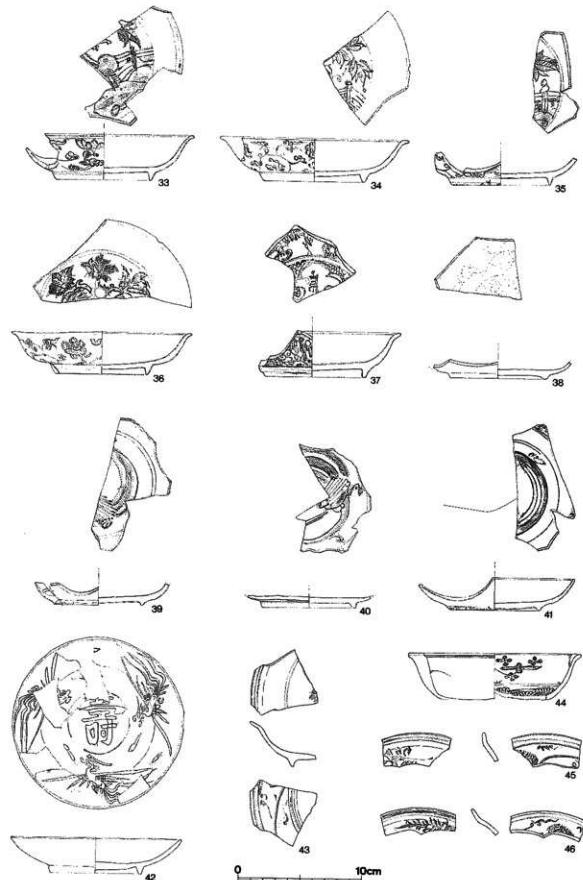
66は、極薄手の小皿である。高台はやや内湾する。67は、小皿の高台疊付きである。高台は低く高台内壁は無釉である。68は、小皿の高台部分である。高台は低く内湾している。高台疊付きと同内部



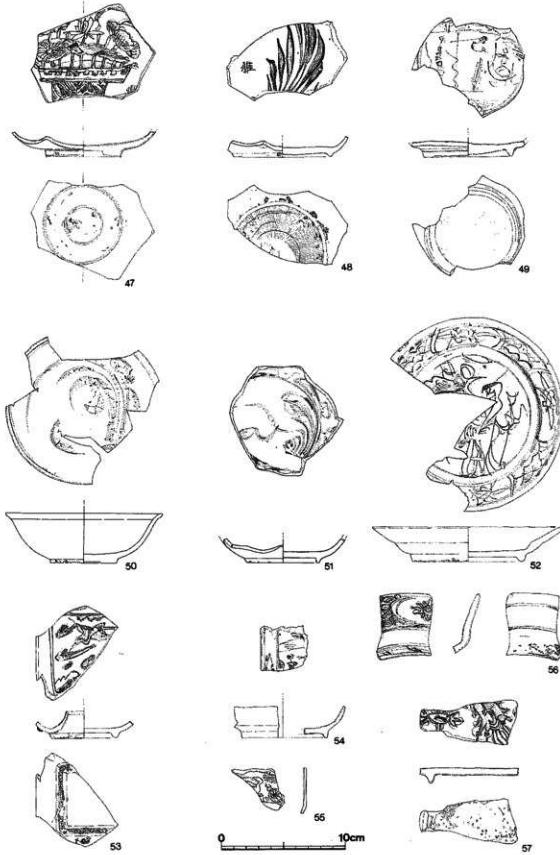
第21図 中国磁器① (1/3)



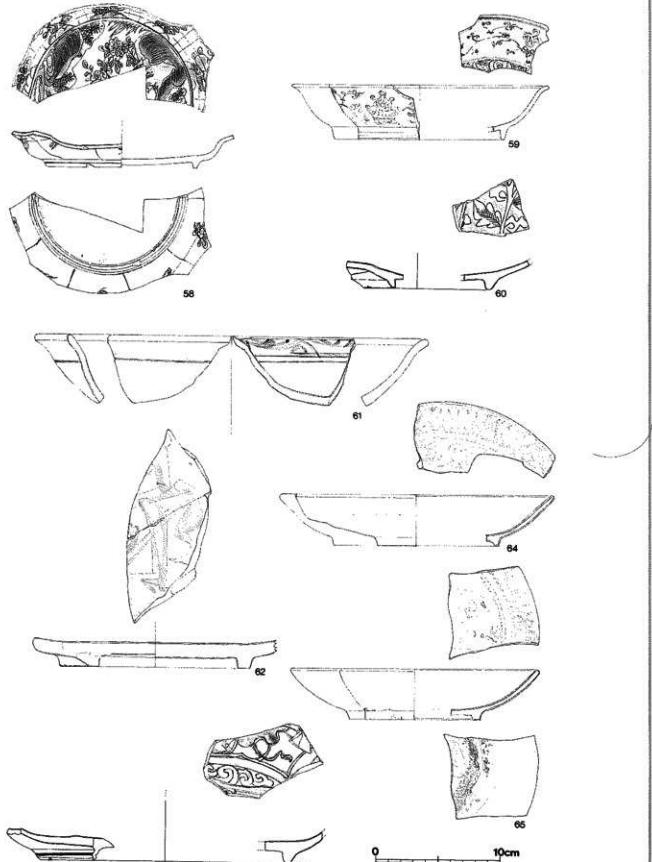
第22図 中国磁器② (1/3)



第23図 中国磁器③ (1/3)



第24図 中国磁器④ (1/3)



第25図 中国磁器⑤ (1 / 3)

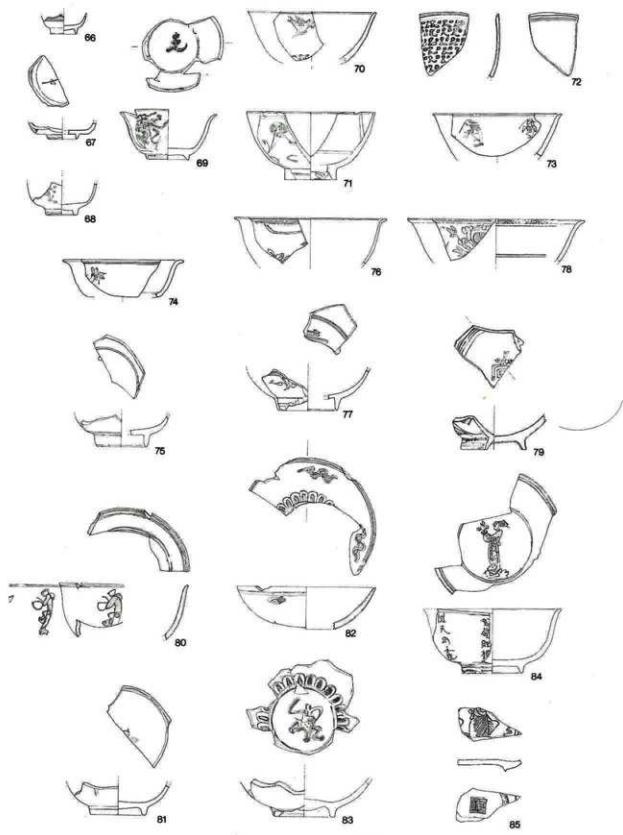
は釉がかからず露胎となる。69は、福建・広東系の小盃である。口縁部は外反し、器腹は弓なりになる高台は低くやや内湾する。外壁には龍を描き、見込みは「天」の字を記す。70は、碗の口縁部片である。口縁部は外反し、器腹は弓なりをなす。外壁には鳥を描く。71は、高台部はわずかに外反し、器腹は弓なりをなす。外壁に唐草文を描く。72は、口縁部片である。口縁部はわずかに外反し器腹は緩やかに弓なりをなすをなす。73は、口縁部片である。口縁部は外反し、外壁に唐子を描く。74は、口縁部片である。口縁は外反し、外壁に虫を描く。75は、74の高台部分であると思われる。直接接合しないが同一固体と考えられる。高台は高く内湾し、見込みは円窓を描く。76は、口縁部片である。口縁部は外反し、外壁に草木を描く。77は、76の高台部分であると思われる。直接接合しないが同一固体と思われる。高台は高く内湾する。見込みは二重円窓の中に「寿」を記す。78は、口縁部が外反する口縁部片である。口縁内部に四方津文を廻らし、外壁には牡丹を描く。79は、78と直接接合しないが同一固体と考えられる高台部片である。見込みに「尚」の字が記される。80は、福建・広東系の碗の口縁部片である。口縁部は外反し外壁には唐子を描く。73と生産地は違うが、同じ構図である81は、高台部片である。80と直接接合しないが同一固体と考えられる。82は、口縁部はわずかにすぼまり器腹は裙部に向かってすぼまる。内壁に宝文を描き、見込み部分には連弁を廻らす。83は、82と同類の高台部片である。高台は低くやや内湾する。見込みは連弁を廻らし宝文を描く。84は、口縁部は外反し、器腹は弓なりをなす。高台疊付に粉敷が付着する。外壁には詩句文を廻らし、見込みは二重円窓の中に唐人を描く。85は、高台部片である。見込みに魚を描き、高台内に「富貴佳器」銘の崩れを方形枠内に描く。86は、高台は低く直線的である。高台内部は釉がかからず露胎となる。見込みは草木文を描く。87は、高台は低く内湾する。高台外壁に円窓を廻らし、見込みは草木文を描く。88は、高台は高くやや内湾する。高台内に二重円窓を廻らし、見込みは花文を描く。89は、高台は高く直立する。見込みは円窓内に花文を描く。90は、口縁部片である。口縁部は直立し、外壁には龍雲を描く。91は、90と直接接合しないが同一固体と考えられる。器腹は弓なりをなす。高台は低く疊付に砂が付着している。外壁に雲、見込みは二重円窓の中に柳を描く。92は、90・91と同類の碗であると思われる。外壁に龍雲を描く。93は、口縁部は直立し器腹は弓なりになる。高台は高く、高台内壁に粉敷が付着している。外壁は唐草文、見込みは白抜きで十字花文を描く。94は、高台は低く、高台内には釉がかからず露胎となる。器壁内外に幅広の二重円窓を廻らす。95は、口縁部は直立し器腹は裙部に向かってすぼまる。高台および胸内部は釉がかからず露胎となる。外壁には文字が描かれる。

## 瓶類

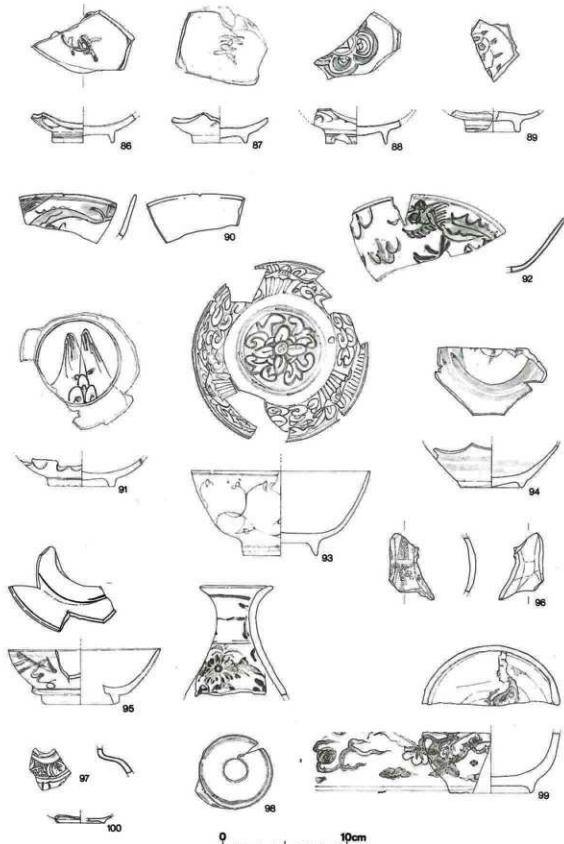
96は、六角に面をとり、頸部に把手が欠けた跡が見られる。器壁には草木が描かれる。97は、器肩部に九角間文様の中に窓を設け「寿」字文が入る。98は、朝顔形に開いた口部を持つ、胸部には菊を描いている。99は、高台は低く内湾している。外壁には龍雲が描かれている。

## 陶器

100は、袋物の高台部片である。型打成形で極薄手である。外面に黄釉を施す。



第28圖 中國磁器② (1/3)



第27圖 中國磁器① (1/3)

## (2) 国産陶磁器

## a. 磁器

本遺跡から出土した国産磁器の生産地は肥前である。器形は皿・碗・瓶などである。

## 皿類

1は、高台は低くやや内湾する。高台疊付きに砂が付着している。見込みは松を描く。2は、高台は低く内側にすぼまるようにおさまる。高台疊付きに砂が付着している。見込みは松を描く。3は、高台は低く内湾する。高台疊付きと同内部は釉がかからず露胎となる。高台部は被熱している。4は砂目積みの皿である。高台疊付きに砂目跡が4カ所見られる。見込みは二重円圈を廻らす。

## 碗類

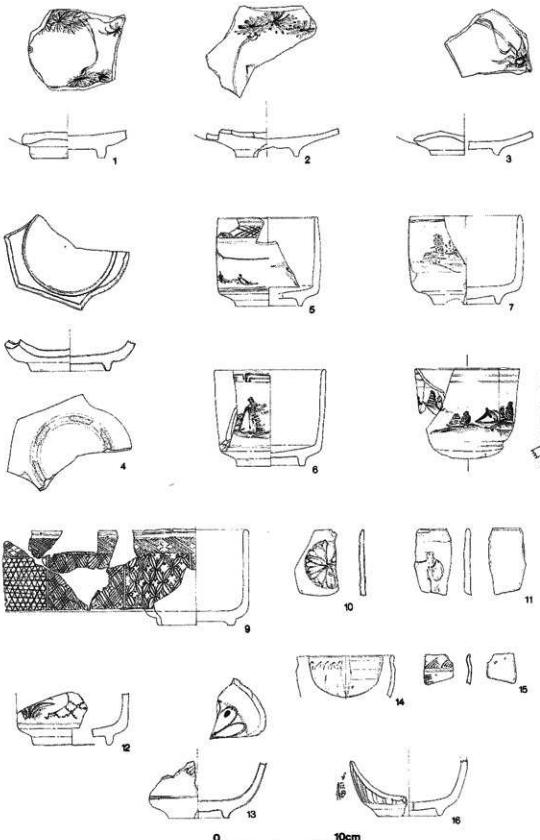
5~12は筒型碗である。5は、高台は低く、口縁部外壁に四方博文を廻らし、器腹には山水文を描く。6は、高台は低く、口縁部外壁に雷文を廻らし、器腹には山水文を描く。7は、被熟跡が見られる。高台は低くやや内湾する。口縁部外壁に二重円圈を廻らし、器腹は山水文を描く。8は、口縁部に円圈を3本、胴下部に2本廻らす。外壁には山水文を描く。9は、16角に面を取ったものと思われる。口縁部外壁に円圈を、その下に四方博文を廻らし、器腹は七宝・四方博文・籠目の区画間文様を描く。10~11は、口縁部片である。10は、外壁に菊花を描く。11は、口縁部外に二重円圈を廻らし、外壁には唐人を描く。12は、高台部分である。高台は低くやや内湾する。外壁に網目文の区画間内に草花を描く。13は、高台は低くやや内湾する。外壁と見込みに菊花を描く。14は、口縁部片である。口縁部外壁に連弁を廻らす。15は、口縁部片である。口縁部は外反し外壁に「福」の字が記されている。16は、陽刻の天目系の碗である。高台は低く内湾する。外壁には「福」の字が記される。17は、口縁部は直立し、器腹はわずかにすぼまっている。高台は内湾し、内部には砂が付着している。口縁部外壁に二重円圈を廻らし、器腹に竹を描く。

## 瓶類

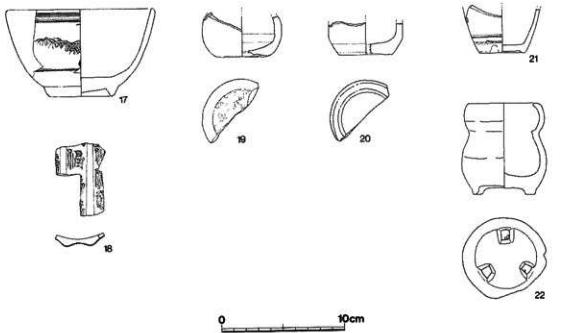
18は、肩衝瓶の器腹片である。「福」字を記す。19~20は、袋物の底部である。19は、疊付き部に粗穢が付着している。20は、器腹底部と疊付きは無釉で露胎となる。内部も釉がかからず露胎である。21は、高台は釉がかからず露胎である。外壁下部に二重円圈を廻らす。

## 香炉

22は、青磁の香炉であるが酸化で黄褐色に変色している。口縁部はすぼまり、胴部でくぼみをつける。器底に小さな足が三方に取り付けられている。



第28図 日本国器① (1/3)



第29図 日本磁器② (1/3)

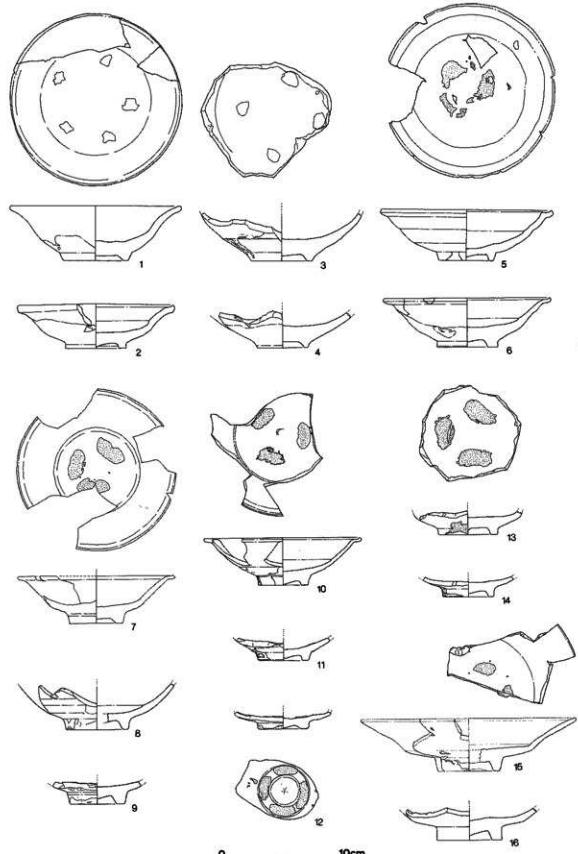
## b. 陶器

出土した陶器は唐津系の陶器が主で、一部瀬戸美濃系、信楽がある。器形は皿・碗・瓶・甕などである。

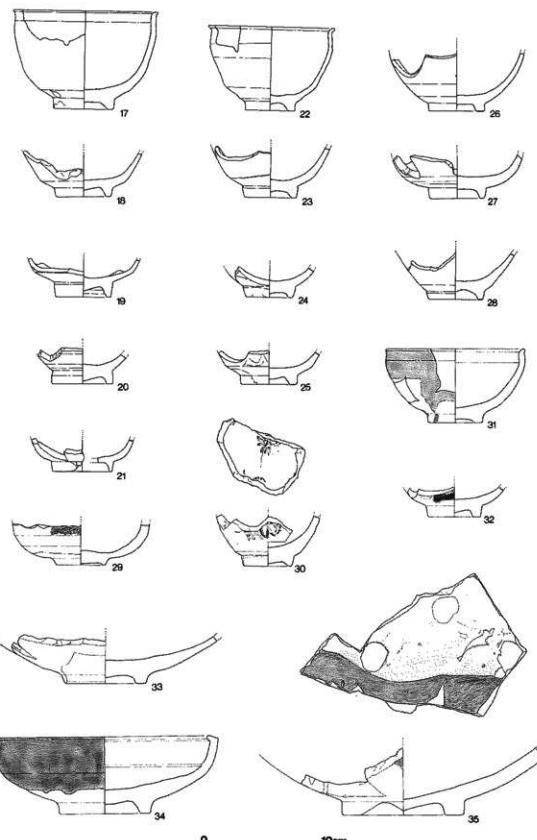
1~4は、薺灰釉の溝縁皿で、胎土目積みである。1は、見込みに5カ所の目跡が付く。口縁部は外反し、口縁部上面に溝状のへこみを設ける。高台は粗く削り出される。釉は内面と外面の腰部までかけられ、底部には無い。釉色は白濁色となり、細かな貫入が入る。2は、見込みには目跡はないが1と同類のものである。3~4は、見込みに目跡が付き、高台は低く内湾する。釉は内面と外面の腰部までかけられ白濁色になる。4は、細かな貫入が入る。5~16は、薺灰釉の溝縁皿で、砂目積みである。5・6は見込みに砂目が付く。釉は内部と外部の腰部までかけられ黄緑色となり光沢がある。7~9は、見込みと高台疊付きに砂目が付く。7は、口縁部は外反し溝がはいる。釉は全体にかかり、白濁色となる。8・9は、高台外壁まで釉がかかり、高台内は無釉で露胎となる。10~12は、灰色胎土で硬質である。釉は高台内までかかる物(11・12)と、かからない物(10)があり、明るい灰色となる。見込みと高台疊付きに砂目が付く。13~14は、高台部分で、見込みと高台疊付きに砂目が付く。15は、口縁部に溝縁がない点と高台が高いところが他と異なる。見込みと高台疊付きに砂目が付く。16は、口縁部分がないが15と同種の皿である。見込みと高台疊付きに砂目が付く。17~32は碗である。17は、淡紅色の素地に、白濁色の釉で全面施釉する。口縁部はわずかに外反し、器腹は弓なりをなす。高台疊付きに砂目が付く。18は、緑灰色の釉がかかる。高台は低くやや内湾する。19は、灰白色を呈し、高台内も釉がかかる。高台は高く直立する。20・21は、白濁色の釉で全面施釉する。高台は高く、胸部との接点を少し削っている。細かな貫入が入る。22~24は、灰色胎土で硬質であり高台と副部と

の接点を少し削っているという特徴がある。22は、白濁した灰白釉を呈すが、高台疊付きと同内部は釉はかからず。23は、淡い青白色を呈す。24は、高台外壁および内部と疊付きには釉はかからず露胎である。25は、淡紅色の素地に、白濁色の釉をかける。高台は低く直立する。高台疊付きと同内部は無釉で露胎となる。26は、灰色の胎土で硬質である。オリーブ灰色の釉で全面施釉する。高台は低く直立する。高台疊付きに砂目が付く。27は、灰色の胎土で硬質である。灰緑色の釉をかける。高台は低く、やや内湾する。同内部は無釉である。28は、緑灰色の釉がかかる。高台は胸部との接点は少し削られ、見込みには砂と粗粒が付着している。29は、灰白色の粗い胎土で、白濁色の釉を外面の腰部までかけ、底部は釉はかからず露胎である。器腹外壁に鉄釉で文様が入る。30は、灰色の胎土で、灰白色の釉が高台の付根までかかる。高台および同内部は釉はかからず露胎である。見込みと外壁に鉄釉で文様が入る。31は、素地は灰色胎土で、内部および外壁に暗褐色の鉄釉がかかる。高台および同内部は釉はかからず露胎である。口縁部はわずかに外反し、器腹は緩やかに底部にむかってぼまる。高台は低く、高台内は浅い。32は、暗褐色の鉄釉がかかる碗の底部である。素地は褐灰色胎土であるが、露出している高台部の胎土は灰白色である。33は、素地は灰白色の胎土で、オリーブ灰釉がかかる大皿である。高台および同内部は釉はかからず露胎である。高台は低く内湾する。

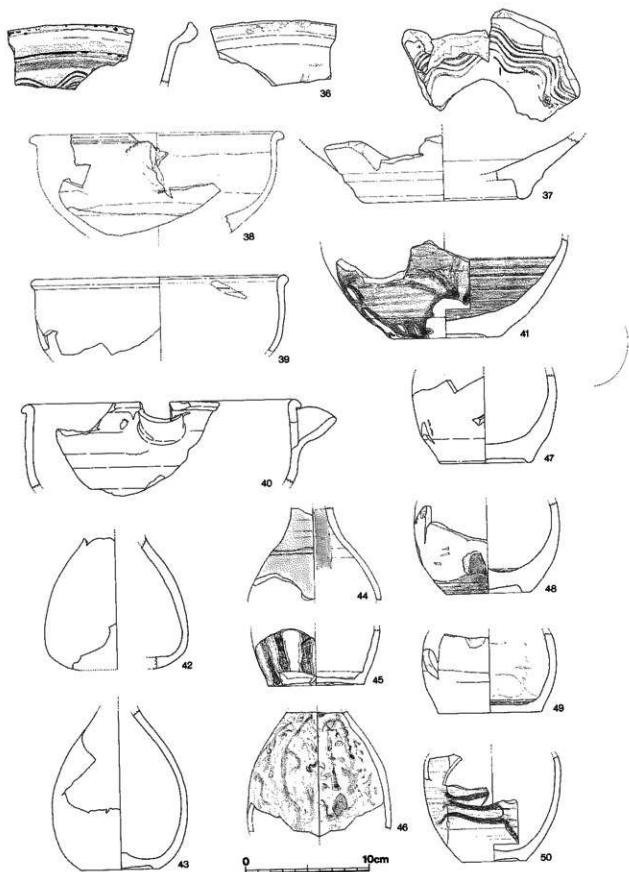
34は、器壁外に鉄釉をかけた火入れである。高台部には釉はかからず、橙色の露胎となる。35は、鉄釉と灰釉をかきわけた砂胎目の大皿である。高台は低くやや内湾し、高台疊付きは幅広い。36は鉢の口縁部である。白土を刷毛目状に塗り、さらに灰釉を施している。口縁は外反し端部は上方に摘み出されている。37は、鉢の高台部である。橙色の胎土に白土を刷毛目状に塗り、高台部分には釉はかからず。高台は内側に向かって削り、三角形をしている。38~40は、片口鉢である。38は、注口部分が欠け、被熱を受けている。外壁は鉄釉が腰下までかかる。39は、鉄釉がかかる口縁部である。40は、赤褐色の素地に鉄釉がかかる注口部分である。口縁部下を半円状に削り取り、注口を貼り付ける。42~50は、瓶である。42は、灰白色の釉がかかる胸部分である。細かな貫入が入る。白磁の可能性もある。43. 暗褐色の釉がかかる。底部には釉はかからず、露胎となる。高台内には輪轉成形の跡が残る。44は、灰白色の素地に胎釉がかかる。内面には胎釉の垂れ痕や、同心円状の叩き痕が残る。45は、胎釉の垂れ痕がつく瓶の底部である。内面には同心円状の叩き痕が残る。44・45は、直接接合しないが同一固体と思われる。46は、外面上に胎釉を施す。46は、ぶい橙色の素地に腰部まで白濁色がかかる瓶の底部である。底部は余剰後に高台を削りだす。48は、釉薬内に指の跡が残る。49は、暗青灰色の素地に腰部まで白濁色の釉がかかる。底部は平底で無釉である。50は、ぶい黄澄の素地に白濁色の釉を腰部までかける。瓶に横に置き白濁色の釉の上から銅緑釉をかけたと思われ、横方向に銅緑釉の垂れ跡がある。底部は露胎で削りだされた高台が付く。51~61は、甕である。51は鉄釉を施す、口縁部分である。内面に格子目状の叩き痕が残る。52は、内面に格子目状の叩き痕が残る。口縁部上部には釉がかからない。53は、全体に鉄釉を施す。内面に格子目状の叩き痕が残る。54は、灰白色の素地に淡黄色の釉がかかる。口縁部は直し玉縁状になり、内面には同心円状の叩き痕が残る。55は、口縁部上部に貝目の痕が付く。口縁部上部は無釉である。56は、全体に鉄釉を施す。



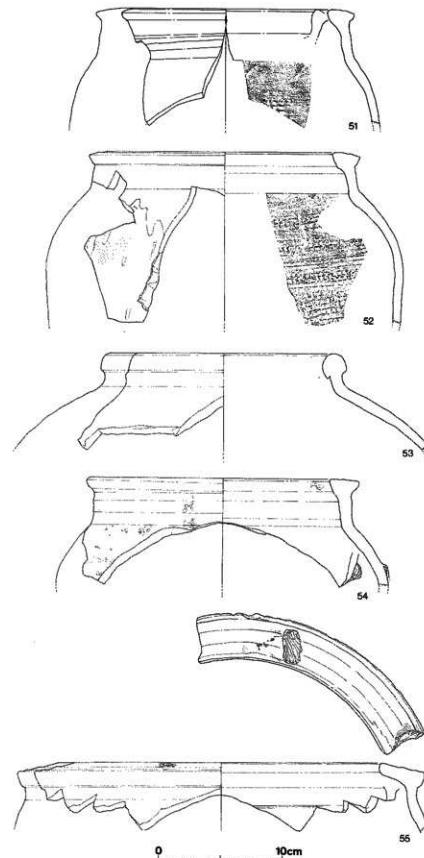
第30図 日本陶器① (1 / 3)



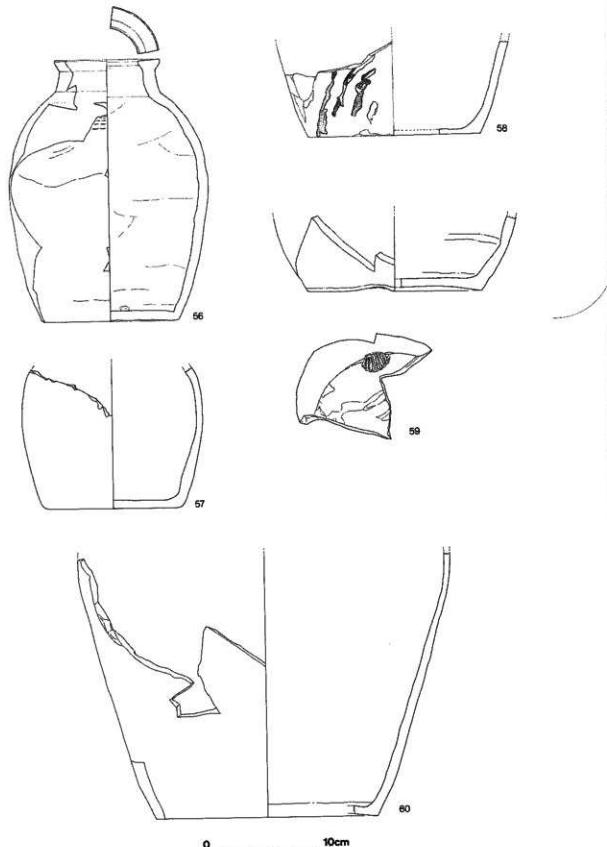
第31図 日本陶器② (1 / 3)



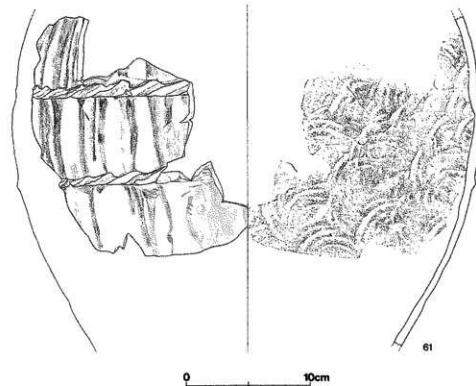
第32図 日本陶器③ (1/1)



第33図 日本陶器④ (1/1)



第34図 日本陶器⑤ (1 / 3)



第35図 日本陶器⑥ (1 / 3)

口縁部上部は釉がかからない。底部は平底である。57は、光沢のあるオリーブ灰色の釉がかかる。内面には同心円状の叩き痕が残る。58は、鉄釉を施す平底の部分である。内面には同心円状の叩き痕が残る。59は、白灰色の素地に、灰オリーブ色の釉がかかる。底部は平底で貝口の痕が付く。60は、外壁に鉄釉がかかり、内面は同心円状の叩き痕が残る。61は、胎釉がかかる外壁部分である。胴部に繩文を2本廻らす。内面は同心円状の叩き痕が残る。55は、61の口縁部と思われる。62は、鉄釉がかかる小徳利の胴部分である。63は、胎釉がかかる小瓶の底部である。上部まで繋がる資料がないため全体の型形はわからない。64は、小瓶の底部である。外壁に胎釉、内面に灰黄褐色の釉がかかる。底部は平底で糸切痕が残る。65は、灰オリーブ色の釉を全面に施す瓶の底部である。底部は平底で、砂目痕がのこる。66は、小瓶の底部である。外面に釉がかかり、内面は無釉である。見込みに輪籠成形の痕が残り、底部は平底で糸切痕が残る。67は、赤褐色の素地に鉄釉を、内面と口縁部外壁にかける平皿である。口縁部は内側に内溝し、高台部は平底で糸切痕が残る。68は、胎釉がかかる高台部分である。釉は見込みと腰部分にかかり、高台部分は無釉で露胎である。高台は低く削り出し、高台内は輪籠成形の痕が残る。69は、何らかの蓋と思われるが用途は明らかではない。上部分に鉄釉がかかる。70は、燭台である。内面と口縁部外壁に光沢のある鉄釉がかかる。底部は平底で糸切痕がある。71は、油壺である。灰オリーブ色の釉を全面に施す。72は、灰オリーブ色の釉を全面に施す小鉢である。口縁部は内側に向かって摘みだし、器腹は口縁部下でくびれ、腰部は膨らむ。高台は直立する。73・74は、瀬戸美濃系の皿で灰釉を施す。口縁部は外反し、口縁上部に溝が入る。見込みは花弁を線

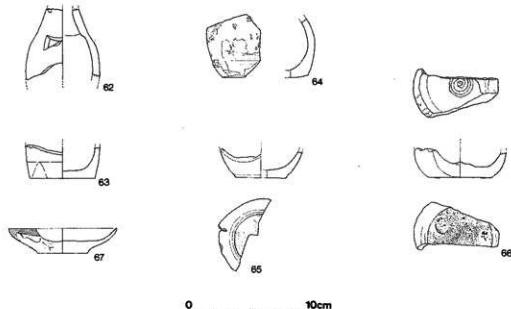
刻しその上に鉄軸をかける。これらは直接接合しないが同一固体と思われる。75は、擂鉢の口縁部片である。口縁部分に鉄軸を施す。鉄軸は7本に入る。76は、内野山窯の小碗である。黄褐色の釉が内面と外壁腰部までかかる。高台部は無釉で露胎となる。口縁部は直立し、器腹は弓なりをなす。77・78は、志野の茶碗片で、鉄軸で文様を描く。79は、全体に絞釉を施す織部の製品である。水注の注ぎ口部分と思えるが、明確ではない。80は、壺に壺の耳部であろう。全体に鉄軸を施す。81・82は、三島手の器部分である。83は、信楽の水指である。

## 参考文献

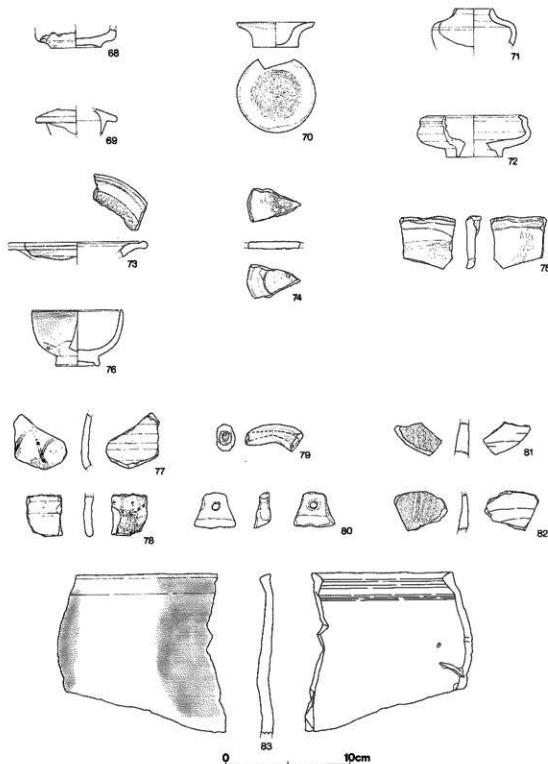
- 森田勉「14~16世紀の白磁の形式分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』 日本貿易陶磁研究会 1982
- 小野正敏「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』 日本貿易陶磁研究会 1982
- 森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会『太宰府陶磁器研究』 1995
- 中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』 真善社 1995
- 大物藏二『肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社 1989
- 大橋豊二『古伊万里の文様』 理工学社 1994
- 波佐見町教育委員会『畑ノ原窯跡』 波佐見町文化財調査報告書 第3集 1988
- 長崎県教育委員会『才町遺跡』 長崎県文化財調査報告書 第123集 1995
- 長崎市埋蔵文化財調査協議会『朝新聞社・長崎支局敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』 1992
- 長崎市埋蔵文化財調査協議会『栄町遺跡』 1993

## 参考図録

- 三杉隆敏・柳原昭二『陶磁器染付文様事典』 柏書房株式会社 1989
- 大阪市立東洋陶磁美術館『皇帝の磁器』 大阪市美術振興協会 1995
- 『古唐津の流れ』 読売新聞社 1993



第36図 日本陶器① (1/3)



第37図 日本陶器② (1/3)

## (3) 土器・土製品

土器・土製品は2,000点出土している。その内の26点について図化した。

1・2は、土師質土器の小皿である。橙色を呈し、底部は平底で糸切り痕が有する。3は、浅黄褐色を呈し、口縁部の内外壁に油状のススが付着している。内底面端に竹木の先端によってつけられたと思われる圓線が入る。4は、口縁部を外側に突帯を付け、脇部にも1条の突帯ある。口縁部下に文と長方形の棒状のもので4個スタンプしている。5は、火鉢の胴部分であろう、突帯の下に菊花文にいた花文がある。6は、火鉢の口縁部片である。菊花文にいた花文がある。7~11は、把手の一部である。12~24は、土鍤である。素焼きで、橙色・明赤褐色・明黃褐色などを呈する。12~14は、厚手で器腹は大きく膨らむ。15~18は、器形はだいいたい上下均等になる。19~24は、器形が不均等である。25・26は、素焼きの人形である。25は、頭部で、26は、手の部分である。共に19トレンチより出土。

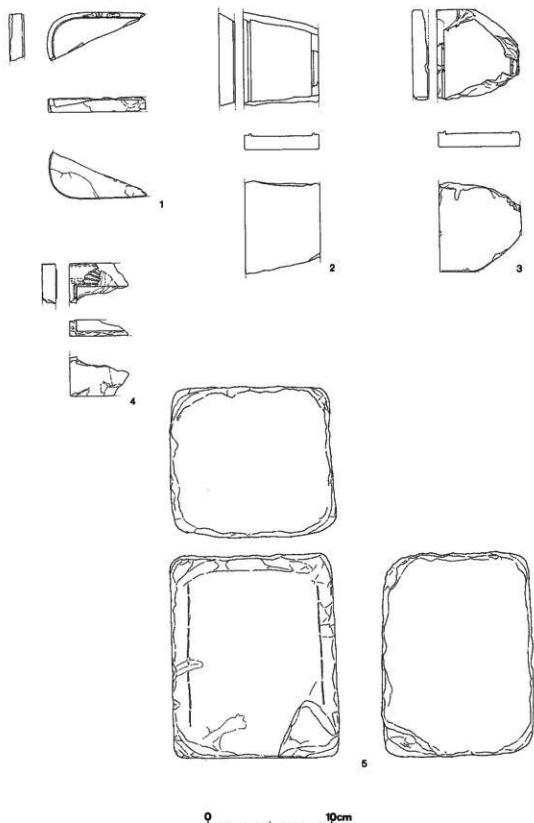
## (4) 石製品

1~5は鏡で、全て灰褐色を有する。1は、海部分の一部である。角部はカーブしている。厚さ1.1cmを測る。15トレンチから出土。2は、海部と下部を欠失している。幅6cm、厚さ1.2cmを測る。15トレンチから出土。3は、下部である。幅6.5cm、厚さ1.1cmをはかる。22トレンチから出土。4は、海部分の一部である。縁部に文様が見られる。厚さ1.1cmを測る。15トレンチから出土。5は、宝鏡印塔の塔身である。正面の両端に縦の刻線がはいる。石質は粗粒玄武岩で時代は16世紀末、階段造構内出土。

註1. 長崎県立大村高校教諭 大石一久氏に実見してもらひ御指導御教示いただいた。



第38図 土器・土製品 (1/3)



第39図 石製品（1/3）

## (5) キリストン関係

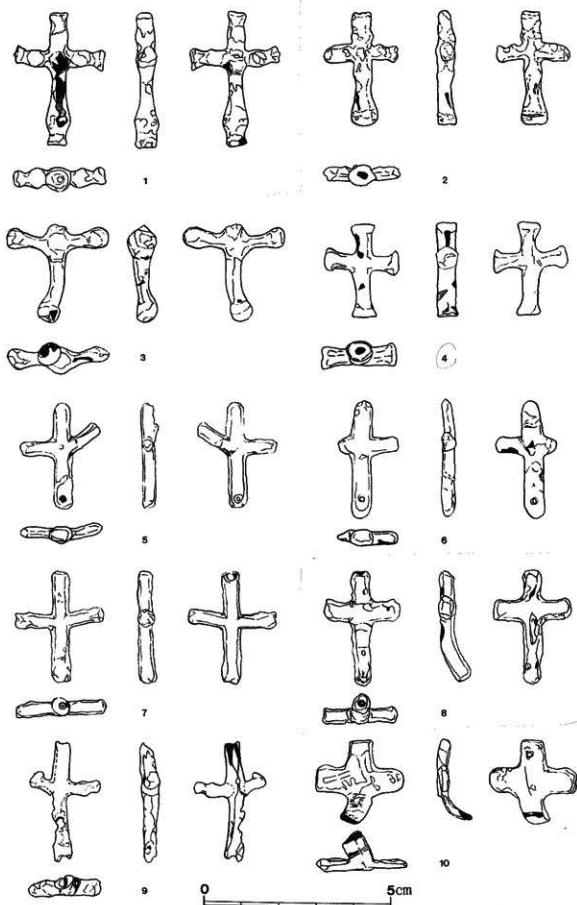
本丸跡より、キリストン関係遺物の十字架15点、メダイ11点、ロザリオの珠19点が出土した。出土状況は、炭を含む層から人骨片と共に出土する。また、土壌墓と思われるものからの出土もある。

なお、キリストン関係遺物については、日本26聖人記念館館長 結城了悟氏に実見してもらい御指導御教示いただいた。

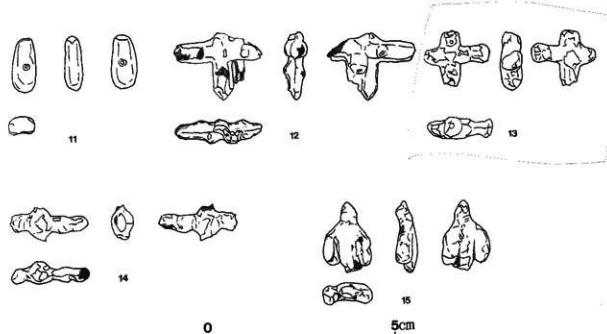
## a. 十字架

全て鉛製である。島原の乱の時、籠城中に信者が、火縄銃の弾丸を溶かして作ったと思われるもので、製法は型作りである。当時、ロザリオに付けられていた十字架は木製の三つの玉を合わせてできており、この三つの玉を粘土に型押しして、その型に鉛をそいで作ったと思われる。他に4種類の型があるが、これらも型作りと思われる。

1は、三つ玉型で作ったと思われるものである。上下左右に玉の型と思われる膨らみがあり、紐を通すためのものか、上下筒状になる。2は、1より小降りであるが同類のものである。上下左右に膨らみがあり、上下筒状になる。3は、上部を欠失している。中央部と左右端、下部端に球状の膨らみを持つ。上下筒状になる。4は、上下左右端が広がり、上下筒状になる。5は、上下左右とも均等幅で形成される。上下筒状になる。6は、上下左右とも均等幅で形成される。上下筒状になる。下部中央部から曲がる。7は、断面は方形で、上下左右とも均等幅で形成される。下部に穴が開けられているのが特徴である。また中央部片側に円形の窪みが付けてあり、横軸片側が中央付根部分から上方に向かって曲がる。8は、断面は方形で、上下左右とも均等幅で形成される。下部に穴が開けられている。横軸片側が欠失している。9は、断面は方形で、形成されているが、破損状態がひどく、特に下部は破れ開いている。器形は上下左右均等幅で、上下筒状になる。10は、平な板状である。下部分が欠失し、弓状に反っている。上下左右均等幅で形成される。11は、下部分である。7・8と同様下部に穴が開けられている。12は、中央部分で、上下部と横片側が欠失している。断面は方形で上下左右の袖部面中央に小さな突起部分がある。また、形成時に錫合わせえたものか、前後でずれてついている。13は、上下部と横片方部を欠失している。中央部に円形の突起文様をつけ、袖部はいたん中央ですばり、端はラッパ状に広がる。14は、上下部と横片方部を欠失している。1・2と同類のもので上下左右に玉の型と思われる膨らみがある。15は、上下部を欠失している。横両側は、付根部分から折れ曲がる。



第40図 十字架① (1/1)



第41図 十字架② (1/1)

**b. メダイ**

メダイは、11点出土している。全て青銅製で、ヨーロッパ製である。3種類の大きさと、2種類の型に分けられ、それぞれ表裏に絵が刻まれている。分類すると次の3タイプになる。

## I類

縦が3cm、横が2cmを越えるもの。

## II類

縦が2cm以上、横が1.5cm以上で、縦部の形状から2タイプに分けられる。

## II-a類

横両縫部と下縫部に十字架の型を示す突起物が付くもの。

## II-b類

突起物が付かないもの。

## III類

縦が2cm以下、横が横が1.5cm以下で縦部の形状から2タイプに分けられる。

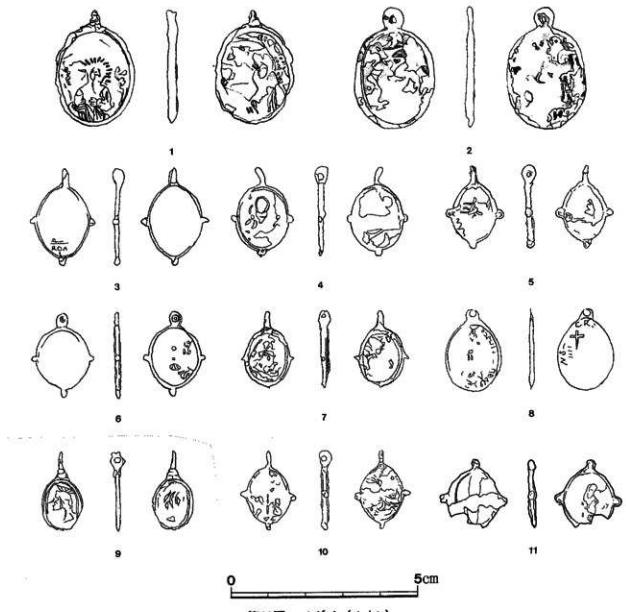
## III-a類

横両縫部と下縫部に十字架の型を示す突起物が付くもの。

## III-b類

突起物が付かないもの。

また、これらのラメダイは錆付しており、表裏に刻まれている模様は確認できなかったが、長崎大学病院放射線科の協力によりX線撮影で明確になった。



第42図 メダイ (1/1)

1は、I類である。図柄は、福音イグナチオ・デ・ロヨラと福音フランシスコ・ザビエルを描いている。2は、I類である。図柄は、表に聖杯とホスピティアを捧む天使の絵、裏には、ポルトガル語でLOVVADO SEIA O SANCTISSIMO SACRAMENTO（いつも尊き聖体の秘蹟はほめ尊まれ給え）が書かれる。3は、II-a類である。このメダイについてはX線撮影しておらず、図柄は不明であるが、下部に文字が見られる。4は、II-a類である。天使聖体礼拝図が描かれる。5は、II-a類である。無原罪の聖母（太陽を背に弦月上に合掌して立つ聖母）が描かれる。6は、II-a類である。天使聖体礼拝図が描かれる。7は、III-a類である。無原罪の聖母が描かれる。メダリ上部には、メダイとロザリオをつなぐための、細い針金状のものをコイル状にまいたものが付いていた。8は、II-b類である。このメダイについてはX線撮影しておらず、図柄は不明であるが、左上部に十字架と片面には縁沿いに文字が見られる。9は、III-b類である。サルバトール・ムンディ（世の救い主）が

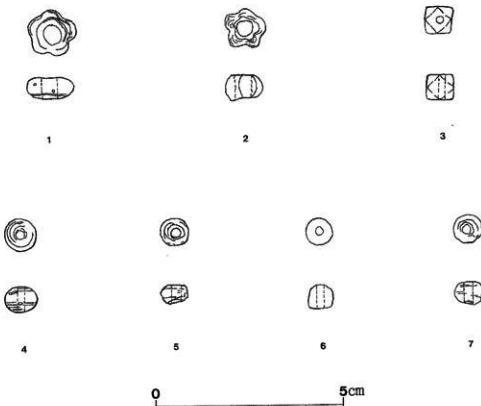
描かれる。10は、III-a類である。十字架にかけられたイエスとその傍らに立つ聖母マリアが描かれる。11は、II-a類である。無原罪の聖母マリアが描かれる。

#### c. ロザリオの珠

ロザリオの珠は、19点出土している。青色、緑色、白色のガラス製でポルトガルか中国のものである。いずれも、中央に穴が開けられており紐が通せるようになっている。そのうち7点を図化した。1・2は、青色で花形の珠である。3は、緑色で14面にカットされた面を持つ。4～6は、大きさは異なるが白色の珠である。風化によりガラスが白化している。6は、鉛製の珠である。ロザリオの珠かどうか不明であったが形状からロザリオの珠に分類した。十字架の場合と同様、籠城中の信者の製作かと思われる。

#### 参考文献

1. 結城了悟 「キリスト教遺物の謎」『キリスト文化研究会会報105号』 1995



第43図 ロザリオ (1/1)

## (6) 貨幣

九州帝京短期大学 櫻木 晋一

銀貨

豆板銀が18個出土している。九州内で豆板銀が出土した遺跡は、長崎市栄町遺跡・鹿児島県鹿屋市前畠遺跡1号墓・福岡県久留米市両替町遺跡でそれぞれ1個ずつ出土している。これだけの数がまとまって出土した遺跡は全国的にも希であり、貴重である。

豆板銀は丁銀の補助として作られたもので、形・大きさは一定ではない。本遺跡出土の豆板銀も、重量は16を最大とし、14が最小で、大きさはさまざまである。豆板銀は表面積が狭いため、「大黒像」、「常是」字、「寶」字のいずれか1個または2個が刻印してある。元禄・宝永・元文期などに作られたものには年代印が打たれているので、判別は比較的容易だが、慶長期と正徳・享保期のものは年代印がなく、銀の品位がともに80%と高品位で、その判別は容易でない。その刻印の特徴で豆板銀の時期を判定するのだが、豆板銀が小さく、これらの刻印の特徴を読み取れないものも存在する。本遺跡から出土した18個の豆板銀の時期を、少しきめのものでこれらの刻印から判別可能なものと、慶長期の形態の特徴である平たく平面的なものが多いことから推測すると、慶長期であると思われる。慶長期のものは、大黒天が横向きで「寶」字が横長、「常是」の足が長く、正徳・享保期のものは大黒天が正面を向いており、「寶」字のウカムワリがナベヅタのようになっているという特徴がある。また、金・銀貨には両替商で打たれた小さな刻印が存在するもの多く、本遺跡出土の豆板銀にもさまざまな種類の小刻印が打てある。小刻印は品質確認のために打たれたといわれているが、どこの両替商で打たれたものかなどについては、不明な点が多く、今後の研究課題として残っている。以下、個別の豆板銀について観察所見を述べる。

1は、小刻印「㊀」「㊁」を2個確認できる。

2は、「寶」字を確認できる。ウカムワリの特徴が確認でき、慶長期のものである。表裏に小刻印「㊀」「㊁」「㊂」などを数個確認することができる。

3は、「常是」字を確認できる。「是」字の五画目が直線的であり、慶長期のものである。表裏に小刻印「㊀」「㊁」「㊂」「㊃」「㊄」「㊅」「㊆」「㊇」「㊈」など約10個を確認できる。

4は、「常是」字を確認できる。「是」字の五画目が直線的であり、慶長期のものである。表裏に小刻印「㊀」「㊁」「㊂」などを数個確認できる。

5は、「常是」字と「大黒像」の一部を確認できる。小刻印は「㊁」などを確認できる。

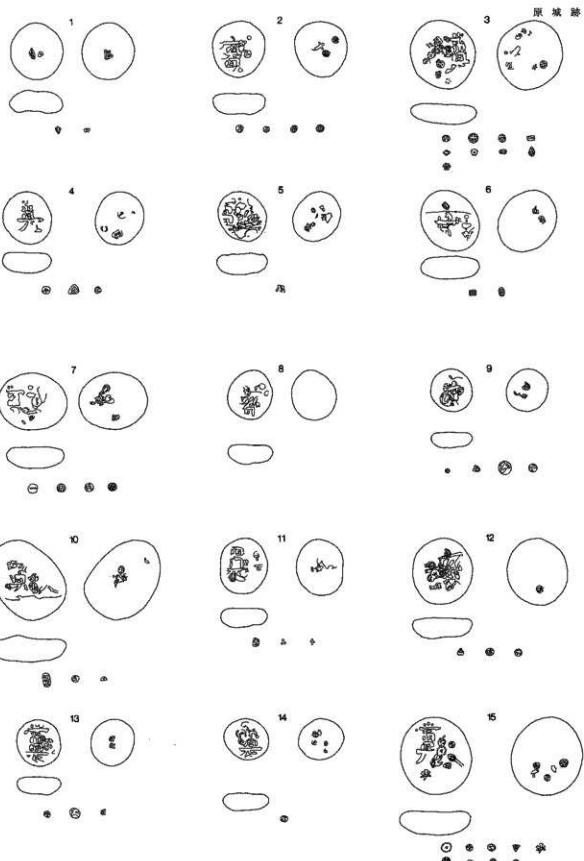
6は、「常」字と「大黒像」の一部を確認できる。表裏に小刻印「㊀」「㊁」「㊂」などを確認できる。

7は、「常是」字と「大黒像」の一部を確認できる。表裏に小刻印「㊀」「㊁」「㊂」「㊃」などを数個確認できる。

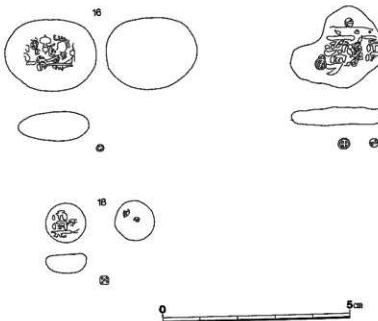
8は、「寶」字を確認できる。

9は、「寶」字を確認できる。表裏に小刻印「㊀」「㊁」「㊂」「㊃」などを数個確認できる。

10は、「寶」字を確認できる。ウカムワリの特徴が確認でき慶長期のものである。小刻印で「㊁」と



第44図 豆板銀① (1/1)



第45図 豆板銀②(1/1)

読めるものがあり、その他にも「㊀」「㊁」など数個の小刻印が存在する。

11は、「常是」字と「大黒像」の一部を確認できる。表裏に小刻印「㊀」「㊁」「㊂」などを数個確認できる。

12は、「實」字を確認できる。表裏に多くの小刻印が存在し、「㊀」「㊁」「㊂」などを確認できる。

13は、「常是」字を確認できる。ウカムワリの特徴が確認でき、慶長期のものである。表裏に小刻印「㊀」「㊁」「㊂」などを数個確認できる。

14は、「常是」字を確認できる。「是」字の五画目が直線的であり、慶長期のものである。表裏に小刻印「㊀」などを数個確認できる。

15は、「常是」字を確認できる。ウカムワリの特徴が確認でき、慶長期のものである。表裏に多くの小刻印が存在し、「㊀」「㊁」「㊂」「㊃」「㊄」「㊅」「㊆」「㊇」「㊈」「㊉」「㊊」など10数個を確認できる。

16は、「常是」字の一部と「大黒像」を確認できる。表裏「㊀」など3個の小刻印を確認できる。

17は、「實」字と「常是」字を確認できる。ウカムワリの特徴が確認でき、慶長期のものである。表裏に「㊀」「㊁」「㊂」「㊃」「㊄」など約10個の小刻印を確認できる。

18は、「常是」字を確認できる。表裏に「㊀」「㊁」など数個の小刻印を確認できる。

以上のように18個中17個に「實」「常是」など明確な刻印が確認でき、正徳・享保期と認定できるものではなく、島原の乱の層位から出土していることと矛盾しない。今後の調査で、さらに多くの豆板銀が出土する可能性が高く、全国的にも注目される遺跡である。

### 錢貨

合計22枚の錢貨が出土している。その内、表土層から出土した13枚を除く9枚については、確実に島原の乱時の層位から出土したものであり、個別の観察所見を以下に述べる。

1は古寛永通寶である。古錢界では水戸錢と称されているものである。これは寛永14年から水戸で鋳造されたといわれているもので、島原の乱の層位から出土したものなので、鋳造直後にこの地にもたらされたということになる。

2は景德元寶である。1004年初鋳の北宋錢である。中国で鋳造された本錢であり、模鎔錢ではない。

3は、元祐通寶である。但し、この元祐通寶は古錢界で「叶手元祐」と呼ばれているものであり、中国で作られたものではない。篆書体のこの錢貨は背面に文字を有していないが、「元」や「祐」の字体に特徴があり、北宋錢の元祐通寶とは明確に区別できる。原城跡からこの元祐通寶が出土したことから、1631年段階でこの錢貨が島原地方で使用されていたと推定でき、この錢貨の鋳造期や鋳造地を知るうえで貴重な発見となった。

4は洪武通寶である。無骨で長嘴とよばれるタイプである。

5は洪武通寶である。無骨で外輪の幅がやや広く、隆共といわれるタイプである。

6は洪武通寶である。但し、背面に「治」字を有しており、「加治木洪武」と呼ばれているものである。島津氏領内の大隅国加治木町で永禄天正から寛永年間に鋳造されたと言われているもので、中国で鋳造されたものではない。この錢貨は磁石につくものが多く、鉄分が多く含まれているという特徴を有する。

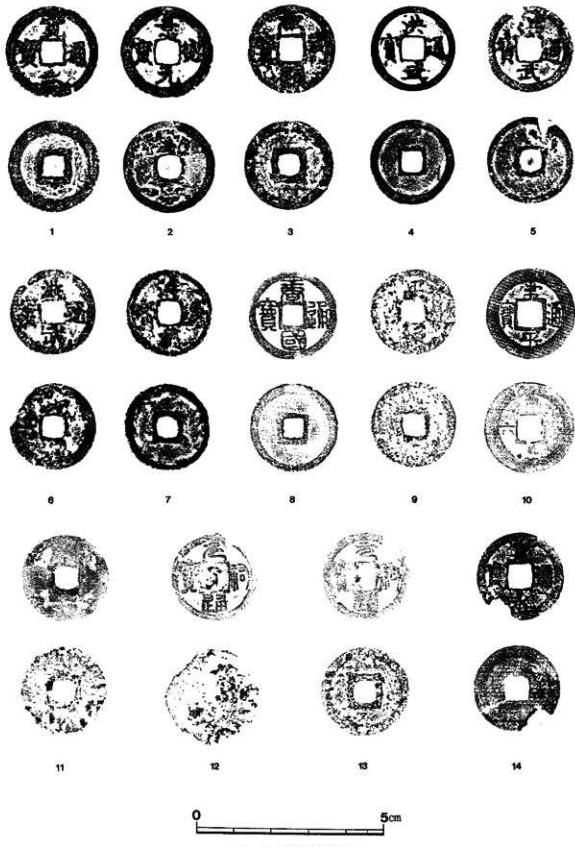
7は洪武通寶である。文字はかなり不鮮明であるが、無骨で5と同様に、隆共とよばれるタイプのものである。

8は唐國通寶である。959年初鋳の南唐錢で、中国で鋳造された本錢である。篆書体のこの錢貨は背面に文字を有していない。

9は洪武通寶である。但し、6と同様背面に「治」字を有しており、「加治木洪武」である。

以上、わずか9枚の銅錢であるが、1638年に落城した原城跡という遺跡の性格上、これらの銅錢が恣意的に選ばれて土中に埋没したとは考えづらく、錢貨流通史上重要な問題を解く鍵を含んでいる。

一つは、4枚が洪武通寶という銅名を有していることである。徳川幕府が寛永鋳造始めた寛永13年(1636)の直後の段階で、原城では洪武通寶という銅名を有する銅貨がかなり使用されていたと考えることができる。なおかつ、「加治木洪武」が2枚も存在するということは、鹿児島で鋳造されていたとされるこの銅貨が、九州地方ではかなり広汎にかつ大量に流通していたのではないかということを推測さるのである。今一つは、「叶手元祐」の存在である。「叶手元祐」は表土層から出土した銅貨の中にも3枚含まれており、合計4枚も出土しており貴重な発見である。元祐通寶を模して、まったく新規の母銭から鋳造されたこの銅貨が、長崎県や佐賀県で少しづつ出土するようになり、この銅貨の鋳造地や鋳造期がかなり絞られてきたといえる。つまり、鋳造地は北部九州、鋳造期は17世紀初期と推測できる。加治木銭の存在や、壇市環濠都市遺跡の16世紀初期の遺構から、模鎔銭の轉型が大量に



第46図 錢貨（1/1）

発見されたことからも推測できるように、16世紀～17世紀初期という時代は、かなり銭貨の模鋳行為が九州でも行われており、それらの銭貨が流通していたのではないかということを、本遺跡の出土銭貨からも推測できるのである。

表土層から出土した銭貨13枚の中内訳は、元祐通寶3枚、洪武通寶1枚、新寛永通寶1枚、寛永通寶鉄錢2枚、常平通寶（1678年初鋲）1枚、判読不能銭5枚である。これらの銭貨は新寛永通寶・寛永通寶鉄錢・常平通寶が含まれていることからも判るように、島原の乱以降の銭貨が含まれているので、本稿の考察からは除外した。

## 註

- 長崎市埋蔵文化財調査協議会「栄町遺跡」1993 「直径2.1cm、短径1.7cmの銀色を呈した梢円状の塊で、刻印は不明瞭なため詳細は不明。」
- 鹿児島県教育委員会「前畠遺跡」1990 「直径1.80cm、短径1.45cm、重さ6.79kgで不変形の梢円状を呈し、其の刻印が読める。」「是」が拓図・写真で明瞭に読み取れ。時代を現す元号がないことと、この文字の5画目横棒の先端が直線的であることから、慶長豆板銀であると思われる。
- 久留米市史編さん委員会「久留米市史」第12巻1994 「元文期の豆板銀で2匁を量る。」 久留米市教育委員会大石昇氏の御教示によると、このG、AB-SK94から出土した豆板銀の直径1.60cm、短径1.35cm、重量7.7gである。

## (7) 金属製品

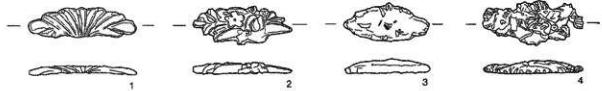
## a 青銅製品

青銅製品は、59点出土しており、全て丸鉢出土である。そのうち49点を図化した。

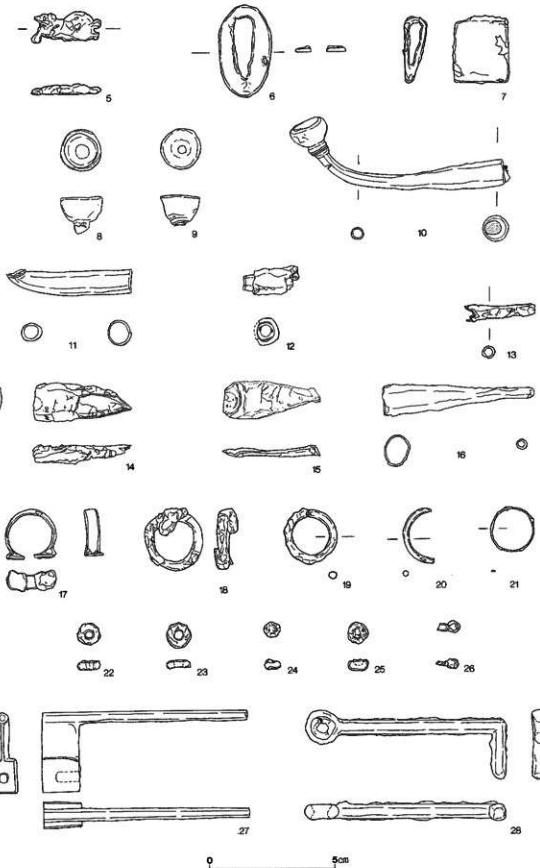
1～5は、刀の目貫である。1・3・4は17トレンチ出土。2・5は20トレンチ出土。腐食により図柄は不明であるが、1は、扁状に広がる模様である。2は、花形の象眼細工がある。6は、刀の切羽である。16トレンチ出土。7は、刀の合口である。17トレンチ出土。8～16は、青銅製の煙管である。8～11は、雁首部である。8は18トレンチ、9は16トレンチ、10は20トレンチ、11は19トレンチ、12は17トレンチ出土である。12は、内に竹が残存している。17トレンチ出土。13～15は、吸口部である。13は、20トレンチ、14は、22トレンチ、15は、17トレンチから出土している。16～25は、リング状のもので、使用用途は不明である。16は17トレンチ、17・18・20・21・22・24は20トレンチ、19は15トレンチ、23・25は18トレンチ出土である。26は、鏡の一部分と思われる。16トレンチ出土。27～29は、留め金具であろう。27は20トレンチ、28・29は17トレンチ出土。30・31は、筒状の金具である。30は16トレンチ、31は20トレンチ出土。32は、鏡の一部である。33は、戸の留め金ね部分である。34は、握手である。35は、留め金具である。すべて16トレンチ出土。36は、刃状のものであると思われるが、両脇部分が欠けているため原形が判断できない。片面を斜めに削り刃状にしている。19トレンチ出土。37は、菱形分銅、である。表面に「三刃」の銘があり、裏面は無銘である。16トレンチ出土。38は、銅碗の口縁部片と思われる。口縁部は外反し、器腹は緩やかな弓なりをなす。器腹外壁には「+」の文様がある。15トレンチ出土。39～45は、釘である。39～41は、頭部が心形である。39は20トレンチ、40は17トレンチ、41は16トレンチ出土。42・43は、頭部が方形である。42は15トレンチ、43は20トレンチ出土。44・45は、頭部が厚くほぼ円形である。44は17トレンチ、45は20トレンチ出土。46～48は、円筒状の金具である。48は、両脇に円盤状の輪が付いている。46・48は17トレンチ、47は15トレンチ出土。49は、円筒状の金具である。16トレンチ出土。

## 註

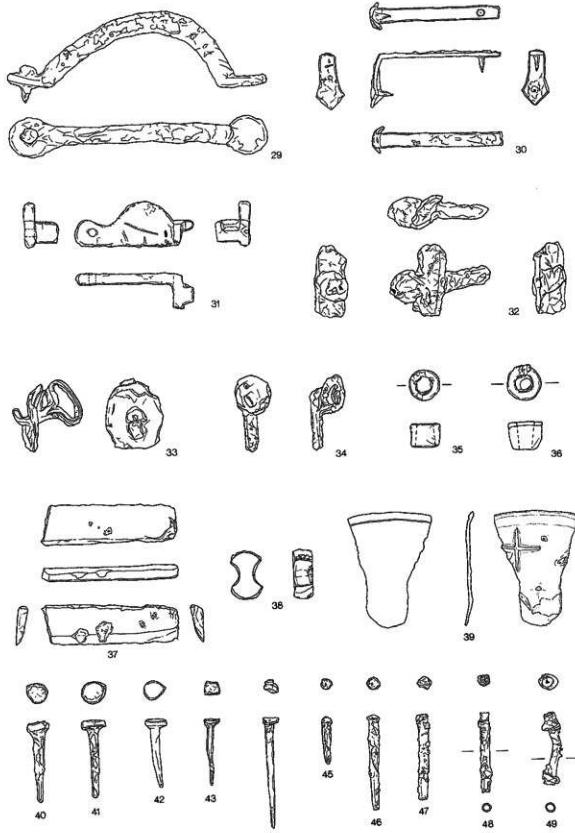
1. 小畠弘己 「菱形分銅覧書」 博多研究会 法哈唯 第1号 1992



第47図 青銅製品① (2/3)



第48図 青銅製品② (2/3)

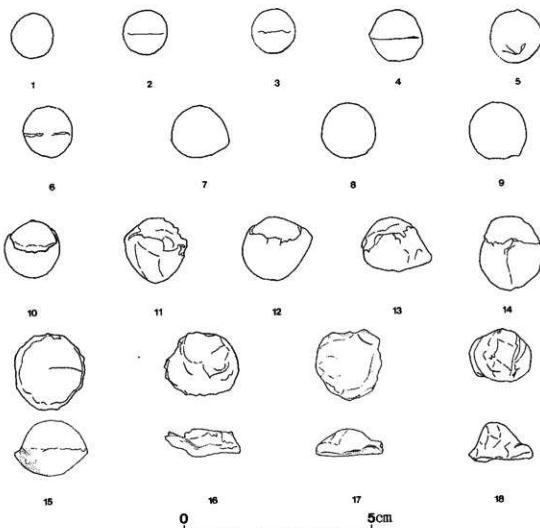


第49図 青銅製品③ (2/3)

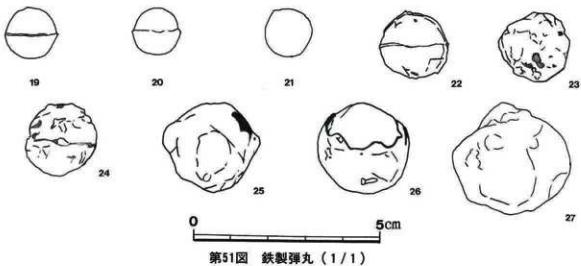
**b 弹丸**

出土した弾丸は、鉛製と鉄製の2種類に分けられ総数482点が出土している。鉛製325点、鉄製157点で、それぞれの弾丸は3種類の大きさに分ける。鉄製の弾丸は腐食が激しく、かろうじて弾丸と分かるものを数に入れた。特徴として鉛、鉄ともに玉鋳型で铸造したらしく、玉中央に張り合わせた痕が残る。また、中には鉄の玉の上から鉛を覆いかぶせたものもある。それぞれのサイズと特徴的なものを27点を図化した。

1～9は、鉛製の弾丸である。1～3は、径約1.15cmを測る。4～6は、径約1.35cmを測る。7～9は、径約1.5cmを測る。10～14は、鉄の玉の上から鉛を覆いかぶせたものである。径約1.6cmを測る。15～18は、使用後の鉛玉である。標的物に当たったのだろう片方がつぶれている。19～27は、鉄製の弾丸である。19～21は、径約1.2cmを測る。玉鋳型の合わせ痕が残る。22～24は、径約1.8cmを測る。25～27は、径約2.2cmを測る。



第50図 鉛製弾丸 (1/1)

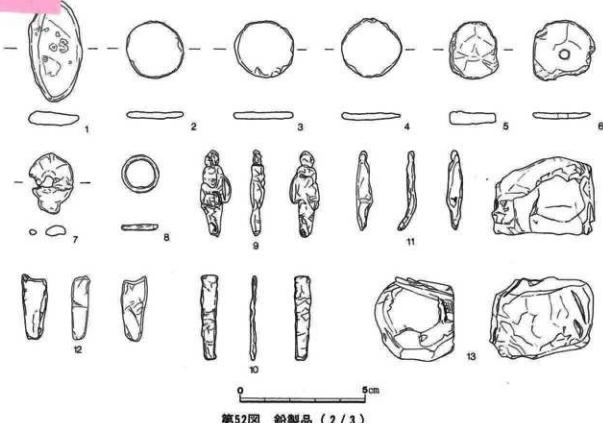


第51図 鉄製丸 (1/1)

## ○ 鉛製品

鉛製の遺物は、十字架や鉛製の弾丸を除いて189点出土している。ほとんどが小さな鉛粒状のもので、その中から特徴的なものについて13点図化した。

1は、偏平で横円形をしたものである。表裏に凹凸は確認できない。19トレンチ出土。2～5は、偏平で円形のものである。表裏に凹凸は確認できない。2・3は19トレンチ、4は16トレンチ、5は15トレンチ出土。6・7は、偏平で円形であるが、中央部に穴が開けられている。6は16トレンチ、7は17トレンチ出土。8は、リング状のものである。19トレンチ出土。9～12は、偏平で板状の資料である。9・10は15トレンチ、11・12は19トレンチ出土。13は、鉛のインゴットである。重さは242g  
トレンチ出土。



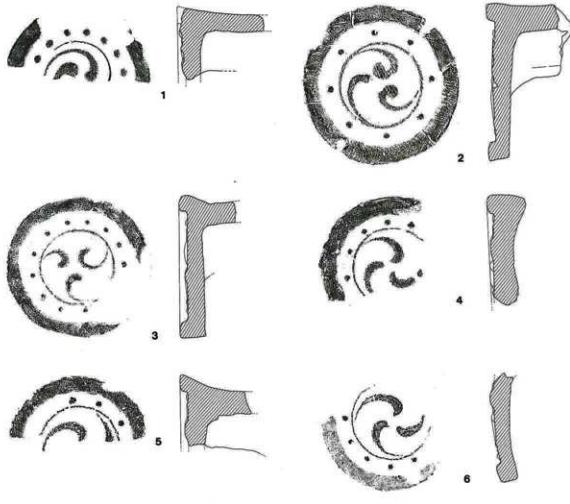
第52図 鉛製品 (2/3)

## (8) 瓦

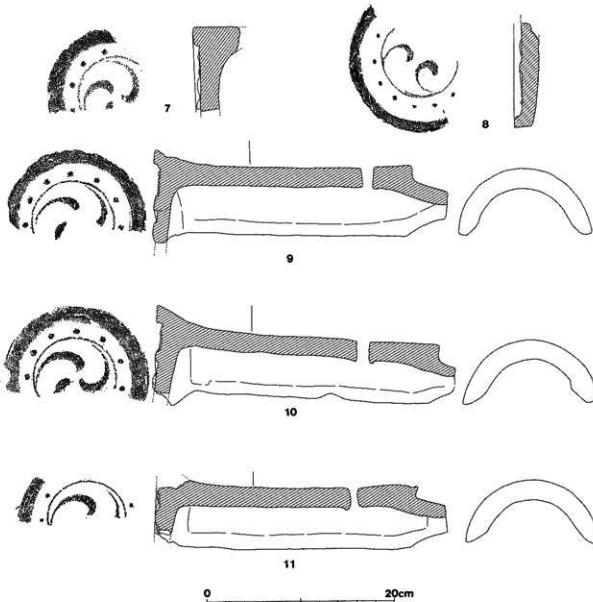
出土した瓦は、空藻・蓮池地区から約2,500点、本丸跡から約3,000点、総数約5,500点を数える。器種は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、飾瓦などである。その中から34点図化した。

## 軒丸瓦

1は、左巻きの三巴文で、圓線を持たないものである。丸瓦部が一部残っており、瓦当部との接合部にはヘラ状のナデ上げ痕を残す。1トレンチ出土。2は、左巻きの三巴文で、圓線を持ち、巴の尾がそれに接するものである。8個の連珠文を有する。瓦当部との接合部にはヘラ状のナデ上げ痕を残す。10トレンチ出土。3～8は、左巻きの三巴文で、圓線を持ち、巴の尾がそれに接するものである。4・7は、巴文と連珠文がはっきりとしており、連珠も均一な円形を有する。他は、瓦当面の作りが粗雑であり、巴文、連珠文の大きさがまばらである。9～11は、瓦当面を半分を欠損しているが、丸瓦部は完全に残っている。瓦当の文様は左巻きの三巴文で、圓線を持ち、巴の尾がそれに接するものである。瓦止穴が1カ所凸面から穴が開けられている。ともにコビキBである。3は1トレンチ、4・5・7・10は22トレンチ、6・8は16トレンチ、9は15トレンチ、11は14トレンチ出土である。



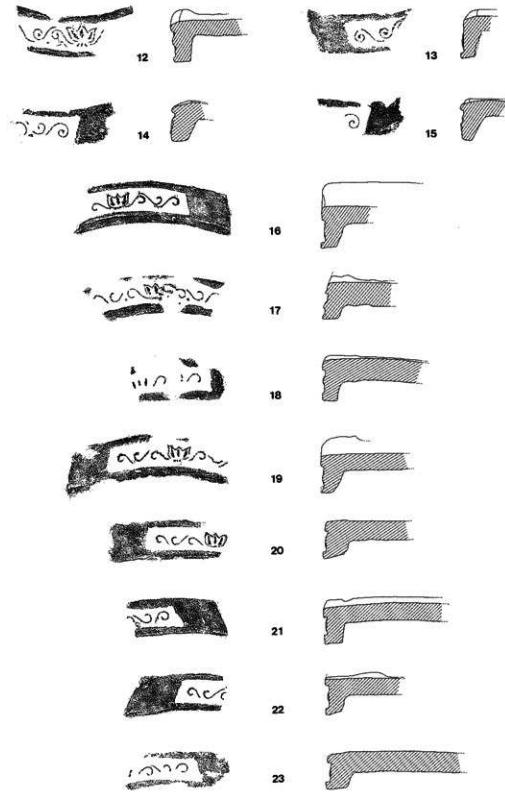
第53図 軒丸瓦実測図① (1/4)



第54図 軒丸瓦実測図② (1/4)

## 軒平瓦

12は、中心飾りに三葉文をおき、左右にそれぞれ3回反転する均等唐草文を配する。唐草の巻きが渦巻き状になる。また、1巻き目と2巻き目の間に円形の突起文様がつく。1トレンチ出土。13~15は、12と同様な唐草の巻きが見られる。共に14トレンチ出土。16~17は、中心飾りに三葉文をおき、左右にそれぞれ3回反転する均等唐草文があるが、唐草の巻き込みが弱い。17は、1巻き目と2巻き目の間に円形の突起文様がつく。16は14トレンチ、17は22トレンチ出土。18~20は、中心飾りの三葉文がやや簡素化されたものである。唐草文は、左右にそれぞれ3回反転する均等唐草文を配する。巻き込みが弱い。18は24トレンチ、19・20は22トレンチ出土。21・22は、巻き込みが弱い唐草文である。22トレンチ出土。23は、中心飾りの三葉文様の回りに描いた線が無くなるものである。唐草文は、左右にそれぞれ3回反転する均等唐草文を配する。16トレンチ出土。



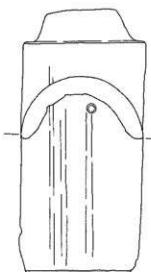
第55図 軒平瓦実測図 (1/4)

## 丸瓦

24・25は、瓦凹面に斜位の方向のコビキAが認められる。凸面は、ヘラ状工具による縦方向の調製調整を施し、さらにナデ調整で仕上げている。また、玉縁直下に燃り紐痕が見られる。24は14トレンチ、25は22トレンチ出土。26は、凸面から瓦止穴が開けられている。22トレンチ出土。27～28は、瓦凹面に横方向のコビキBが認められる。27・28は、凸面をヘラ状工具による縦方向の調製調整を施し、さらにナデ調整で仕上げ、凹面玉縁直下に燃り紐痕が見られる。27は22トレンチ出土。28は16トレンチ出土。



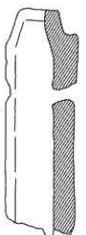
24



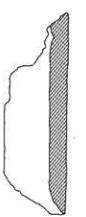
25

0 20cm

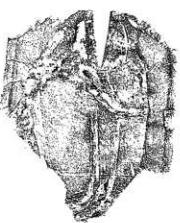
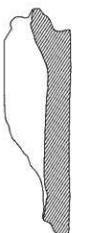
第56図 丸瓦実測図① (1/4)



26



27



28

0 20cm

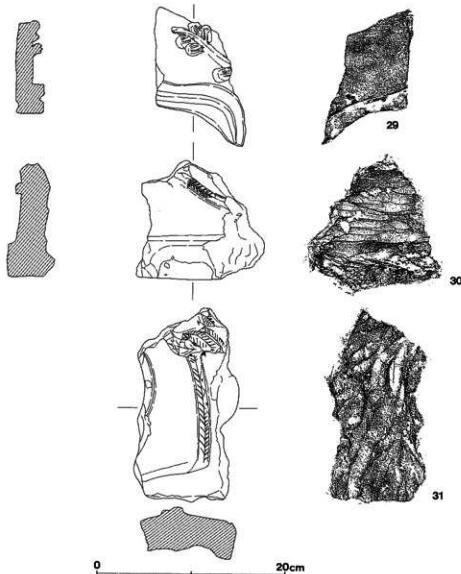
第57図 丸瓦実測図② (1/4)

## 飾瓦

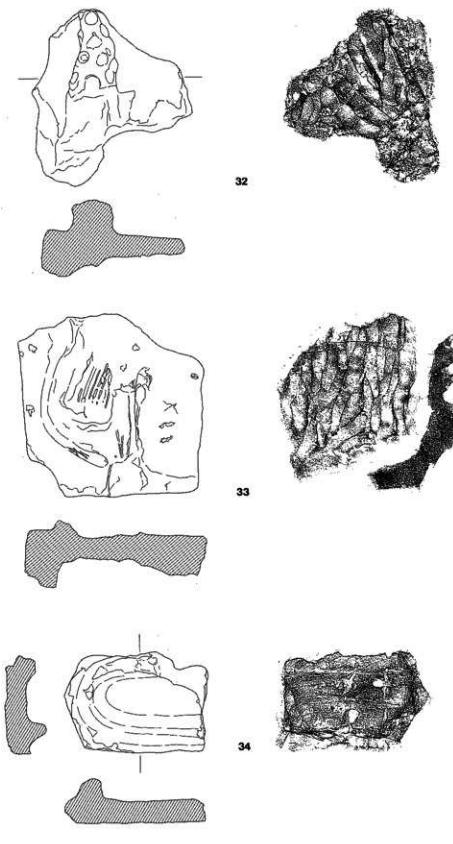
29は、桐木様を描き飾りは粘付けしている。1トレンチ出土。30は、破片資料であるため、全体の図柄は不明だが、縄目文の一部が粘付けしている。裏面は大まかなへラ削り痕が残る。16トレンチ出土。31は、縄を結んだ図柄である。裏面は大まかなへラ削り痕が残る。22トレンチ出土。32は、先細りの本体に粒状突起物が散らばり付く。裏面は大まかなへラ削り痕が残る。9トレンチ出土。33は、表面の文様が削れ落ちている。裏面は大まかなへラ削り痕が残る。22トレンチ出土。34は、梢円状に縁取りしたものである。飾りは粘付けしている。9トレンチ出土。

## 参考文献

- 織豊期城郭研究会 「織豊期城郭の瓦2」 織豊期城郭資料集成Ⅰ 1995
- 嚴原町教育委員会 「枝原城調査報告書」 嚩原町文化財調査報告書 第4集 1995
- 鎮西町教育委員会 「鹿川家康跡」 鎮西町文化財調査報告書 第3集



第58図 飾瓦実測図① (1/4)



第5表 遺物觀察表①

中國磁器

番号	種別	口径・底径・器高	生産地	制作年代	出土地点	備考
1	青磁皿	—・—・—	中國	12C～13Cカ	1トレンチ	
2	青磁碗	—・—・—	中國	14C後～15C前	23トレンチ	
3	青磁碗	—・—・—	中國	14C後～15C前	9トレンチ	
4	青磁碗	—・—・—	中國	15C中～16C前	16トレンチ	
5	青磁碗	—・—・—	中國	15C後～16C中	9トレンチ	
6	青磁碗	—・—・—	中國	15C～16Cカ	21トレンチ	
7	青磁碗	—・—・—	中國	16C中～16C末	17トレンチ	
8	青磁炉	—・—・—	中國	17C前	7トレンチ	
9	白磁皿	—・—・—	景德鎮系	16C後	21トレンチ	
10	白磁皿	—・—・3.1	景德鎮系	16C後	20トレンチ	
11	白磁皿	—・—・—	景德鎮系	16C後	22トレンチ	
12	白磁皿	—・—・3.9	景德鎮系	16C後	22トレンチ	
13	白磁皿	—・—・—	景德鎮系	16C後	22トレンチ	
14	白磁皿	—・—・—	景德鎮系	16C後	22トレンチ	
15	白磁皿	15.5・3.7	福健広東系	16C後	20トレンチ	見込蛇の目はぎ
16	白磁碗	—・—・—	景德鎮系	16C後	20トレンチ	
17	白磁碗	—・4.8・—	景德鎮系	16C後	22トレンチ	
18	染付皿	10.5・2.7・2.5	景德鎮系	15C末～16C中	17トレンチ	基筒底
19	染付皿	9.7・3.5・2.3	福健広東系	16C後	21トレンチ	基筒底
20	染付皿	—・—・—	福健広東系	16C後	22トレンチ	基筒底
21	染付皿	9.0・—・—	景德鎮系	15C末～16C中	1トレンチ	基筒底
22	染付皿	9.9・5.5・2.3	景德鎮系	16C後	22トレンチ	
23	染付皿	—・—・2.3	景德鎮系	16C末～17C初	16トレンチ	
24	染付皿	—・—・—	景德鎮系	16C後	22トレンチ	
25	染付皿	—・6.0・2.2	景德鎮系	16C後	15トレンチ	
26	染付皿	—・—・—	景德鎮系	16C末～17C初	22トレンチ	
27	染付皿	—・—・3.4	景德鎮系	16C末～17C初	19トレンチ	
28	染付皿	—・—・3.3	景德鎮系	16C末～17C初	15トレンチ	
29	染付皿	1.4・8.3・3.3	景德鎮系	16C末～17C初	15トレンチ	
30	染付皿	—・—・—	景德鎮系	16C末～17C初	15トレンチ	
31	染付皿	—・—・3.3	景德鎮系	16C末～17C初	16トレンチ	
32	染付皿	—・—・2.5	景德鎮系	16C末～17C初	15トレンチ	
33	染付皿	—・—・3.7	景德鎮系	16C中～17C前	24トレンチ	
34	染付皿	—・—・3.5	景德鎮系	16C前～16C中	22トレンチ	
35	染付皿	—・—・—	景德鎮系	16C中～17C前	22トレンチ	
36	染付皿	—・—・3.3	景德鎮系	16C前～16C中	16トレンチ	
37	染付皿	—・—・3.5	景德鎮系	16C前～16C中	22トレンチ	
38	染付皿	—・—・—	景德鎮系	16C前～16C中	17トレンチ	被熱痕
39	染付皿	—・—・—	景德鎮系	16C末～17C初	22トレンチ	
40	染付皿	—・7.5・—	景德鎮系	16C末～17C初	22トレンチ	
41	染付皿	—・—・2.6	景德鎮系	16C末～17C初	22トレンチ	
42	染付皿	13.8・7.6・2.8	景德鎮系	1590～1630	22トレンチ	

第6表 遺物觀察表②

番号	種別	口径・底径・器高	生産地	制作年代	出土地点	備考
43	染付皿	—・—・3.5	景德鎮系	16C末～1630	15トレンチ	
44	染付皿	—・—・—	景德鎮系	16C末～1630	20トレンチ	
45	染付皿	—・—・—	景德鎮系	16C前～16C中	15トレンチ	
46	染付皿	—・—・—	景德鎮系	16C前～16C中	15トレンチ	
47	染付皿	—・6.0・—	景德鎮系	1600～1630	25トレンチ	
48	染付皿	—・—・—	景德鎮系	1600～1630	17トレンチ	
49	染付皿	—・7.3・—	福健広東系	1590～1630	15トレンチ	
50	染付皿	12.5・5.5・4.0	景德鎮系	1600～1630	21トレンチ	
51	染付皿	—・6.0・—	景德鎮系	1590～1630	25トレンチ	
52	染付皿	15.3・9.0・3.0	福健広東系	1590～1630	25トレンチ	
53	染付角皿	—・—・2.2	福健広東系	16C末～1630	25トレンチ	
54	染付角皿	—・—・2.5	福健広東系	16C末～1630	15トレンチ	
55	染付皿	—・—・—	景德鎮系	16C末～1630	15トレンチ	
56	染付皿	—・—・—	福健広東系	1590～1630	16トレンチ	
57	染付皿	—・—・—	福健広東系	1590～1630	16トレンチ	
58	染付皿	—・12.0・—	景德鎮系	1590～1610	16トレンチ	芙蓉手
59	染付皿	—・—・4.3	景德鎮系	15C末～16C中	25トレンチ	
60	染付皿	—・—・2.3	福健広東系	1590～1610	15トレンチ	
61	染付大皿	—・—・—	福健広東系	16C末～1630	16トレンチ	
62	染付大皿	—・—・—	福健広東系	16C末～1630	15トレンチ	
63	染付皿	—・—・—	福健広東系	1590～1630	22トレンチ	
64	色絵皿	—・—・4.0	福健広東系	1580～1630	17トレンチ	具須赤絵
65	色絵皿	—・—・3.8	福健広東系	1580～1630	17トレンチ	吳須赤絵
66	染付小盃	—・2.2・—	景德鎮系	16C末～1630	25トレンチ	
67	染付小盃	—・—・—	景德鎮系	16C末～1630	21トレンチ	
68	染付小盃	—・2.5・—	景德鎮系	16C末～1630	15トレンチ	
69	染付小盃	8.0・3.5・3.8	福健広東系	16C末～1630	15トレンチ	
70	染付碗	—・—・—	福健広東系	16C末～1630	16トレンチ	
71	染付碗	—・—・5.5	福健広東系	16C末～1630	17トレンチ	
72	染付碗	—・—・—	景德鎮系	16C前～16C中	21トレンチ	
73	染付碗	—・—・—	景德鎮系	16C末～1630	17トレンチ	
74	染付碗	—・—・—	景德鎮系	16C末～1630	22トレンチ	
75	染付碗	—・—・—	景德鎮系	16C末～1630	22トレンチ	
76	染付碗	—・—・—	景德鎮系	16C中～17C前	16トレンチ	
77	染付碗	—・—・—	景德鎮系	16C中～17C前	19トレンチ	
78	染付碗	—・—・—	景德鎮系	16C末～1630	16トレンチ	
79	染付碗	—・—・—	景德鎮系	16C末～1630	17トレンチ	
80	染付碗	—・—・—	福健広東系	16C末～1630	16トレンチ	
81	染付碗	—・—・—	福健広東系	16C末～1630	16トレンチ	
82	染付碗	—・—・—	福健広東系	16C末～1630	17トレンチ	
83	染付碗	—・4.3・—	福健広東系	16C末～1630	17トレンチ	
84	染付碗	11・4.7・5.2	福健広東系	16C末～1630	15トレンチ	

第7表 遺物観察表③

番号	種別	口径・底径・器高	生産地	制作年代	出土地点	備考
85	染付碗	—・—・—	景徳鎮系	16C末～17C初	22トレンチ	
86	染付碗	—・5.0・—	福健広東系	16C末～17C初	22トレンチ	
87	染付碗	—・4.5・—	福健広東系	16C末～17C初	22トレンチ	
88	染付碗	—・—・—	景德鎮系	16C末～17C初	16トレンチ	
89	染付碗	—・—・—	福健広東系	16C末～1630	20トレンチ	
90	染付碗	—・—・—	福健広東系	16C末～1630	17トレンチ	
91	染付碗	—・5.5・6.0	福健広東系	16C末～1630	17トレンチ	
92	染付碗	—・—・—	福健広東系	16C末～1630	17トレンチ	
93	染付碗	14・6.0・6.8	福健広東系	16C末～17C初	16トレンチ	
94	染付碗	—・—・4.5	福健広東系	16C末～17C初	15トレンチ	
95	染付碗	—・—・4.5	福健広東系	16C末～17C初	18トレンチ	
96	染付瓶	—・—・—	景德鎮系	16C末～1630	17トレンチ	
97	染付瓶	—・—・—	景德鎮系	16C末～1630	19トレンチ	
98	染付瓶	5.9・—・—	景德鎮系	16C末～1630	25トレンチ	
99	染付瓶	—・—・—	景德鎮系	16C末～1630	14トレンチ	
100	陶器碗	—・—・—	中國	16C～17C前	17トレンチ 黄釉	

日本磁器

番号	種別	口径・底径・器高	生産地	制作年代	出土地点	備考
1	染付皿	—・5.9・—	肥前	1610～1630	14トレンチ	
2	染付皿	—・—・—	肥前	1610～1630	14トレンチ	
3	染付皿	—・—・—	肥前	1610～1630	11トレンチ	
4	染付皿	—・6.5・—	肥前	1610～1630	17トレンチ	
5	染付碗	—・—・7.1	肥前	1610～1630	17トレンチ 簡型	
6	染付碗	—・—・—	肥前	1610～1630	16トレンチ 簡型	
7	染付碗	—・—・7.1	肥前	1610～1630	17トレンチ 簡型	
8	染付碗	—・—・—	肥前	1610～1630	18トレンチ 簡型	
9	染付碗	8.4・5.5・8.8	肥前	1610～1630	18トレンチ 簡型	
10	染付碗	—・—・—	肥前	1610～1630	24トレンチ 簡型	
11	染付碗	—・—・—	肥前	1610～1630	17トレンチ 簡型	
12	染付碗	—・—・—	肥前	1610～1630	1トレンチ 簡型	
13	染付碗	—・—・—	肥前	1610～1630	17トレンチ	
14	染付碗	—・—・—	肥前	1610～1630	15トレンチ	
15	染付碗	—・—・—	肥前	1610～1630	25トレンチ	
16	染付碗	—・—・—	肥前	1610～1630	22トレンチ	
17	染付碗	11.9・5.5・7.1	肥前	1610～1630	23トレンチ	
18	染付碗	—・—・—	肥前	1610～1630	21トレンチ	
19	染付瓶	—・—・—	肥前	1610～1630	19トレンチ	
20	染付瓶	—・—・—	肥前	1610～1630	20トレンチ	
21	染付瓶	—・3.9・—	肥前	1610～1630	21トレンチ	
22	青磁香炉	6.3・5.0・7.3	肥前	1610～1630	22トレンチ	

第8表 遺物観察表④

番号	種別	口径・底径・器高	生産地	制作年代	出土地点	備考
1	溝縁皿	13.5・5.0・4.0	肥前	1590～1610	18トレンチ	上胎土目
2	溝縁皿	—・5.0・3.5	肥前	1590～1610	18トレンチ	下胎土目
3	皿	—・5.2・—	肥前	1590～1610	21トレンチ	上胎土目
4	皿	—・4.8・—	肥前	1590～1610	22トレンチ	上胎土目
5	溝縁皿	14・4.9・4.2	肥前	1610～1630	18トレンチ	上砂目
6	溝縁皿	13.7・4.5・4.0	肥前	1610～1630	17トレンチ	上砂目
7	溝縁皿	12.7・4.2・4.0	肥前	1610～1630	18トレンチ	上下砂目
8	皿	—・—・—	肥前	1610～1630	22トレンチ	上下砂目
9	皿	—・4.5・—	肥前	1610～1630	15トレンチ	上下砂目
10	溝縁皿	—・4.0・3.9	肥前	1610～1630	22トレンチ	上下砂目
11	皿	—・4.2・—	肥前	1610～1630	21トレンチ	上下砂目
12	皿	—・4.1・—	肥前	1610～1630	18トレンチ	上下砂目
13	皿	—・4.9・—	肥前	1610～1630	22トレンチ	上下砂目
14	皿	—・4.0・—	肥前	1610～1630	17トレンチ	上下砂目
15	外反口縁皿	—・—・4.2	肥前	1610～1630	22トレンチ	上下砂目
16	碗	—・5.1・—	肥前	1610～1630	21トレンチ	上下砂目
17	碗	11.8・4.9・8.2	前	1610～1630	18トレンチ	下砂目
18	碗	—・4.2・—	肥前	1610～1630	18トレンチ	下砂目
19	碗	—・4.6・—	肥前	1610～1630	22トレンチ	
20	碗	—・4.8・—	肥前	1610～1630	25トレンチ	
21	碗	—・—・—	肥前	1610～1630	22トレンチ	
22	碗	10.4・4.4・6.6	肥前	1610～1630	22トレンチ	
23	碗	—・4.3・—	肥前	1610～1630	22トレンチ	
24	碗	—・3.9・—	肥前	1610～1630	22トレンチ	
25	碗	—・4.6・—	肥前	1610～1630	22トレンチ	
26	碗	—・4.4・—	肥前	1610～1630	14トレンチ	下砂目
27	碗	—・4.5・—	肥前	1610～1630	24トレンチ	下砂目
28	碗	—・4.6・—	肥前	1610～1630	22トレンチ	下砂目
29	碗	—・4.5・—	肥前	1590～1610	9トレンチ	鉄絵
30	碗	—・4.4・—	肥前	1590～1610	8トレンチ	鉄絵
31	碗	10.8・4.4・6.0	肥前	1590～1610	18トレンチ	
32	碗	—・4.2・—	肥前	17C前	22トレンチ	
33	碗	—・6.4・—	肥前	1610～1630	15トレンチ	
34	火入れ	18.5・7.8・6.5	肥前	17C	16トレンチ	
35	皿	—・9.0・—	肥前	1610～1630	15トレンチ	砂胎土目
36	皿	—・—・—	肥前	17C～18C	22トレンチ	
37	鉢	—・—・—	肥前	17C	8トレンチ	
38	片口鉢	—・—・—	肥前	17C前	21トレンチ	
39	片口鉢	—・—・—	肥前	17C前	17トレンチ	
40	片口鉢	—・—・—	肥前	17C前	25トレンチ	
41	鉢	—・—・—	肥前	17C前	22トレンチ	
42	瓶	—・—・—	肥前	17C前	17トレンチ	磁器力

第9表 遺物観察表⑤

番号	種 別	口径・底径・器高	生 産 地	制 作 年 代	出土地点	備 考
43	瓶	— · 6.5 · —	肥 前	17C前	22トレンチ	
44	瓶	— · — · —	肥 前	17C前	15トレンチ	
45	瓶	— · — · —	肥 前	17C前	15トレンチ	
46	瓶	— · — · —	肥 前	17C前	20トレンチ	
47	瓶	— · 7.0 · —	肥 前	17C前	22トレンチ	
48	瓶	— · — · —	肥 前	17C前	22トレンチ	
49	瓶	— · 8.3 · —	肥 前	17C前	22トレンチ	
50	瓶	— · 5.4 · —	肥 前	17C前	22トレンチ	
51	甕	— · — · —	肥 前	17C前	14トレンチ	
52	甕	— · — · —	肥 前	17C前	22トレンチ	
53	甕	— · — · —	肥 前	17C前	9トレンチ	
54	甕	— · — · —	肥 前	17C前	9トレンチ	
55	甕	— · — · —	肥 前	17C前	25トレンチ 貝目	
56	甕	— · 11 · 51.2	肥 前	17C前	16トレンチ	
57	甕	— · 10.8 · —	肥 前	17C前	25トレンチ	
58	甕	— · 13.7 · —	肥 前	17C前	22トレンチ	
59	甕	— · — · —	肥 前	17C前	20トレンチ 貝目	
60	甕	— · 17.4 · —	肥 前	17C前	18トレンチ	
61	甕	— · — · —	肥 前	17C前	25トレンチ	
62	瓶	— · — · —	肥 前	17C前	16トレンチ	
63	瓶	— · — · —	肥 前	17C前	22トレンチ	
64	瓶	— · — · —	肥 前	17C前	16トレンチ	
65	瓶	— · — · —	肥 前	1610~1630	15トレンチ 下砂目	
66	瓶	— · — · —	肥 前	1610~1630	22トレンチ	
67	皿	8.7 · 3.9 · 2.1	肥 前	17C前	22トレンチ	
68	皿	— · — · —	肥 前	17C前	14トレンチ	
69	蓋	— · — · —	肥 前	17C前	24トレンチ	
70	燭台	6.2 · 3.8 · 1.8	肥 前	17C前	15トレンチ	
71	油壺	— · — · —	肥 前	17C前	23トレンチ	
72	小鉢	— · — · 3.4	肥 前	17C前	14トレンチ	
73	皿	— · — · —	瀬戸美濃系	16C	24トレンチ	
74	皿	— · — · —	瀬戸美濃系	16C	24トレンチ	
75	擂鉢	— · — · —	肥 前	17C前	9トレンチ	
76	碗	7.3 · 3.8 · 4.5	肥 前	17C中~17C末	23トレンチ	
77	碗	— · — · —	瀬戸美濃系	16C末	22トレンチ 志野	
78	碗	— · — · —	瀬戸美濃系	リ	12トレンチ 志野	
79	注口部	— · — · —	瀬戸美濃系	16C末~17C初	15トレンチ 織部	
80	耳部	— · — · —	肥 前	リ	22トレンチ	
81	鉢	— · — · —	肥 前	17C	1トレンチ	
82	鉢	— · — · —	肥 前	リ	8トレンチ	
83	水指	— · — · —	信 楽	16C~17C前A	15トレンチ	

第10表 遺物観察表⑥

番号	種 別	縦・横・厚(cm)	重 さ(g)	材 質	出土地点	備 考
1	十字架	3.5 · 2.35 · 0.5	7.274	鉛	19トレンチ	
2	十字架	2.9 · 2.3 · 0.4	4.197	鉛	17トレンチ	
3	十字架	2.5 · 2.65 · 1.75	6.646	鉛	17トレンチ	
4	十字架	2.9 · 2.0 · 0.45	6.052	鉛	17トレンチ	
5	十字架	2.4 · 1.9 · 0.5	6.029	鉛	20トレンチ	
6	十字架	2.95 · 1.9 · 0.5	4.607	鉛	19トレンチ	
7	十字架	2.7 · 2.1 · 0.35	4.751	鉛	19トレンチ	
8	十字架	2.15 · 2.3 · 0.3	5.368	鉛	20トレンチ	
9	十字架	3.0 · 1.5 · 0.4	5.198	鉛	20トレンチ	
10	十字架	3.15 · 1.85 · 0.5	3.707	鉛	22トレンチ	
11	十字架	— · — · 0.4	2.445	鉛	18トレンチ	
12	十字架	— · — · 0.6	4.740	鉛	17トレンチ	
13	十字架	— · — · 0.53	2.465	鉛	17トレンチ	
14	十字架	— · — · 0.56	2.386	鉛	15トレンチ	
15	十字架	— · — · 0.4	4.338	鉛	17トレンチ	

メダイ

番号	種 別	縦・横・厚(cm)	重 さ(g)	材 質	出土地点	備 考
1	メダイ	3.0 · 2.05 · 0.2	3.536	青銅	19トレンチ	
2	メダイ	3.15 · 2.05 · 0.2	4.356	青銅	20トレンチ	
3	メダイ	2.6 · 1.75 · 0.1	1.396	青銅	22トレンチ	
4	メダイ	2.3 · 1.6 · 0.15	1.737	青銅	20トレンチ	
5	メダイ	2.1 · 1.5 · 0.2	0.934	青銅	17トレンチ	
6	メダイ	2.25 · 1.65 · 0.15	1.391	青銅	20トレンチ	
7	メダイ	1.9 · 1.3 · 0.2	1.378	青銅	20トレンチ	
8	メダイ	2.1 · 1.4 · 0.1	1.266	青銅	25トレンチ	
9	メダイ	2.1 · 1.1 · 0.1	0.848	青銅	17トレンチ	
10	メダイ	2.1 · 1.5 · 0.2	0.806	青銅	20トレンチ	
11	メダイ	1.7 · 1.85 · 0.2	0.908	青銅	20トレンチ	

ロザリオの珠

番号	種 別	径 · 厚(cm)	重 さ(g)	材 質	出土地点	備 考
1	ロザリオ	1.2 · 0.55	1.334	ガラス	17トレンチ	青色
2	ロザリオ	1.1 · 0.7	1.172	ガラス	18トレンチ	青色
3	ロザリオ	0.7 · 0.65	0.756	ガラス	19トレンチ	緑色
4	ロザリオ	0.8 · 0.65	0.765	ガラス	19トレンチ	白化
5	ロザリオ	0.75 · 0.55	0.580	ガラス	19トレンチ	白化
6	ロザリオ	0.65 · 0.6	1.709	鉛	20トレンチ	白化
7	ロザリオ	0.7 · 0.5	0.404	ガラス	19トレンチ	白化

第12表 遺物觀察表⑦

豆板銀

番号	種別	長径・短径・厚(cm)	重さ(g)	材質	出土地点	備考
1	豆板銀	1.91・1.32・0.50	5.965	銀	16トレンチ	
2	豆板銀	1.49・1.40・0.50	6.552	銀	16トレンチ	
3	豆板銀	1.87・1.76・0.50	9.389	銀	17トレンチ	
4	豆板銀	1.40・1.28・0.50	5.772	銀	16トレンチ	
5	豆板銀	1.39・1.30・0.48	4.672	銀	16トレンチ	
6	豆板銀	1.60・1.50・0.52	8.020	銀	17トレンチ	
7	豆板銀	1.80・1.48・0.52	8.749	銀	16トレンチ	
8	豆板銀	1.30・1.13・0.50	4.324	銀	15トレンチ	
9	豆板銀	1.10・1.10・0.40	3.107	銀	16トレンチ	
10	豆板銀	2.25・1.97・0.57	14.344	銀	17トレンチ	
11	豆板銀	1.47・1.23・0.49	5.077	銀	18トレンチ	
12	豆板銀	1.70・1.59・0.50	8.683	銀	20トレンチ	
13	豆板銀	1.29・1.19・0.48	4.275	銀	20トレンチ	
14	豆板銀	1.12・1.03・0.40	2.994	銀	19トレンチ	
15	豆板銀	2.07・1.90・0.60	14.863	銀	23トレンチ	
16	豆板銀	2.32・1.85・0.63	17.590	銀	23トレンチ	
17	豆板銀	2.55・2.15・0.42	11.980	銀	表採	
18	豆板銀	1.09・1.07・0.49	3.364	銀	表採	

錢寶

番号	種別	径(cm)	重さ(g)	出土地点	備考
1	寛永通寶	2.50	2.847	9トレンチ	1636年初鋤
2	最徳元寶	2.50	2.965	17トレンチ	1004年初鋤
3	元祐通寶	2.37	2.495	22トレンチ	
4	洪武通寶	2.26	2.712	19トレンチ	長嘴
5	洪武通寶	2.30	1.862	17トレンチ	隆共
6	洪武通寶	2.30	2.178	15トレンチ	加治木洪武
7	洪武通寶	2.30	3.046	16トレンチ	隆共
8	唐國通寶	2.39	3.079	19トレンチ	959年初鋤 南唐錢
9	洪武通寶	2.29	2.643	17トレンチ	加治木洪武
10	常平通寶	2.40	4.000	15トレンチ	1678年初鋤
11	元祐通寶	2.35	1.750	25トレンチ	
12	元祐通寶	2.38	—	21トレンチ	
13	元祐通寶	2.35	2.712	21トレンチ	
14	寛永通寶	2.30	2.176	22トレンチ	

第12表 遺物觀察表⑧

彈丸

番号	種別	径(cm)	重さ(g)	材質	出土地点	備考
1	弾丸	1.15	8.496	鉛	17	
2	弾丸	1.15	9.462	鉛	17	
3	弾丸	1.15	9.404	鉛	15	
4	弾丸	1.35	14.334	鉛	20	
5	弾丸	1.35	14.446	鉛	19	
6	弾丸	1.30	12.575	鉛	16	
7	弾丸	1.20	17.684	鉛	19	
8	弾丸	1.45	18.384	鉛	19	
9	弾丸	1.50	18.593	鉛	1	
10	弾丸	1.45	9.721	鉛／鉄	19	
11	弾丸	1.70	18.099	鉛／鉄	15	
12	弾丸	1.60	17.920	鉛／鉄	22	
13	弾丸	1.75	16.457	鉛／鉄	16	
14	弾丸	1.60	16.572	鉛／鉄	19	
15	弾丸	2.00	25.405	鉛	15	
16	弾丸	1.70	8.710	鉛	19	
17	弾丸	1.80	8.535	鉛	17	
18	弾丸	1.50	9.335	鉛	15	
19	弾丸	1.30	5.251	鉄	16	
20	弾丸	1.20	6.468	鉄	15	
21	弾丸	1.20	6.122	鉄	16	
22	弾丸	1.75	17.784	鉄	16	
23	弾丸	1.80	11.353	鉄	17	
24	弾丸	1.70	13.860	鉄	17	
25	弾丸	2.30	40.053	鉄	9	
26	弾丸	2.25	41.973	鉄	8	
27	弾丸	2.40	45.904	鉄	9	

## 6. 総括

原城跡の1次～3次の発掘調査において、築城当時の原城や、島原の乱期に代表されるキリストン関係遺物、亂後における城の破却と各分野での貴重な資料を得ることができ、少しづつその実態が判明しつつある。しかし、ここでは、特にキリストン関係遺物、竪穴造構、階段造構を有する虎口について見ていくことにする。

### (1) キリストン関係遺物

出土したキリストン関係遺物は、十字架15点、メダイ11点、ロザリオの珠19点が出土している。遺物は、16・17・18・19・20・22・25トレンチから出土し、特に17・19・20トレンチに多く集中する。19・20トレンチにおいては、方形土壙の内からの出土であり、共に人骨片や炭が多く含まれる。また、人歯が整然と土中に並んでいる間に御聖体の組のメダイが出土する例(図版10)も見られた。これは、死にぎわにそのメダイを口に当てていたものであろうか乱の様子がうかがえる出土である。

十字架は、原城に籠城中の信者が制作したものと思われ、すべて鉛製の素朴な型をしており、信者たちがおもいおもいに作ったのであろう。型はだいたい5種類に分けられる。制作方法としては、型作りと思われる。当時、ロザリオに付けられた十字架は木製の3個の玉を合わせてできていた。この3個の玉を粘土状のものに型押しして、その型に溶かした鉛を注ぎ作る。出来上がった十字架は、左右と下部分に膨らみを持つ。また、上下紐を通すため簡略になる。出土した十字架のうちこの型のものは4点ある。また、これに類するような上下左右に膨らみを持ち、上下が筒状になるものは2点、上下左右は直線的で断面は方形をなし、下部に穴を開けたものの3点。上下左右は直線的で断面は円形で、上下が筒状になるものは3点。部分的に全体は分からぬが、片方の断面がコ字型をしたものを作り合わせて作るもの1点、薄く引き延ばした鉛を型切りしたと思えるもの1点、その他1点である。

次に材料の問題であるが、原城跡出土の遺物のなかには大量の鉛製の弾丸がある。出島のオランダ人の日記によると「原城に籠城した農民は鉄砲の弾丸を作るため鉛を持っていった」とある。弾丸の製作が可能ならば簡単な十字架もできるはずである。

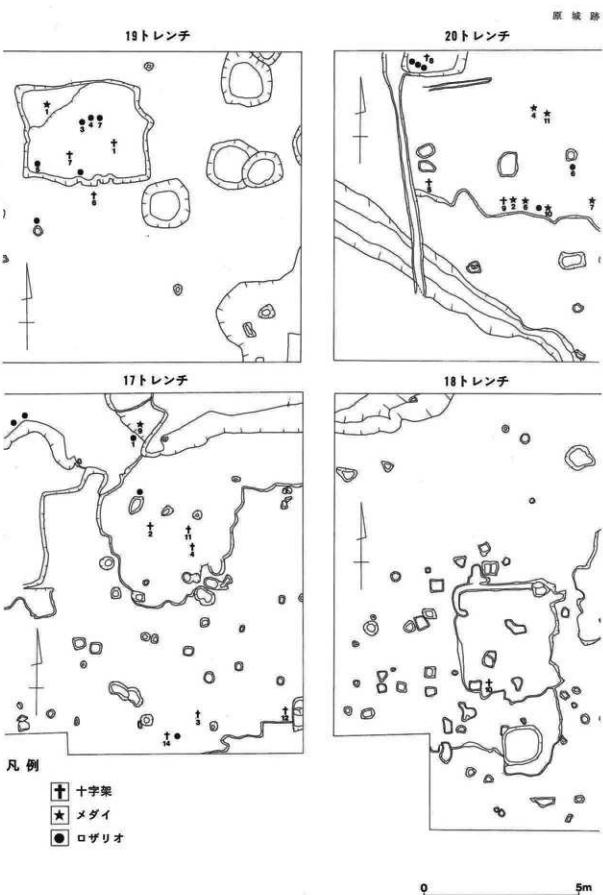
日本26聖人記念館の結城了悟氏は、「キリストン文化研究会報105号」の中で、こう述べられている。「敵の弾丸を利用して十字架を作り、あるいは弾丸を作らずそのためにあった鉛を十字架の制作に使ったか、いずれにしても、その小さな十字架は私に聖書のある言葉を考えさせた。

ジョエル予言者はイスラエルの敵をからかって彼らにむかって叫ぶ。「兵士をことごとく集め上らせよ。おまえたちの鎧を剣、鎧を槍に打ち直せ……」

逆にイザヤ予言者は平和な時代のしとしてこの事実をあげる。「主は、国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鎧として、槍を打ち直して鎧とする」

弾丸の材料を十字架を作るために使った原城のキリストンたちが信仰の証と共に、私たちに1つの大切な教訓を残した。」

このように、原城跡からのキリストン関係遺物の出土は、歴史的意義付けと共に島原の乱の性格を検討するうえで新たな問題提起資料となつたのではないだろうか。



第60図 キリストン関係遺物出土分布図 (1/120)

## (2) 穫穴造構

竪穴造構として取り上げたのは、18トレンチから検出した1例のみで他のトレンチからは確認することが出来なかった。この造構の構築方法は方形をなし回りに柱穴を伴う。しかし、19トレンチにおいて方形の椎込み土壙を検出したが、回りに柱穴を確認することが出来なかつたため、竪穴造構とせず土壤に入れ込んだ。

この竪穴造構の性格については、織豊期城郭研究会の中井 均氏が書かれた『「民衆」と「城館」研究試論』の中で述べられている。近年城館跡から検出されている竪穴造構を、現在（財）秋月郷土館に所蔵されている『島原の乱図屏風』に描かれている図をもとに観察され、分類された。この図は乱後200年を経過した天保8年（1837）の作で、同時代性には欠けるものの、8年の歳月を費やして考証しただけに、篠城戦をリアルに描いている。この屏風には原城本丸、天草丸が描かれており、そこには多くの半地下式の小屋が記載される。この半地下式の小屋が竪穴造構の実体ではないかと考えられた。描かれた小屋は詳細に観察すると、3つのタイプに分類できる。

### I類

竪穴に簡単な木組を施し、低い板壁に切妻の板屋根を葺くもの。

### II類

II類の竪穴は簡単な木組に屋根をのせるだけで、壁をもたない。板屋根の上には土をかぶせている竪穴側壁の形状から2タイプに分類できる。

#### II-a類

素掘りの竪穴

#### II-b類

竪穴の側壁を石垣としたもので、長軸に張り出し部（出入口）を設けている。

### III類

竪穴と呼ぶよりも、むしろ横穴と呼び得るもので、城壁の斜面を洞窟状に彫り込み、前庭部に簡単な木組を施して、屋根を組んだもの。

また、竪穴造構の概念としては、工藤清泰氏の提示された次の4点による。

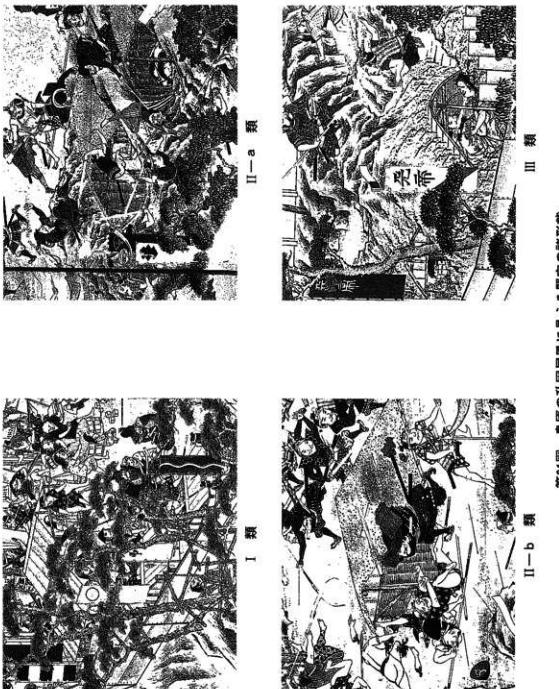
1・構築方法は方形基調である。

2・床面に上部構造を推定せしめる柱穴（あるいはそれに相当するもの）等が存在する。

3・覆土および床面からの出土遺物が中世までのものであり、近世以降のものが存在しない。つまり構築から廃棄までの時間が中世という時間内に包括される。

4・構造上の特徴として、基本的に造構内には炉・かまどを造らず、出入口部分は張り出しをもちいることが多い。

以上概念から今回検出した竪穴造構は絵図に見られるものと同様の造構と思われるが、検出例が一例と少なく、また、調査も本丸郭内的一部分であるため、今後の調査で検出されるであろう竪穴造構との比較研究が今後の課題である。



第61図 島原の乱図屏風に記載された竪穴の種類

### (3) 階段造構

階段造構として位置づけたが、造構全体的にみると虎口跡である。この虎口跡の検出は、築城当時の原城の城郭構造を知る上で貴重な検出であった。築城当時の原城に関する資料はほとんどなく、特に絵図等などは島原の乱後に描かれた絵図だけである。その絵図で虎口は描かれてはいるが、それぞれの絵図で虎口プランの描きかたがまちまちであった。今回の検出により、多少問題は残るが原城のこの虎口プランははっきりとなった。また、門柱礎石の検出もこの虎口になんらかの建物があったことを示唆している。虎口の名称も、検出した虎口と同じプランを持つ絵図にこの虎口のことを「池尻口」と書かれていたため、以後「池尻口」を用いた。

それとこの虎口では、虎口空間を人頭大の石や、側面の石垣の石材などでびっしり埋め込んだ、すなわち「破却」の状況も確認できた。破却の状況は他に、虎口両隅角部にも確認できる。隅角部を取り壊され根石のみが残り、根石から上部はグリ石が露出している。また、虎口を構成する4面の石垣の一部で、慶長期の石積みと違った石積みがみられた。これは、元和の一国一城令による城の破壊政策によって廢城となった原城に、島原の乱で立て篤した一揆軍が防御のために、壊された石垣等を積み直したものである。

今回の調査では、残念ながら本丸天主跡をみつけることができなかった。しかし、調査は本丸跡の一部分でしかなく、天主跡の可能性が全くなくなった訳ではない。今後の調査に期待したい。

調査は緒についたばかりであるが、このように今まで不明であった原城跡が、少しづつ判明していく。今後も調査は続き、地下に埋まっている貴重な遺構・遺物が姿を現すであろう。

以上で、今回の報告を終わるが、貴重な遺跡の情報を十分に把握できないまま、報告をまとめることがとなりました。不備な点が多くみられると思いますが、編者の力不足と怠慢のためとお詫びお許しください。残された問題や課題が累積されているが、今後も調査はつづき、それらの事項も含め論究したいと思います。

最後に、本報告書をまとめるにあたり、当初から調査に従事頂いた作業員の方々や、整理作業にたずさわられた方々の協力をいただいてまとめることができましたことを深く感謝いたします。

末筆ながら、御指導・御教示をいただいた方々の芳名（敬称略）を記して、心から皆様に感謝申し上げます。

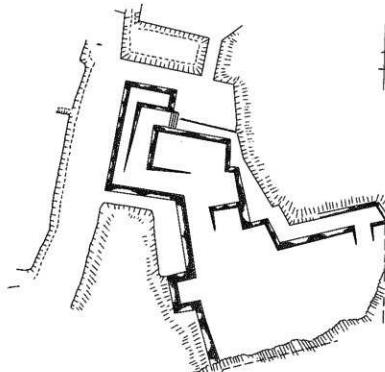
安楽勉・大橋康二・斎藤匠司・櫻木晋一・志岐茂夫・高野晋司・田川翠・田島俊彦・田中哲雄・中村賛・伴耕一朗・藤田和裕・本田秀樹・松尾昭子・宮武正登・宮崎貴夫・結城了悟

#### 参考文献

1. 結城了悟 「キリシタン遺物の謎」「キリシタン文化研究会会報105号」 1995
2. 中井 均 「民衆と城館研究試論」 帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第5集抜刷 1994
3. 伊藤正義 「城を破る」「城と合戦」歴史を読みなおす15 朝日新聞社 1993



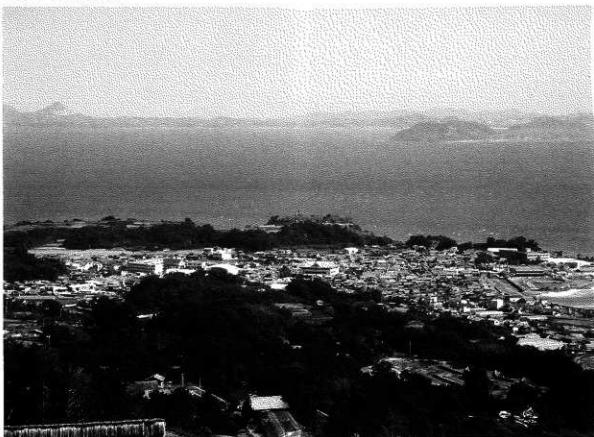
第62図 原城絵図（藤原有馬世譜より）



第63図 原城要図（宮武正登氏作図）

図 版

図版 1 原城跡遠景



西側より



本丸跡（海より）

図版2 調査区風景



空港（平成4年度）



本丸（平成5年度）



蓮池（平成4年度）



本丸（平成5年度）

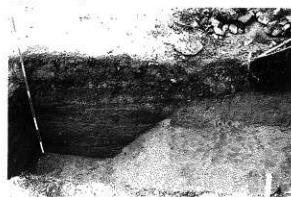


蓮池（平成4年度）



本丸（平成6年度）

図版3 土層



1-Aトレンチ



9トレンチ



7トレンチ



10トレンチ



7トレンチ



11トレンチ

図版4 整地層



15トレンチ  
歎状地形

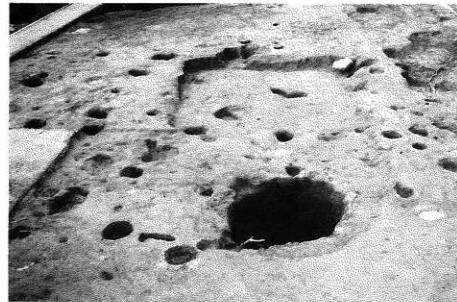


16トレンチ  
整地層状況



トレンチ検出状況

図版5 坪穴造構



17トレンチ  
坪穴造構検出状況



18トレンチ  
坪穴造構



トレンチ検出状況

図版 6 土壙



SK 1



SK 6

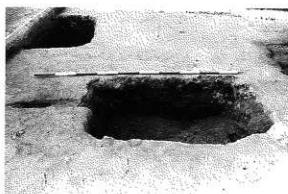
図版 7 土壙／階段造病換出状況



SK 10



上部



SK 2



SK 8



SK 11



中部



SK 3



SK 9



SK 12



前面

図版 8 階段造構



虎口全景



S F 1



S F 2

図版 9 階段造構



S F 3



S F 4



上段より

図版10 調査風景／遺物出土状況



調査風景



メダイ・人歯出土状況



調査風景



十字架出土状況

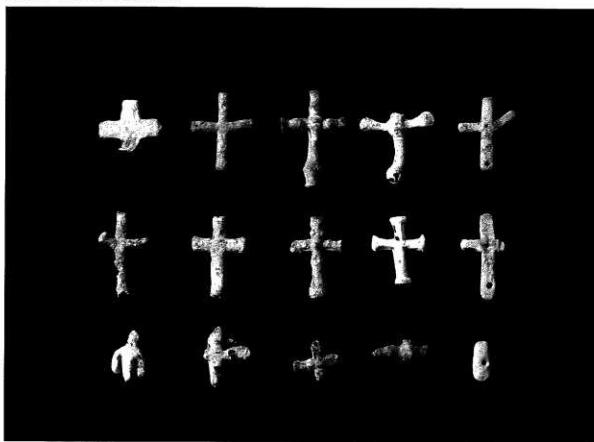


調査風景

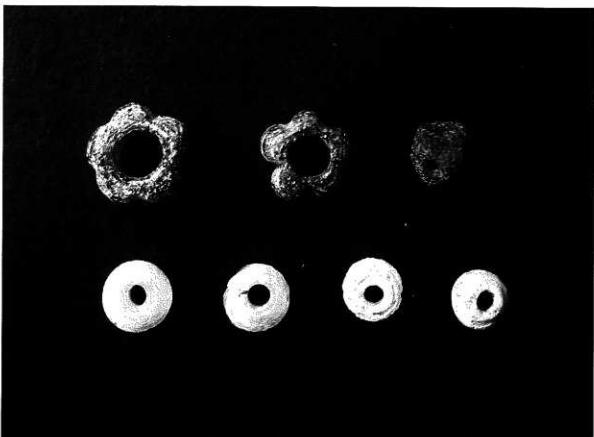


瓦・陶器出土状況

図版11 キリストン関係遺物

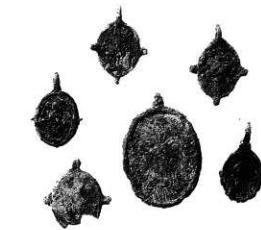


十字架



ロザリオの珠

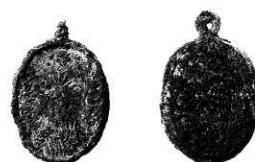
図版12 キリストン関係物



メダイ



メダイ線 (長崎大学病院放射線科撮影)



1・2

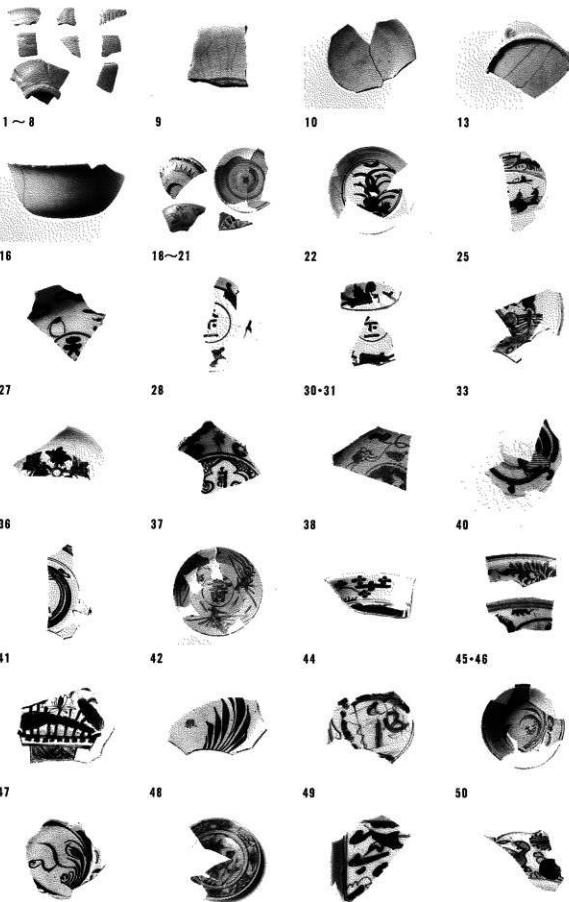
3・4・5



6・7・8

9・10・11

図版13 中国磁器



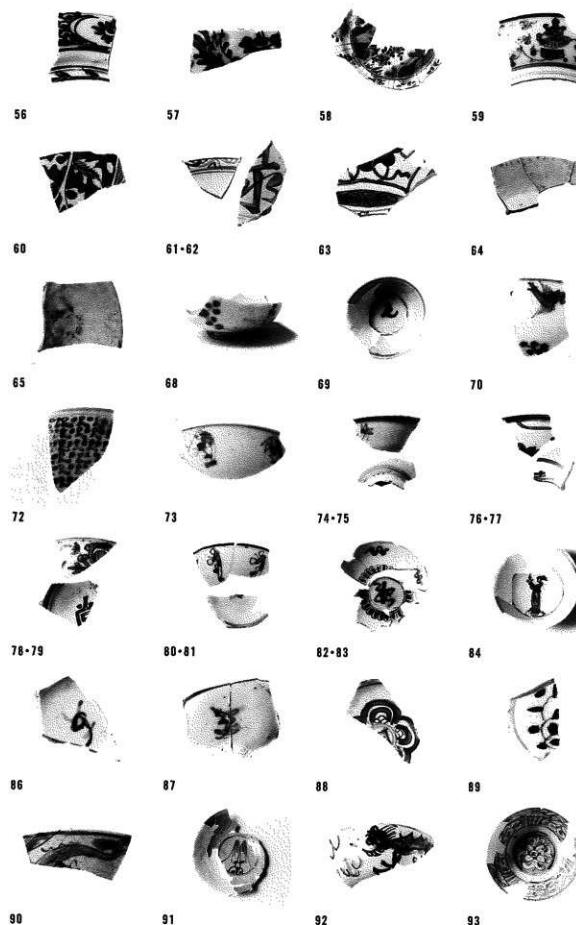
51

52

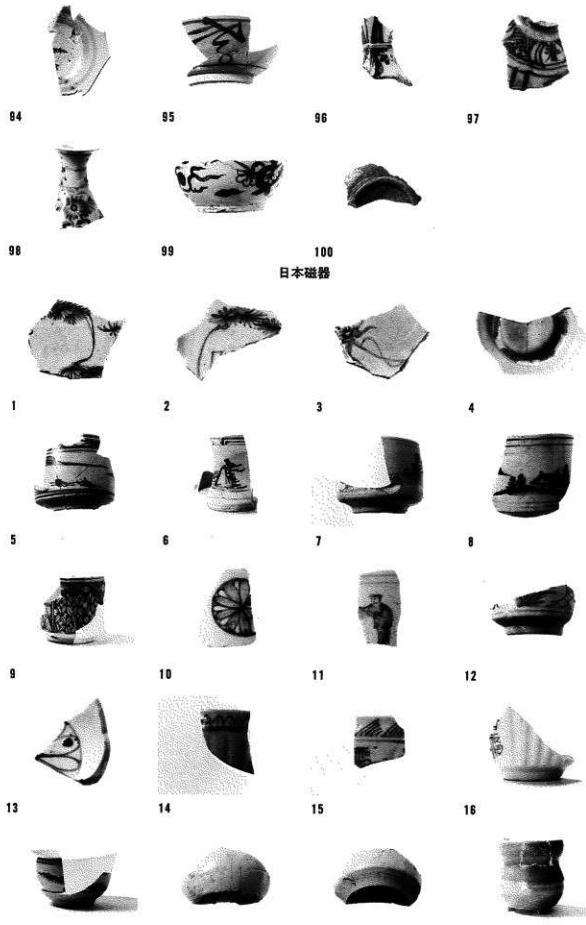
53

55

图版14 中国磁器

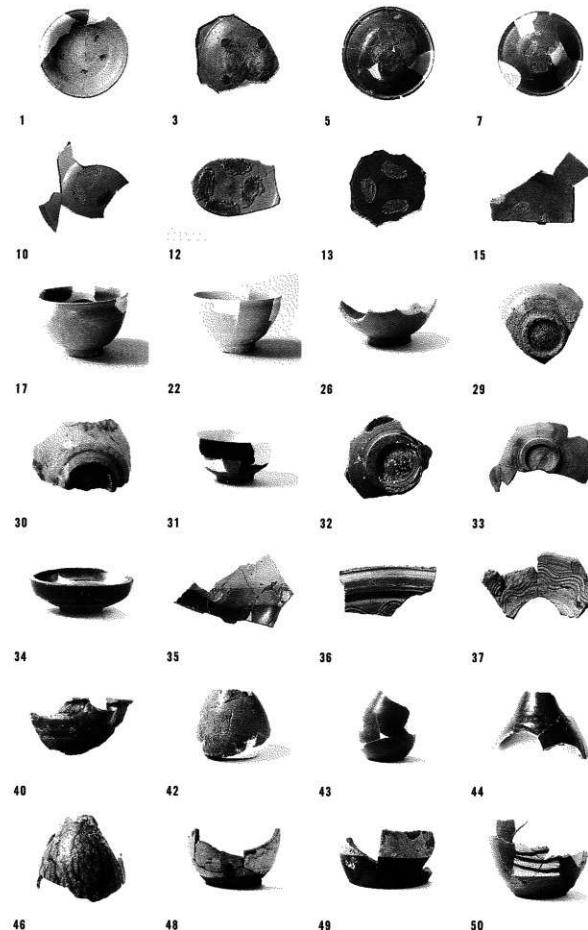


图版15 中国磁器／日本磁器

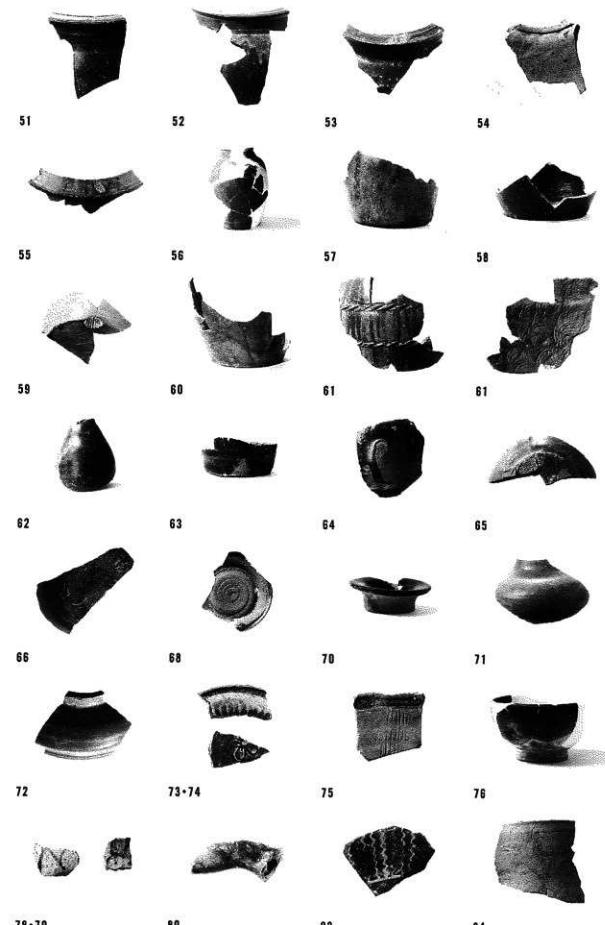


図版16 日本陶器

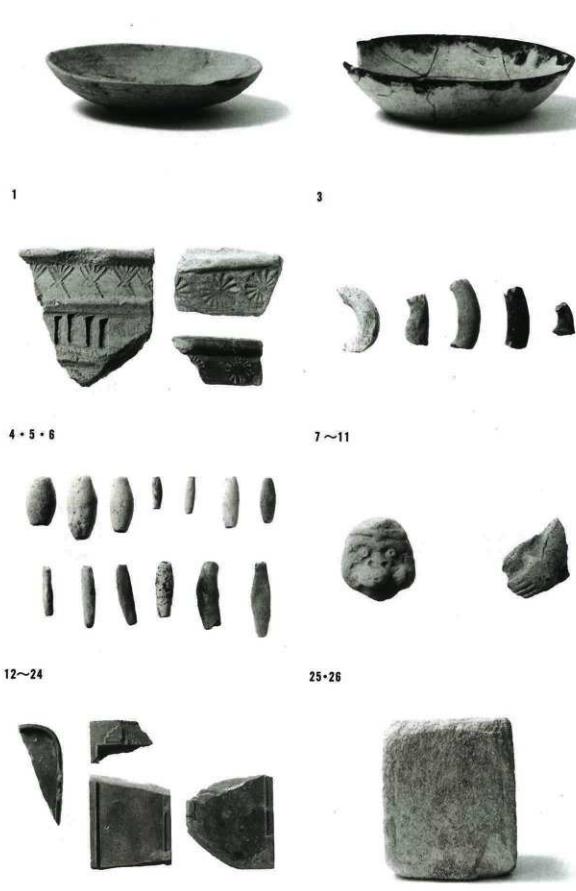
日本陶器



図版17 日本陶器



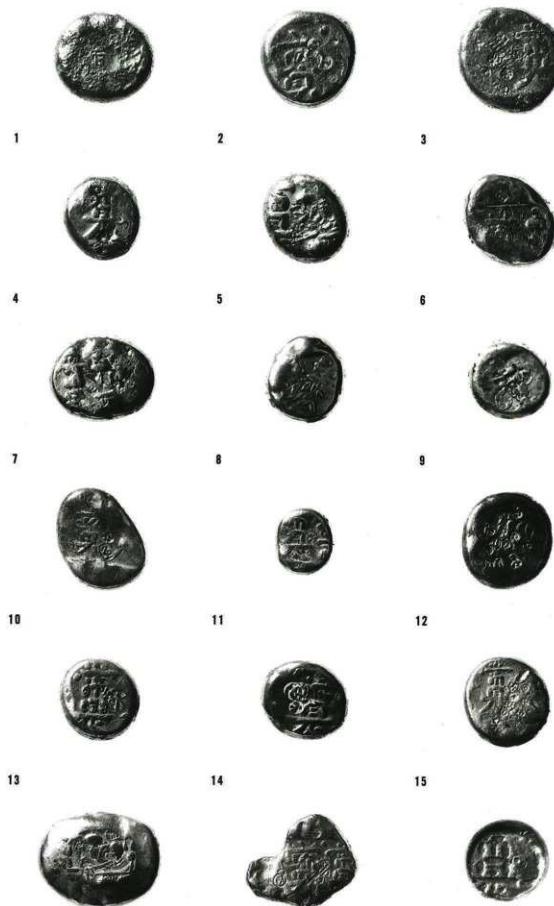
図版18 土・石製品



1~4

5  
—126—

図版19 豆板銀



16

17

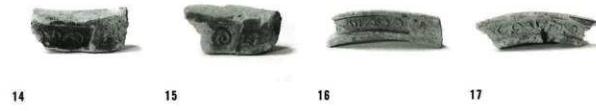
—127—

18

図版20 金属製品



図版21 瓦



報告書抄録

ふりがな	はらじょうあと						
書名	原城跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名	南有馬町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第2集						
編著者名	松本慎二						
編集機関	南有馬町教育委員会						
所在地	〒859-24 長崎県南高来郡南有馬町乙1023番地 TEL 0957-85-3111						
発行年月日	西暦 1996年 3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 道跡番号	東経 ° ° ° °	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
原城跡	長崎県 南高来郡 南有馬町	42-371	6 32°37'25" ~ 32°37'38"	130°15'20" ~ 130°15'29"	19930831	300m <sup>2</sup>	学術調査
					19931110 19940906 ~ 19950210	650m <sup>2</sup>	学術調査
					19950905 ~ 19951102	400m <sup>2</sup>	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
原城跡	城跡	中・近世	階段遺構 竪穴遺構 土壤 石垣 かまど 整地層	<ul style="list-style-type: none"> <li>• キリシタン関係 十字架、メダイ、ロザリオの珠</li> <li>• 陶磁器 貿易陶磁器 国產土器、陶磁器</li> <li>• 貨幣 豆板銀、錢貨</li> <li>• 瓦 軒丸、軒平丸、筒瓦</li> </ul>			

南有馬町文化財調査報告書第2集

原城跡

1996年3月

発行 南有馬町教育委員会  
〒859-24 長崎県南高来郡南有馬町乙1023番地  
TEL 0957-85-3111

印刷 株式会社 昭和堂印刷  
〒854 長崎県諫早市長野町1007-2  
TEL 0957-22-6000